

## 第 二 部

## 文献調査及び資料

### 23. 『地平を拓く (Broaden Horizon? — Geographies and Pedagogies of Gap Year)』

ギャップ・イヤー研究者

ニュー・カッスル大学・シンプソン講師 (Kate Simpson)

#### 1. A guide to the gap year

イギリスにおいてギャップイヤーは徐々に認知され大衆に広まってきた。しかし、ギャップイヤーに関する調査は非常に少ない。本論文では、歴史のおよび地理的観点と教育方法の観点でギャップイヤー活動を分析していく。また、本論文では、国際的なギャップイヤー(international gap year)、特に、「発展途上国でのボランティア活動」に焦点をあてる。参加者個人、ギャップイヤー受け入れ側、ギャップイヤー活動提供企業側から分析する。

また、旅行自体が人生経験になると考えられているが、ギャップイヤー提供企業では理論や実践などの経験を知識に変えるプロセスが欠如しているため、ギャップイヤーでの経験が参加者のプラスになっているのか不明である。

#### 2. Colluding discourses: Finding the gap year

歴史的な影響と中心的な植民地主義の役割りについて考えれば、植民地主義では訪問者と訪問先の力関係を作り出し、現代の旅行の形を伝えてきた。植民地主義は知識を習得のための旅行活動と結びついていて、旅行者は他者と出会う直接的で個人的な経験をする権利を与えられていた。しかし、旅行で知識を習得する権利を持っているにもかかわらず、旅行者は自分の知識に責任を取る必要がない。若者が成長する中での旅行の特権は歴史的遺産でありギャップイヤー活動の普及を手助けするものであり、現代の若者の大人への移行になった。ギャップイヤーは、変化にとんでいて開発発展の話、ツーリズム、グローバリゼーションが交わった特定の土地で見られるようになった。

旅行では、現地に赴き資源や知識と政治的圧力に触れることができる。国際ギャップイヤー活動は、その昔、リビングストーン宣教師がアフリカに布教したときに教育普及や医療活動を行ったことが元になっている。つまり、西洋人の役割りは(発展途上国で)教育の提供者かつモデルになった。また、植民地政策の中で、(西洋諸国は発展途上国の)領地や資源を征服して属国化してきた。(発展途上国への)旅行はその政治的影響力を維持するため、また、ヨーロッパ人である優越感を確認するためのものであった。旅行をすることにステータス(階級意識)を見出すのも優越感を確認するものである。欧州諸国(実はイギリス)の中級階級の子女による発展途上国へのギャップイヤー旅行は、この南北関係や階級意識の構図を助長させるものではないかと考えられる。

旅行をすることで経験則の知識を獲得することができる。しかし、学習意欲に欠ける旅行の場合、つまり旅行に快樂のみを求める場合、ロマンティックで無邪気な記憶にとどまり、知識の習得には結びつかない。また、旅行の特徴として、旅行先での行動や活動に責任を負わないことや旅行先での因習などに抵抗することが可能であることが挙げられる。それは歴史的な搾取的な背景を意識することなく、無知で表面的に活動することができるためである。

ボランティア活動は理想主義と征服欲と旅行欲から由来している。元来、生活安定化のため

の志願兵がルーツであり 19 世紀の女性たちが人道主義の立場で社会活動に従事したことから普及した。現在、ボランティア旅行は個人資質の発展や普段では立ち入ることができない地域へのアクセスを可能にしている。

開発発展理論(Development Theory)は無視され、ギャップイヤー産業は理論とかけ離れたところで運営されている。植民地政策が終了してから(発展途上国の)開発発展のために世界銀行などが設立され、国家主導の開発発展から経済主導の開発発展へ、と世界経済が遷移した。グローバルゼーションは西洋の消費経済を推進するものだが、世界規模での経済発展を加速した。現代主義化(Modernisation)は西洋化と同義となり、西洋化していない文明は「遅れている」とみなされ、西洋第一主義がはびこった。

また、西洋諸国が先進国であるのは植民地政策で成功したためであり、西洋諸国は発展途上国に資源や市場を依存しているという相互依存主義(Dependency Theory)が登場した。グローバルゼーションで経済構造が変化しても庶民の生活まで改善するののかという疑問と変更不可の(先進国との)社会構造によって発展途上国が抑圧される事態は(植民地時代より)変化しないというものである。経済支援だけでなく、外部の専門家に依存する受身の体制は依然として変化していないと考える。(発展途上国でのボランティア活動という)ギャップイヤー制度は、外部者の介入を価値あるものとして残し続けていくためにあるとも考えられる。

しかし、経済発展主導の理論と平行して、庶民(草の根)レベルの開発事業参加や持続可能な発展を目標とした代替理論(Alternative approaches)が脚光を浴びだした。また、メディアで扱われたため、寄付金で発展途上国に協力する形で一般からの参加が可能となり、専門家以外による開発協力が可能となってきた。一般参加が可能な開発協力としてギャップイヤー活動、エコ・倫理学ツーリズムが発展してきた。

観光事業(ツーリズム)は、個人と他人を強く意識する場である。個人は、所持品だけでなく考え方や文化も背負って旅行している。ツーリズムのプロセスは、人より文化価値の移動である。Urry や Heald によるとツーリズムはレジャーの要素がある旅行と捉えられている。

イギリスは特に財政面や社会条件においてツーリズムの発展に寄与しており、近代ツーリズムではグランドツアーという貴族階級の男子がヨーロッパを文化面で旅行するものがあつた。グランドツアーは階級を意味し帝国主義時代の価値を継承している。ギャップイヤーでは若者にとってグランドツアーは大人の自覚を得るためのものと捉えられている。

ツーリズムは現代性(Modernity)と絡み合い、現代観光業(Modern Tourism)によって維持されている。当初は、資本主義メカニズムを広げるために植民地政策として文民統治を伝える必要があつた。ツーリズムは社会的物理的な植民地主義の状態から抜け出し、現代性と結びつくようになった。ツーリズムと植民地主義は似ていて、植民地主義は資本主義を地理的に拡大し、ツーリズムも地理的に広がって消費社会を拡大している。さらにツーリズムは非日常品をも日常品化し市場を拡大させている。

外貨を稼ぎだす産業は、成功可能性の高い開発発展戦略と認識されている。ツーリズムは辺境地をも資本主義の世界経済に統合することができる。多額の初期投資なしに早い産業成長が可能であり、不況のあおりを受けない。しかし、環境や社会や文化的に影響があり、麻薬や売春と

いった悪影響については慎重に戦略的に無視され、批判されつつも経済的な面ばかり注視されている。最近では持続可能なツーリズムが求められてきている。

資本主義とツーリズムの関係に挑戦する旅行者がバックパッカーである。バックパッカーとは旅行者が通常経験することとは異なる辛い経験や危険に挑み、通常の旅行者なら明らかに訪れる箇所を避けている。旅行は、現代資本主義のまがいものから逃れ他の本物を探すために使われてきた。しかし、資本主義から逃れようとするバックパッカーが旅行することで、さらに資本主義市場の拡大に貢献しているという矛盾が生じているのである。ギャップイヤー産業も、現地に踏み入れる旅行を販売するために、資本主義を否定する旅行(本物でない旅行経験への拒否)を商品化してきた。エコ・倫理的ツーリズムはその一環である。

自身の探求と形成(Identity exploration and formation) はツーリズムにおいて重要な要素である。旅行では自己発見だけでなく他人にも出会う。他人に出会うことで自分のある一面を明らかにする可能性がある。

地理的移動は自身の精神的成長を暗喩し、子供から大人への成長を促す。グランドツアーでは自己実現の場所として地理的征服が含まれており、猟や砂漠横断や帝国主義の象徴なのか登山が行われた。ボランティア旅行では、空間的にも国境を越えることを通して、教員や医療専門家や建築家といった専門家の自覚をもって赴く。物理的境界を越えることは自身の境界を越えることを意味している。

発展途上国を旅行することは西洋の若者にとっては、自覚を持って経験したり、はっきりと個人や国家の力を自覚するめったにない機会である。帝国主義時代にさかのぼれば、植民地は領土や自分を見出したり自分を表現する場所だった。その時代の活動はギャップイヤー活動に見出すことができる。

広告で使用される画像は同世代の旅行者に影響している。植民地化のイメージを使用し、同世代用に(植民地を)作り直すためにも旅行の歴史的意義から絶対的な協力が要るといった内容は、ギャップイヤーの元になっていて、疑問視する必要がある。Tickle氏は、ギャップイヤー活動が植民地政策を真似ていると指摘している。個人と他人の認知、海外遠征、そして地元意見の反映がない、という3点である。だから植民地化のイメージの使用は適切なのである。

エコ・倫理的ツーリズムは休暇の快楽主義にモラル倫理的課題を盛り込んだものである。ツーリズムの悪影響を抑えるために誕生した。ポジティブツーリズムは多様な課題を統合したりホストコミュニティに経済と発展の機会を提供し、倫理的ツーリズムは壊れやすい環境の保護や倫理観を高めるものである。

グローバリゼーションは、経済的に政治的に社会的に文化的に、世界を圧縮した。よってギャップイヤー活動も世界基準で思考し、現地基準で思考していない。国際ギャップイヤー参加者は、世界規模での自覚を確立する機会を与えられている。また、文化的に影響を及ぼさずに現地の風習や民族衣装をまとうことで喜びを提供する例がある。

文化的資本(cultural capital)はBoirdieu氏によれば三種類に分けられる。教育と経験についてと取り巻く物質についてと機関についてである。教育と経験について、自己投資が増えるに

つれて改善されるもので、自己経歴を高めスキルを発展させ、労働市場における競争力を養う。取り巻く物質とは、図書や絵画、土産や無数のオブジェのことで、現地の生活と文化だけでなく先祖代々受け継がれるモノであり、場合によっては購入されて誤って使用されることもある。機関とは価値があることを認める定義のことで、例えば、文化的な特徴を定義したり、万人が持たない資格・資質を経験に裏打ちされることもあるが確立して定義する機関である。この3点はギャップイヤー活動の全証拠である。

傾向の理論(Theory of habitus)について、傾向とは歴史の賜物で個人を生み出し集約的な実践であり、過去の経験が今も息づいているものである。また時間をかけて築いた志向、思想、活動は正しく、いかなる規範やルールよりも正しい。また、傾向は意識や意思が働かない自発性である。文化と経済の傾向は、物事の是非に影響を与える社会的グループによって、価値と規範で構成されている。イギリスの中上流階級では、旅行が若者にとって歴史の主体になる。よってギャップイヤーと国際旅行は、活動が随時評価される必要がない傾向に統合されていく。

支配階級は、支配階級の価値や規範として彼らの体質・傾向を確立しようとする。企業価値としてのギャップイヤーでの経験は支配的な傾向にとって競争の一部である。ギャップイヤーは経験の文化的資本として徐々に標準化そして機関化(組織化)してきた。

経済状況の重要性はギャップイヤーで見過ごしてはいけない。ギャップイヤー活動の費用のほかに授業料が必要であり、また将来の就職の展望がみえないことがギャップイヤー活動へ参加しない原因となっている。このように、経済制約が文化資産へのアクセスを妨げており、資本主義がもたらす不平等を物語っている。社会不公平の外形は、不平等な象徴的資本へのアクセスや不平等な文化的競争力によって構成されている。ギャップイヤーと階級構造は複雑な関係である。

### 3. Methodology: Producing knowledge & inventing true

データ収集の方法として実践的かつ理論的な方法論を模索し、PAR(Participatory Action Research)をこの研究で採用することにした。インタビュー、参加型観察、文章内容分析がこの研究データの主要収集方法であり、異なるフィールド(ギャップイヤー参加者、受け入れホスト側、ギャップイヤー産業関係者)に対して幅広く使用している。

民俗学の観点では、植民地がどのように英国領に統合されたのか知るために研究が行われていたが実践的な知識の醸成(knowledge produce)アプローチが追加された方法が確立された。しかし、データが抽出された社会背景をも分析しなければデータの意味は失われるため、調査期間の延長、質問票と小話のやり取りによる観察、二次的データの拡張的ストーリー分析を柱として調査を実施した。

ストーリー分析では、真実よりも語り手の内容に注目し、そのストーリーに影響する事象や主体となる社会的構造や政治を分析する。その話から明らかになる複雑な力関係は、安全と規制のためにあるからである。また、経験は語ることで初めて知識となる。

反省(reflexivity)について、自身の立場を認識し客観的である研究者の視点を受け入れるプロセスである。知識の醸成にある状況を認知することが内省という概念の中核であり、内省のプロセスは明らかにされるべきである。しかし、すべてのプロセスを透明化することは不可能であり、そのことを研究者は知っておくべきである。

#### 4. A geography of gap year

ギャップイヤー産業は合法化した方法で空間と土地にギャップイヤー環境を作り上げてきた。割り切った表現でギャップイヤー受け入れ地を作り上げることと現地のニーズが産業を支えている。この割り切った表現で現地を単純化することは、開発発展過程において何かうまくやっていく(get on with)やり方を認めることになる。実際に多くのギャップイヤー産業では、前面に「開発発展事業(Development)」を打ち出さずに「現地発展に貢献する(Contribute to community)」など軟らかい表現を使用している。そうすることで、ギャップイヤープログラムは初期の開発発展のアプローチ(辺境地が消費機会を提示することで世界経済に組み込まれて世界的な経済発展を達成しようとするアプローチ)と一致する。うまくやっていく(get on with)アプローチは価値ある仕事を軽減するわけではないが、世界的に普及している開発発展の計画立案や活動を依然として無視するかぎり、(開発全体の長期的視野から検討したり、現場の優先順位から考えると(注: 開発の現場では、良かれと思って実行されたプロジェクトが既存のプロジェクトを妨害しているというケースが多々見られる))本当に価値ある仕事とみなされるかどうかはわからない。

現地やプロセスの単純化は、西洋の若者が許された旅行、探求、経験する地を作り出す。しかし、単純化によってパッケージ化された旅行と効率的なマーケティングでは、ギャップイヤー受け入れ側であるコミュニティでの意見や多様性を否定している。現在、ギャップイヤー産業は自身がギャップイヤープロジェクトの運営の動機や運営自体を説明するため、善良な意図と政治的無知潔白を念頭に掲げているが、そのような正当化は、ギャップイヤー産業が活動するには政治的文化的社会的複雑すぎる状況から考えれば、不十分である。開発発展についての議論に関係者として参加できていない事態は、ギャップイヤー産業の政治的潔白が実践的無知へと変わる恐れがある。ギャップイヤー機構が海外のホストコミュニティに意義深い方法で従事していきたいのなら状況は複雑であることを受け入れなければならない。ただうまくやっていく(get on with)だけでは不十分なのである。

#### 5. Institutionalising the gap year

ギャップイヤー制度は、公に認知されゆく中、高まる熱意と若者の旅行による経済効果の実現性を組み合わせ、若者向けに販売可能なギャップイヤー旅行の形で達成してきた。また、ギャップイヤー活動を制度として成り立つように販売価値を高めて精査してきたため、若者が購入できうるものになった。そういった販売価値を見出されるギャップイヤーについて、ギャップイヤーでは何が出来て何をすべきかという捉えやすい概念を明らかにするよう今まで以上に求められている。

ギャップイヤー産業が競争力をもち新自由主義(Neo-liberalism: 政府の庇護がない経済至上主義 / 小さい政府を目標とし民営化や規制緩和により資本主義にすべてを任せる主義)に参入する際に、販売用にギャップイヤー活動を定義する必要がありパッケージングする(セットとして纏める)必要があり、定義も商業用政府用メディア用に解釈されてきた。そしてギャップイヤーと認識する一貫した一連の価値が現れてきた。

ギャップイヤー産業では、新しいスキルの習得や就職に優位な自己経歴書の作成、冒険に満ちた旅行と結び付けてギャップイヤーで得られる価値を個人向けに表現している。特に、成熟性、

問題解決能力、リーダーシップ、チームワークといった能力がギャップイヤーでは習得できると捉えられ、企業側も能力の高い人を雇いたいと考えている以上、ギャップイヤーでの経験は就職に有利だと考えられている。つまり、旅行とギャップイヤーの経験は社会的ステータス(よりよい職業に就く)を購入する通貨のように機能している。また、ギャップイヤー業者によっては資格の販売へ結びつけ、職業訓練の様相を呈するものも現れだした。

## 6. The gap year experience

ギャップイヤー参加者が経験を理解し知識としていることは、ギャップイヤー産業が想定するものとは必ずしも一致していない。むしろ、異なる市場で与えられた表象的価値たとえば本や絵画や土産などの物品を搾取する方法で得た経験を管理し売り込んでいる。普通と見られることから逃れることがギャップイヤー参加者にとって大きな理由であり、別の土地へ赴いて活動する旅行への動機となっている。そのため、旅行には高い割合で占める休暇の要素はギャップイヤー活動には望まれていない。また、ギャップイヤー参加者は、通常の旅行と異なるギャップイヤー活動の本物の経験より、自身を旅行者(tourist)とみなしていない。ギャップイヤー参加者はギャップイヤー業者が提唱する以上に自分の活動を独自にどのような意義があるのか解釈分類している。実際に、ボランティアという身分の放棄は、ギャップイヤー提供業者が謳っている良いことをする人を否定していることを示唆している。このようにギャップイヤー産業が提供するものとは別のものをギャップイヤー参加者は購入している。

ギャップイヤー参加者は、当初望んだ異なる普通にはない経験を多岐にわたってギャップイヤーの経験と代弁している。求めた経験の本質は、スキルの習得や将来役立つ自己経歴書の充実ではなく、むしろ定義しがたい不明瞭な変化の概念や新しい経験や予期せぬ経験である。

## 7. Seeing is knowing: Encountering difference, producing knowledge

ギャップイヤー活動の課題が社会的責任の果たし方にあつたとしても、ギャップイヤー活動を取り巻く社会的政治的歴史的背景への関心が欠けているので、潜在的改善の見込みが極めて少ない。現在は、参加者、ホストコミュニティ、接触レベルの他人で構成されている。経験は十分な教育方法で、将来の社会的責任のある行動が取れると考えているが、しかしこれは歴史的に実践的に、古く不十分である。これは、時間と空間をつなぐ学習を推進するために、得た経験を批評力のある反省をする過程を取り入れることに失敗しているためである。結果として、ギャップイヤー参加者は他人とのふれあいで個人的に経験した状況的知識のみを獲得していることになる。批評力をもって反省するという過程を軽視するということは、経験で事実を得る方法のみが学習する手段とみなすことになるのである。Fraireは「経験の循環」という予期した経験のみ経験となる事態を危惧している。それは、経験は純粹に信じることを無知に変換する力だと想定されるため、本当だと信じたことが経験を通して真実だと認識されることをさす。

国際ギャップイヤープログラムによって得られる経験はギャップイヤー参加者だけでなくホストも作りだしている。ホスト側の経験については調査がなく必要である。重要なプロジェクトと追加的プロジェクトについてあり、ギャップイヤー参加者は現地住民ではないので重要でないプロジェクトに従事している。ギャップイヤー機関は開発発展機構ではないため、そのことを認識していて、またギャップイヤーによるプロジェクトが現地に与える悪影響を減らすためにその

社会的地位に甘んじている。もし、ギャップイヤーが文化交流や学びの場として機会を提供していくならば、教育的観点では参加者とホスト側の経験を取り入れて反映させていく必要がある。

ギャップイヤー産業の社会的課題については、旅行に参加した個人が「将来良いほうへ」導くという有望な個人が将来社会的責任を負ってくれるだろうという考えが根付いている。負担が現在から遠ざかるだけでなく権力が再分配されず特権をいくらか残していることを表している。そのような社会的責任の果たし方は、ほとんど可視できないか不平等や抑圧という社会的本質に抵抗できず、正義的な議題に対してお粗末な対策になる。社会構造状態に対する敬意の欠如は、社会的正義の代わりに社会的責任の課題が存在することを意味する。さらに、将来の活動へ直接つながることなく社会的責任は中立である。社会的責任と正義の効果的な学習は、社会変革を認識し従事することの両方が必要である。

もし、本当にギャップイヤー産業が社会変革への教育を課題として追及するならば、全世界を意識することに焦点を当てて教育法を適用させていく必要がある。全世界を意識する教育法は構造的に経験主義と同様に根付くだろうし、なぜそしてどのようにして不平等が存在するのか参加者に尋ねさせるような学びを推進するだろう。

## 8. Conclusion

歴史的に、植民地主義では、一連の権力関係だけでなく現代のギャップイヤーにつながる視点を構築した。この視点は、旅行者と受け入れ側ホストの間に助ける人と助けられる人の関係または提供者と要求者の関係になるものである。この関係はボランティアツーリズムの可能性を生み出した。

ギャップイヤー産業は、多くの自然や要望を保証しているが、依然としてホスト側の意見は反映されておらず、外部による干渉を推進する考えを継承している。また、貧困や途上国などについて西洋社会で知られていることをそのイメージとおりに提供するスタンスである。開発途上国でのギャップイヤーは、慣れ親しんだ家からの離脱のためであり、活動について求められるのはそのイメージどおりの状況下で望ましい程度の危険と対応できる安全を交えた通常の旅行ではない経験である。

提供するプログラムについては「開発発展(Development)」については触れていない。それは、ギャップイヤー活動によって悪影響が出ることを避けるためと信用を失わないためであり、うまくやっていく方針で可能なレベルのプロジェクトを遂行するにとどまっている。例えば、現地での単純な問題に対し(西洋もしくはギャップイヤー参加者にとって)明らかな常識的な解決策を提供している。

ホスト側はどのようにギャップイヤープログラムとその参加者を解釈しているのか、どのようにそのプログラムを地元の開発発展に組み込んでいくのか、自分と他人の区別を確立する中でプログラムはホスト側の当事者に対しどのような役割りをしているのか、調査が必要であり、ギャップイヤー旅行者の理解とホスト側の理解はつりあっていない。ギャップイヤー活動は、どこへ赴いたのかよりはどのように赴きどんな人であったのかという経験を重視している。

ギャップイヤーの職業化によって、ギャップイヤーは何ができるのかまたすべきなのかはつきりと定義し制度化された。一般的な進学や雇用から外れるとされるギャップイヤー活動も統合



され、実践方法も定型化した。ギャップイヤー産業は、ギャップイヤーを支援する傍ら販売可能なプログラムを提供している。同時に、学生は自己経歴書を充実させ将来修飾活動において競争優位にたつために、ギャップイヤーで得られる経験を購入している。そしてこの動向はメディア、政府、大学、雇用市場の注目を集めている。

ギャップイヤーが職業化し整備され広く世間に知られるようになったが、販売される製品は吟味されていない。ギャップイヤー参加者が独自に自分の経験を解釈している内容はギャップイヤー産業が提供しているものとは異なっている。経験を話す相手によって独自に解釈を変えて、ギャップイヤー提供者が提示する経験を独自に発展させ応用させている。また、自身をボランティア、観光者、旅行者と比較しギャップイヤー経験を別のステータスと捉えている。

ギャップイヤー産業では、旅行による教育的価値とボランティアツーリズムについて批判が上がっているが、教育法を理解する点については証拠がない。むしろ、経験した現実が学習そのものであるとされていて、活動と反映のサイクルの重要性を強調している。ギャップイヤー産業は整備されていない経験に頼っていて、教育法として理論的ではない。教育法としては整備されていないが、ギャップイヤー産業では、他人と接触し理解することに信念をおいている。また教育法が整備されていないことは、理論から離れているのと同じで、政治的歴史的背景から離れているのと同じである。そこで私は、ギャップイヤーでの教育法の整備を求める。

ギャップイヤーでの教育法では社会的正義について言及する。多くのギャップイヤー機構では、ギャップイヤー参加者が発展途上国との同情的関係を築くことを社会的課題としている。ギャップイヤー参加者は空間と時間にわたって得た経験を結びつけることがない。そのため、一つの土地でそのような経験が難しくても別の場所で経験と活動を結びつけるためにも、貧困のような状況の構造的な本質は明らかにされる必要がある。適切な教育法の確立のためには、結びつけることが可能で複雑な土地を単純化し、論理的歴史的な孤立を捨て去る必要がある。そして、人々と場所と時間の結びつきを明らかにし、国際開発の複雑な実践手順を尊重していくことを求めたいものである。そして、視野とスキルを広げ、研究と正義に基づいた教育法を確立していく必要がある。

## 2. 『地平を拓く (Broaden Horizon)』の要点

ギャップイヤーについて、一般的な進学や就職前の時間に、発展途上国でのボランティア活動について焦点を当てている。ギャップイヤー参加者は主に英国学習圏のミドルクラスの白人のケースで、旅行先の発展途上国はラテンアメリカ(スペイン語圏)のケースである。著者本人は上記のプロファイルに該当。

歴史的には、白人宣教師がアフリカで布教活動として教育や医療を提供したことに始まるが、植民地政策で白人が発展途上国に入植したことで、「白人が何かを与えて(provider)現地人がもらう(needy)」力関係の構図が加速した。発展途上国でボランティア活動するのはこの構図の延長だと思われる。開発発展の現場では先進国がプロジェクト単位で発展途上国を支援するまたは干渉するケースがあるが、やはり先進国が与えて発展途上国がもらう構図であり、ボランティア

の構図と似ている。最近では持続可能な発展を目指すために現地主導の開発プロジェクトが人気を博していることもあり、ギャップイヤーはこの流れから外れている。

旅行は、現地で新しいことを学び、他人と知り合い、自身と他人を意識するなど経験の宝庫と考えられ、また地理的移動が親からの巣立ちもしくは個人の精神的成長にたとえられ、若者には必須と考えられた。旅行+発展途上国=観光業。観光業は発展途上国にとっては貴重な外貨獲得の産業であり、工業に比べて多額の初期投資が不要なため、開発発展のためには主要な戦略とみなされている。

社会経験は人生に必要であるが、ただ経験するだけでなく行動と反省という循環プロセスをたどることより経験が知識に変えることで人生が豊かになるのである。

ギャップイヤー産業は学生のニーズと発展途上国で(人材要求の)ニーズのあるところへ、販売可能な旅行を提供してきた。しかし、販売プロジェクトについて開発協力を前面に押し出さないのは、ギャップイヤープロジェクトが現地に悪影響を与えることを恐れていることである。プロジェクト自体も主要な開発ではなく追加的なプロジェクトであり、ギャップイヤー参加者なら容易に解決できる問題にしている。また、ギャップイヤー産業は「経験する」機会を提供しているが「反省する」機会がほとんどない。そのため、経験が知識に転換できているとは限らない。社会的責任については、ギャップイヤー経験者が将来大物になった場合に実現してくれるものだと信じ、特に行動をおこしてはいない。そして政治的、歴史的に潔白である立場をとっている。

ギャップイヤー参加者が活動に期待するものは、(実家では)ありえない生活であり旅行では味わえないまれな経験である。また、ギャップイヤーで様々な経験を積むことによって、将来就職に有利になりたいと考え購入する参加者もいる。しかし、ギャップイヤー提供者とおりの経験をする以上に、ギャップイヤー参加者は自分の活動を見直し、自分なりに解釈して応用させている。

また、ギャップイヤー産業は、現地を簡単に表現してイメージで商品を販売するため、参加者もイメージありきで得た経験を知識として認知していく。現地で得た体験を省みるプロセスがなかったり、自身が抱いたイメージを確認する勇気がなければ、個人レベルの知識となり誤った知識の習得になる可能性がある。逆に、現地はイメージどおり「発展途上国」を続けなくてはいけないし、現地もその状況に甘んじているケースがある。ギャップイヤー活動の社会的責任について、ギャップイヤー参加者は空間と時間を結びつけることを総合的にしないため社会構造に関して無関心であり、現地を変える意思がなければ果たすことはできない。

ギャップイヤーの教育法を整備していくことが必要である。そのためには土地を単純に表現することをやめて複雑な社会であることを認知し、論理的歴史的的政治的に孤立をさせて、ギャップイヤーについて世界の理解を得て不平等をなくしていきたいものである。

## 『地平を拓く (Broaden Horizon)』の要旨

Broaden Horizon を読み終えて、このギャップイヤー研究会においてこの論文がどのような役割りを果たすのか、纏めなおした。Broaden Horizon は海外ボランティアのギャップイヤー活動に焦点をおいているため、ギャップイヤー全体像からみれば一部分についての是非を論じていることになるため注意が必要だが、これからギャップイヤーを導入しようとするのに留意点とし

てあげることができるのではないかと思われる。

### ギャップイヤー制度そのものの課題

ギャップイヤー制度は、植民地時代に英国の上流階級が見聞を広めるために諸国を旅行したことに始まるとされているが、西洋人が各地を旅行する構図は植民地政策の下にあり、現地では何かを提供する構図は宣教師が現地で教育や医療を提供したことに始まる。当時の植民地が現在では途上国であることが多いことから「西洋人が提供し(provider)」「途上国の現地人が要求する(needy)」の力関係が構築されてしまった。西洋人がギャップイヤー活動として途上国でボランティア活動することはこの力関係を維持することにならないか、と懸念が残る。

Broaden Horizon はギャップイヤー活動でこの力関係を崩すことができるのか問題点を整理し、関係改善のための取り組みを提示している。

### ギャップイヤー産業界(gap year industry)の問題点

発展途上国へのボランティア旅行を販売するギャップイヤー産業は、ギャップイヤー参加者を募るため、訪問先発展途上国について簡単に表現してイメージを作り上げている。非日常的な経験を求めてギャップイヤー参加者は現地に赴くが、経験を知識に変える「反省」のプロセスが準備されていないため、現地での個人的な「経験」を「知識」だと解釈してしまい、また、参加者が実際のイメージと異なった経験を正視できないケースも発生している。それもふまえてか(本末転倒だが)ギャップイヤー産業は、イメージと異なることがないように現地の本格的な改善を起こそうとしていない。

また、そのボランティア活動は、本格的なものではなく追加的な(ギャップイヤー提供者・参加者に)責任負担がかからないプロジェクトにとどまっている。現地のニーズに合ったプロジェクトであるかどうかは、ギャップイヤー提供会社による。しかも、ギャップイヤー産業は個人が顧客のため、個人のニーズにあったプログラムを提供しており、長期視野を踏まえた現地発展のためのものではないと思われる。世界的に、現地主導の持続可能な発展を目標としたプロジェクトが主流であることを考えると、ギャップイヤーのプログラムは資金提供者主導の現地干渉(donor intervention)に近く、開発発展の理論(Development Theory)から逸脱している。

ギャップイヤー産業は、ギャップイヤー参加者を募るために、将来就職に有用なスキルを身につけることができると広告している。実際に企業は多様な経験の豊富な人材を求めているがギャップイヤーを高く評価している。しかし、問題や目的意識をもたずに参加しても新しいスキルは身につかないし、(先ほども挙げたが)経験を知識に変える反省のプロセスが整備されていないため、必ずしもギャップイヤー産業が推奨する企業が求めるスキルが身につけているとは限らない。(私の意見だが)責任の少ないプロジェクトで、反省のプロセスなしにどのような就職に有利な経験が得られるのか疑問である。

著者は、ギャップイヤー産業の発展途上国の開発発展への取り組みに対して、提言している。ギャップイヤー産業は、理論的政治的歴史的に悪意はないという潔白を装って訪問先途上国を単純化して表現しているが、実際はイメージ以上に複雑な政治や歴史の結果生じた現実であり、ギャップイヤー参加者はそのことを認識して自分の活動を解釈するべきである。なぜ訪問先には貧困があり不平等があり白人が提供し続けているのか意識し、開発発展理論の主張する現地に根ざ

したプロジェクトをめざし、ギャップイヤー参加者が将来大物になったときにこういった複雑な問題に取り組んでくれるだろうという甘い考えをすてて、立ち向かう必要があると強調している。そのためにも、政治的歴史的な結び付けを促す「反省」というプロセスをギャップイヤー活動の教育の一環に取り入れていくべきだと著者は主張している。

## 終わりに

Broaden Horizon をギャップイヤー産業の問題点として解釈したが、海外へのギャップイヤーを導入するときに留意すべきところは、二点あるように思われる。それは、「海外ギャップイヤー活動で国際感覚がつくのか」と「海外ギャップイヤー産業をどのように整備すべきか」だと考える。

国際感覚養成について、生活自体が非日常だったという論文内のインタビューコメントから考えれば、十分に養われると思われる。ただし、経験を体系的に知識化するプロセスが欠けていて、経験の解釈が個人レベルにとどまったとあり、事前に準備をせずに渡航した学生に対するインタビュー回答のレベルが低かったことから、事前準備と事後反省は意識的に整備する必要があると考える。

海外ギャップイヤー産業について、資本主義内の観光旅行と捉えるか開発発展のためのボランティア旅行と捉えるかによって、経済主導か国家(?)主導かの位置づけがなされると考える。Broaden Horizon では、ギャップイヤー産業が資本主義内の一企業だったことより社会的意義が果たせるチャンスを放棄していると捉えている。イギリスはすべて民営化した企業社会なのでそのうちNGOあたりが代わる可能性があるが、日本はイギリスと異なりすべてを完全民間に任せられているわけではない。まったくの民間企業に問題点をふまえた規制を設けるのか、政府もしくは大学直轄の準民間企業に委託するのか、選択できると思われる。

## 24. 島根大学第1回公開研究会「短期海外研修制度の現状と課題」の概要について

田中正弘

平成20年9月18日(木)の午後3時～5時50分に掛けて、島根大学松江キャンパス教育学部棟2階25番教室にて、第1回公開研究会「短期海外研修制度の現状と課題」を開催した。本研究会は、文部科学省平成20年度秋季入学研究委託事業の一環として実施したものであるが、事例報告の対象機関の選定に当たり、「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に亘る社会経験を可能とする取組みに関する調査研究(中間報告書)」(研究代表:秦由美子)を大いに参考とした。研究会への参加者は講演者や司会を除き16名であったものの、活発な議論が飛び交い、充実した研究会となった。なお、研究会のプログラムは、次頁の研究会ポスターを、研究会の詳細は、報告書「大学の秋季入学に関する実態調査研究—AO入試、入学前教育、短期海外研修の検討—」を、それぞれご参照いただきたい。

研究会では、始めに、名古屋商科大学の事例を、酒井亮征先生からご報告いただいた。名古屋商科大学では、2005年度からギャップイヤープログラムという名称で、1年生を対象に春学期を利用した半年間の短期海外研修を、組織的に実施している。このプログラムは、事前研修、海外研修、事後研修をひとまとめにして単位化(国際教養論:10単位)しており、学生の自主的な活動を重視している点に特徴がある。そして、帰国後に学生が秋学期の学習に円滑に移行できるように、支援体制が確立している点も注目すべきである。

このプログラムの課題は、学生が修得した能力(主体性の向上など)をペーパーテストで測ることが困難なことである。つまり、アクレディテーション制度などで強調される「単位の実質化」という観点から、工夫・改善が要求されると述べられた。

次に、倉敷芸術科学大学の実例について、小山悦司先生にご紹介いただいた。名古屋商科大学と同様に、倉敷芸術科学大学でも、1年生を対象としたギャップ制度を導入したが、名古屋商科大学と異なる点は、前期(春学期)ではなく、後期(秋学期)に設定したことである。この理由として、できるだけ早い段階での友達づくりを重視していること、及びギャップ制度の利用者の導入教育に十分な厚みを持たせたいことなどが述べられた。また、倉敷芸術科学大学のギャップ制度は、短期海外研修以外に、企業での就業体験などを取り入れている点に特徴がある。

倉敷芸術科学大学の実例では、特に企業での就業体験に、高い教育的意義が見られた。しかし残念ながら、このギャップ制度は現在休止状態になってしまっている。この失敗の原因として、全学的な理解と協力を得られなかったことや、制度運営の事務組織を整備できなかったことが、教員有志のオーバーロードに繋がってしまったと述べられた。とはいえ、この失敗は最終的に、キャリア教育に関する現代GPの採択という形で、実を結ぶのである。

最後に、福村英俊先生からは、ワーキング・ホリデー制度の概要についてご説明をいただいた。ワーキング・ホリデーという便利な制度を利用している大学生の数は、それほど多くない。この一因として、大学との連携体制が整っていないことがある。ワーキング・ホリデー制度を大学のカリキュラムの上にもどのように載せていくべきなのか、今後検討が必要であろう。

本研究会の成果として、以下の提言を行いたい。

短期海外研修制度の利用者は新入生の中では少数派であるが、これらの制度の構築や継続的な実施には多大な労力が大学側に求められる。少数のために多大な労力を注ぐことに大学全体が賛同できないのであれば、言い換えれば、組織的な対応ができないのであれば、短期海外研修制度の導入を試みたところで、その苦労は水の泡になりかねない。

優れた努力が様々な大学で行われていることは、本研究会で紹介したとおりであるが、それは一部の教職員の献身的な負担に因るところが大きいのである。彼らに必要な支援が欠けていないかどうか、国レベルの議論で再考してほしいと願う。

## 25. 高等教育機関によるボランティア活動について

本章においては、高等教育地域活性化補助金 (Higher Education Active Community Fund: HEACF) により資金援助を受けたボランティア・プロジェクト (2004年 4月) を紹介する。

### 1. 高等教育アクティブ・コミュニティー補助金 (HEACF)

高等教育アクティブ・コミュニティー補助金 (HEACF) は、イングランド高等教育財政審議会 (Higher Education Funding Council for England: HEFCE) 及び政府の先導的地域活性化活動 (Active Community initiative) から補助金を得ている (HEFCE (2004) *Student volunteering: case studies of good practice from HEACF - Projects funded by the Higher Education Active Community Fund; case studies compiled by the Careers Research and Advisory Centre, 2*)。

HEACF は、HE のボランティア活動の実践家やマネージャーにその活動のための財源を提供する目的を有する。HEACF は、地元での地域活動に高等教育機関が主要な役割を果たすことを期待して支援し、補助金を配分する機関で、2002年3月に活動を開始し、2006年の8月にはその活動が終了することになっている。高等教育機関が地元根付いたボランティア活動を実施していくための基礎作りのための期限付き支援と考えられる。

高等教育機関は、単独でのボランティア活動あるいは、ボランティア団体との協働も奨励されている。例えば、今回飯塚氏が調査に当たったギリスのコミュニティ・サービス・ボランティアズ (Community Service Volunteers: CSV) と日本の CEC Japan Network 文化教育交流会との協働でのボランティア活動に相当するもので、イギリスの CSV と連携したボランティア・プログラムは、英国福祉留学「ボランティアホリデー (UK Volunteer with CSV)」と呼ばれている。

本報告書では、HE 機関に在籍する学生や教員によるボランティア活動の優れた実践例を挙げているが、何故ボランティア活動への支援を実施するのかという理由は、ボランティア活動を通じて、「地域と地元高等教育機関との連携を促進し、ボランティア活動を通じて教員と学生が視野を拡大し、新たな見方を得ることが出来る」という点と、「学生が就業に必要な技術を獲得し、各人の人生において生活の質を高めることが可能になる」という理由からである (Volunteering helps to promote a fairer, more cohesive society in which individuals feel they have a stake. It also helps to build bridges between communities and local organisations such as HEIs. Increasing the involvement of HEIs with their communities should help staff and students to gain new perspectives, enable students to develop employment skills, and help to enhance the quality of life in disadvantaged sections of the community.)。

### 2. HEACF 学生ボランティア活動内容

2003年12月には、HEACF 学生ボランティア賞 (Student Volunteering Awards) の授賞式があった。以下が各賞を受賞したテーマと大学であるが、大学に関しては、92年以前の旧大学及び92年以降の新大学双方が受賞している。

- 1) Manchester Student Volunteers Taster Sessions  
(University of Manchester and UMIST) 旧大学
- 2) 'Just Do It' Recruitment Event  
(University of Northumbria at Newcastle) 新大学
- 3) Project Leaders Scheme (University College London) 旧大学
- 4) A Blueprint for Sustainable Volunteering (University of Sheffield) 旧大学
- 5) Promotion of volunteering as an opportunity for students  
(London Metropolitan University) 新大学
- 6) Sponte Community Volunteer Scheme - It matters to you. It matters to them  
(Staffordshire University Students' Union)
- 7) TVU Volunteers - Volunteering Awareness  
(Thames Valley University) 新大学

他に、高く評価されたボランティア活動は、次の2つである。

- 1) Involve (University of Birmingham) 旧大学
- 2) University and Students' Union Partnership (University of Plymouth) 新大学

その他の HEACF の支援を受けたボランティア活動

新・旧両大学が支援を受けているが、やはり新大学が大半といえる。

#### 1) 評価関係

AR 1: Making it count - in the long term

London Metropolitan University

AR 2: Leadership, Enterprise and Citizenship Award

Middlesex University

AR 3: HEACF Volunteering Module

University of Derby

AR 4: A Celebration of Volunteering

University of Salford

AR5: Online Learning Material for Volunteers

Manchester Metropolitan University

#### 2) コミュニケーション

C1: Voluntary Services Unit (VSU) Website

University College London/UCL Union

C2: Points of Contact

University of Huddersfield

C3: "I Want More..." Project

University of Newcastle upon Tyne



C4: Promotion of Volunteering as an Opportunity for Students

London Metropolitan University

C5: The Community Newsletter Project

University of Northumbria and University of Newcastle

### 3) 委託事業

DP1: STAX (Students Taking Action for Community Change)

Oxford Brookes University

DP2: Running a Grant Scheme

University of Cambridge (伝統的大学)

DP3: HEACF and Community Brokerage

University of Gloucestershire

DP4: The Community Volunteers Project; Innovation Fund

University of Teesside (研究評価及び教育評価の非常に低い大学)

DP5: Building a Bridge into the Community

Manchester Metropolitan University

### 4) 評価と維持 (sustainability)

ES1: Measuring the University's Community Activities

University of Cambridge (伝統的大学)

ES2: Participatory Evaluation of Volunteering with Community Groups

Manchester Metropolitan University (新大学)

ES3: Project Leaders Scheme

University College London/UCL Union (旧大学)

ES4: A Blueprint for Sustainable Volunteering

University of Sheffield (旧大学)

### 5) インフラ

IN1: Volunteer Management

Imperial College London

IN2: A Framework to Manage Volunteering Projects

Lancaster University

IN3: Quality Standards

London Metropolitan University

### 6) パートナーシップ

P1: University of Liverpool HEACF Project Team

University of Liverpool

P2: Trash Splash

University of Liverpool  
P3: University and Students' Union Partnership

University of Plymouth  
P4: The Mentoring and Guidance Project

London South Bank University  
P5: Building Community Links, Training Event

Oxford Brookes University  
P6: Live Guides

Kent Institute of Art & Design  
P7: Sports Volunteer Scheme

University of Manchester  
P8: Community Engagement

University of Leeds

#### 7) リクルート

R1: Manchester Student Volunteers Taster Sessions

University of Manchester and UMIST

R2: Safe and Sound Recruitment for Sports Volunteers

University of Oxford and Oxford Brookes University (伝統的大学と新大学の協働)

R3: University of Warwick Volunteering Fair

University of Warwick

R4: 'Just Do It' Recruitment Event

University of Northumbria at Newcastle

R5: Quality Checks on Volunteers and Volunteering Opportunities

Manchester Metropolitan University

R6: Sponte Community Volunteer Scheme

Staffordshire University

R7: TVU Volunteers; Volunteering Awareness

Thames Valley University (研究評価及び教育評価の非常に低い大学)

R8: Interviewing Volunteers

University of Brighton

R9: Recruitment of Volunteers at a Freshers Fair

University of Lincoln

R10: Mentoring Project

[York St John College](#)

R11: Using HEI and HEACF resources to overcome a barrier to volunteering

University of Liverpool

R12: University of Leeds Refugee Support Network

[University of Leeds](#)

## 8) 訓練

T1: Involve

University of Birmingham

T2: Specialist Volunteer Training for HEI staff at MMU

Manchester Metropolitan University

T3: Lancaster University Volunteering Unit; Volunteer's Handbook

Lancaster University

T4: MMU Volunteers Handbook

Manchester Metropolitan University

T5: Student Mentoring - Training

University of Bath

## 9) 小規模グループに関するボランティア活動

V1: Inmates; Prison Visiting Volunteers

Goldsmiths College, University of London

V2: Mentoring at Campion Catholic High School for Boys

Liverpool Hope University College

V3: The Befriending Project

University of Hull

## 3. 個別大学例

今回の GY 研究調査において、ロンドン大学・インペリアル・カレッジがボランティア活動に積極的との情報を研究代表者（秦）が得ていたため、共同研究者の訪問を期待していたが果たせなかったため、本年度には、研究代表者が訪問する予定では在るが、一例を挙げておく。イギリス側の大学としては、正面から「大学として GY 活動にどのように参画しているのか」という問いに関しては、殆どの大学が否定的に答えることは予測していた。何故ならば、GY はあくまで各生徒や学生の希望や決定に拠るものであるからである。しかし、形を変えた GY はイギリスの大学においても種々存在している。それ故、今回渡英した共同研究者が非常に多くの成果を挙げることができた。

（文責： 秦 由美子）

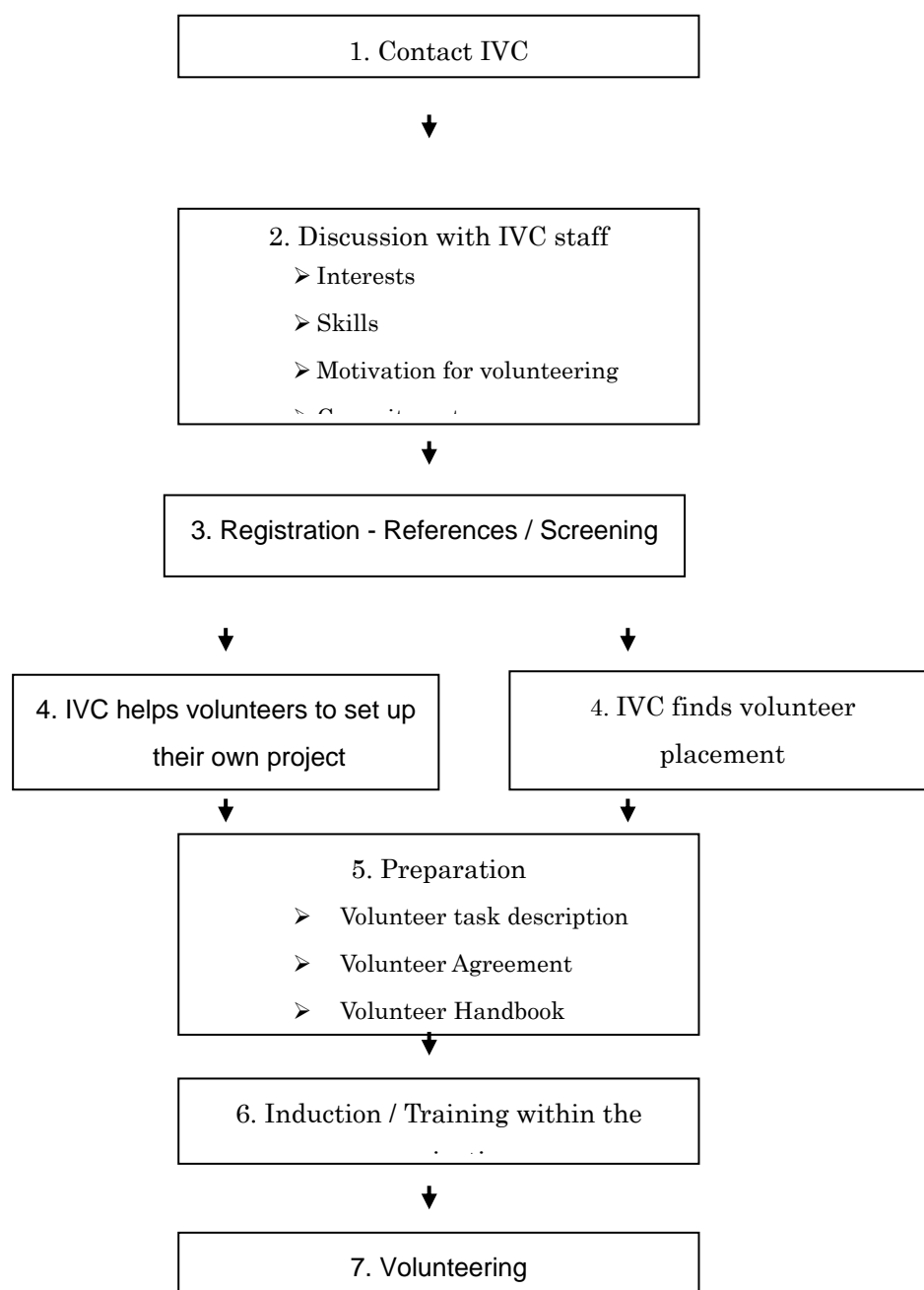
## 26. ボランティア運営 – インペリアル・カレッジ・ロンドン (Imperial College London)

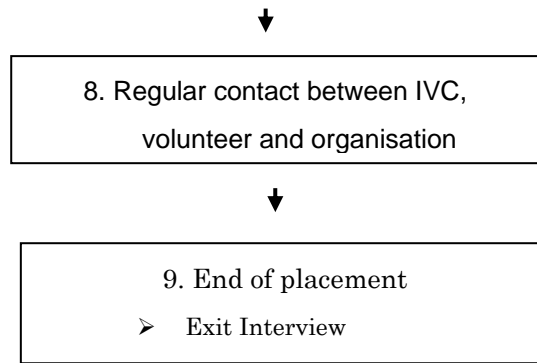
インペリアル・ボランティア・センター (Imperial Volunteer Centre : IVC)は、2003年2月に立ち上げられた。センターの目的は、教員と学生双方にボランティア活動を通じて地域との交流機会を広げることである。

インペリアル・ボランティア・センター (Imperial Volunteer Centre : IVC)が提供するボランティア活動

### フローチャート1

ロンドン大学・インペリアル・カレッジのボランティアまでの流れ





ボランティア活動の実施希望者は、登録書に記入する。関心のある活動があれば、そのプロジェクトに希望を出すと、2日以内に結果が出、参加・不参加が判明する。IVCセンターは柔軟に対応することが望まれており、全ての情報は毎週更新され、ウェブサイトで入手可能となる。

活動は、教員及び学生向け情報誌、学生向けTVやラジオ、掲示板、ポスター、パンフレット、ニュースレター、記事等で示される。センターは教員や学生に活動に関して出来る限り啓蒙し、認知してもらうことも目的としている。現在、38項目に分類された300プロジェクトが実施されている。

IVCは、特別必要性のある訓練には、センターは訓練を実施することも事業の中に含まれている。例えば、介護援助法やスポーツの指導法等である。ボランティア活動の実施希望者はそれら訓練の費用は負担する必要はない。

IVCは、センター或いは外部団体による定期的な評価を受けることになっている。評価は非常に重要で、活動の成果が調査され、活動形態の変更を提示したり、活動を拡大するために外部団体との関係を密にすることも求められる。

毎年、優れた活動に対しての褒賞があり、2003年の5月には60以上のインペリアル・ボランティアがカレッジ主催の公式のパーティーに招待され、賞状と報奨金が渡された。

HEACEの補助金のお陰でIVCは、活動に参加する教員や学生のみならず、地元の協同参加者にも補助金を援助することが可能となった。

これら活動を通じて重要な点は、

- 1) ボランティア政策を打ち立てること
- 2) 柔軟な対応を心がけること
- 3) 迅速かつ有益なサービスを心がけること
- 4) 活動団体を支援する際に、窓口にやってくるのを待つのではなく、適切と考えられる団体や個人に、こちらからコンタクトをとること
- 5) 支援決定後も、常時連絡を取り合い、必要な情報を相互に提供しあうこと

6) 常に素晴らしい活動には報奨する体制をつくり、活動のための刺激となるよう配慮すること

Minna Ruohonen, Imperial Volunteer Centre Manager

Imperial Volunteer Centre

Imperial College London

Union Building, Beit Quad

Prince Consort Road

London, SW7 2BB

Tel 020 7594 8141

E-mail [Volunteering@imperial.ac.uk](mailto:Volunteering@imperial.ac.uk)

[www.imperial.ac.uk/volunteering/](http://www.imperial.ac.uk/volunteering/)

(文責： 秦 由美子)

27. 2008年2月29日のギャップ・イヤー・ニュース[GAP YEAR NEWS 29. 02. 08]

— 政府のギャップ・イヤーへの拠出 — 1000万ポンド —

秦 由美子

本ニュースは、ギャップ・イヤー・コム (Gapyear.com) の創設者であるトム・グリフィス氏、による GY ニュースが BBC で 2008 年 2 月 29 日にて出される。

政府は、若年層への GY のボランティア計画に 1000 万ポンドを拠出。

国際開発省 (Department for International Development: DFID) では 2 月 29 日に、18 歳から 25 歳までで生活、職業、学業等で恵まれない若年層の発展途上国へ行き、彼らの生活を体験する地球規模でのボランティア計画を発表。

今後 3 年間に亘り、2500 名の若者を対象とするボランティア・ワークで、1000 万ポンドを支援される。この企画は南バーミンガム・カレッジの協力によるものである。

非常に異なる背景を持つ人々と生活したり協働することで、新たな技術と可能性を拓く。地球市民となる。これは地元地域でも活用される。

12 のグループが、Ghana, South Africa, India, Malawi or Peru に出向く。まず、ガーナと南アフリカから。

10 週間を発展途上国での開発計画のための例えば、環境保護や HIV・AIDS 関連の仕事をする。

BUNAC の会長であるケネディー (Callum Kennedy) は、「BUNAC がこの DFID 企画に参加できることを期待している。開発途上国へのボランティア・ワークはそれができる時間的、経済的余裕がある人々にのみに頼むべきものではない。」

BUNAC [www.bunac.org](http://www.bunac.org)

(For more details about gapyear.com Newswire contact Vicky lee  
E: [vlee@gapyear.com](mailto:vlee@gapyear.com), T: +44 (0) 1473 230 766)

(文責: 秦 由美子)

## 28. Volunteering and health Nov07.doc

### Skill: National Bureau for Students with Disabilities

16歳から25歳までの若者は、まだ将来のキャリアを見つけるまでの途上で、どのように生きるかが見えていない状態と捉えられている。そのため、学習・技術審議会 (Learning and Skills Council: LSC) は、地域での建設的な活動に無報酬で従事する若者に役立つ制度があるべきだと考えている。

そのためにも、その解決法の一つとして、教育省が実施しているボランティア活動のための教育維持奨学金 (Educational Maintenance Grant: EMG) の対象枠を広げ、自分に合った職探しをしている、あるいは、将来の目的も明確化していない若者がとる一種のギャップ・イヤーに相当する「ボランティア休暇 (volunteering breaks)」も、この奨学金の対象に含めようと考えている。奨学金有資格者には、一定期間有給で就労する若者や教育や訓練を受けている若者も含まれる。

LSC は、企業に責任を持つ審議会で、ボランティア活動の経験を通じて被雇用者の潜在能力が引き出され、技術も習得されることを雇用者側に認識させることに力を注いでいる。

(Department for Children, Schools and Families: DfCSF)

教育担当大臣であるランメル (William Rammell) は、2006/7年度にはMGを受ける資格の在る新フルタイム大学入学生進学率が55%になるといった。その内、28%の学部生は満額の2,700ポンドの奨学金を受け、半数以上が全額ではないとしても奨学金を受けることになっている。

ランメルは、年収17,500ポンド以下の家庭出身学生は、満額2,700ポンドのMG、17,501ポンド以上37,425ポンド以下の学生は、部分的な補助金を受けられる。それ以上の奨学金は、各高等教育機関が提供するとしている。例えば、学費納入の延期等。

Skill: National Bureau for Students with Disabilities は、障害者である若者は、しばしばボランティア活動の受け手とは見なされるが、提供者とは見なされない。しかし、これは根拠の無いことであると考えられる。

障害者が働けるように Access to Work (AtW) 補助金も支援されている。また、就学中の障害者のためには、Disabled Students Allowance (DSA) in Higher Education and Additional Learning Support (ALS) in Further Education が用意されている。

障害者が、ボランティア活動に従事することは不利で、限られている。彼らを支援するボランティア組織も支援困難な状況にある。ボランティア活動に従事したいと考えている障害者が出来る限りその活動に従事できるために、Skill は、政府が Access to Work (AtW) 補助金に相当する補助金の支援を推奨した。また、Skill は、ボランティア活動する若者たちのための情報や助言を交換し、彼らの活動を促進するためにボランティア団体が障害者団体と協力体制を取ることも推奨した。

(文責: 秦 由美子)



## 29. タイムズ紙教育版新聞 (Times Education Supplement)

「ギャップ・イヤーは、生徒に貴重な就労経験を与える

(Gap year 'gives students valuable workskills' )」(2007年11月6日掲載)

雇用側は、仕事の社会に出て行く若者の準備をするには、大学の学位のみでは不十分だと信じている。

ボランティア組織である Global Vision International の研究によれば、管理者は学生のリクルートに際しては、チームワーキング（組織活動）や進取の精神、リーダー精神、といった価値ある技術は Year Out の間に伸展するものだと考えている。

理論的知識や学位は学生に自己節制と自立の精神を教えるが、大学教育はめったに最初の職場に相応しい必須の技術を学生に教えることはない。そこで先取の精神を育み、極めて重要な組織活動の技術を発展させる十分に計画された Year Out は、非常に貴重である。

Sector Skills Development Agency の代表者であるマーク・フィッシャーは、「雇用者側は、職場で成功するためには資格以上のものが必要であると認識している」と述べている。

(<http://www.tes.co.uk/2305074>)

(文責： 秦 由美子)



2004年レソトのエイズ孤児の支援活動を行うハリー王子。

写真、ジョン・スティルウェル (PA)

## 30. 語学系学生イラクで軍隊補助活動を行う

アラビア語専攻の学生たちは、イラクで通訳としてイギリス軍に従事するため一時休学を奨めら

れている。

深刻な通訳者不足のため、イギリス軍は大学で通訳者の採用活動を始め、通訳として軍に採用された場合学生には1日200ポンドを支給すると申し出ている。

現時点で、16名の学生が採用された。そのうちの5人がすでにイラクで活動を開始しており、残る11人も近くイラクへ派遣される。

英国国防省の報道官は、「派遣された通訳者は語学能力に応じて、高度な通訳から文書の翻訳、民間レベルでイギリス軍とイラク人の相互理解を補助するための簡単な翻訳をするなどの幅広い活動を行う。」と述べている。

「通訳者はイギリス軍主導の多国籍師団に従事することになるので、彼らは他の連立同盟国軍関係者と共に仕事を行うことになる。語学能力のある軍人は非常に少ないので、彼らのような語学の専門家が必要とされている。」

採用された通訳者は、軍人と区別するために青い文官用ジャケットと安全帽の着用が義務付けられる。「しかし、こういう状況での仕事にはある程度の危険は付き物だ。このことは志願者たちには説明している。」と報道官は話した。

また報道官は、通訳者はイラク評議会会議に連立軍と共に参加し、本部内からの文書を翻訳することになるが、彼らが捕虜の尋問の通訳することを求められるかどうかは確認ができていないと付け加えた。

志願者の1人、21歳のローラ・クレイさんは、5ヶ月契約でイラク南部のバスラでの活動を行うために、先月エクセター大学を離れた。父親のアンドリュー・クレイさんは本日のタイムズ紙のインタビューで、「彼女は常日頃から独立心が旺盛だから、イラクでイギリス軍のために働くことは、彼女にとって効果的なギャップ・イヤーのとり方だったのでしょう。」と話した。

「現地ではアラビア語を話せる人が間違いなく必要なのでしょうけど、彼女はとても楽しんで仕事をしているし、語学力もさらに向上しているようだ。」

またタイムズ紙は通訳者の学生も兵員と同じような生活を送っているとも報道した。1部屋に6から8人で寝泊りし、7時の朝食に間に合うよう早く起床しなければならない。

2002年6月の政府の報告では、中東と中東の言語のイギリス人専門家の数が減っており、その減少の程度は国の安全保障問題に関わるほどになっていると見解を示した。

9.11同時多発テロ後、外務連邦省(FCO)と政府通信本部(GCHQ)内に懸念が高まったことをうけ、

今では大学での中東とイスラム研究およびその言語教育と研究職には更なる投資が必要であるとの動きに繋がってきている。

ダーラム大学(Durham University)のアノーシュ・エーテシャミ教授は、中東とイスラムの学術研究者と、次世代の専門家となるべく若い研究者を支援するために 4000 万ポンドを要請する報告書を作成した。

大学入学サービスの UCAS は、2004 年度はアラビア研究を志望する学生の数を増やすことができなかった。しかし統計の上では今、年度はヨーロッパ以外の言語を専攻する受験者の数が 6.9% 増加している。その一方で、アメリカ研究を志望する受験者は 9.11 同時多発テロを受けて昨年は増加したものの、今年度は 13.3%も落ち込み 3599 人であった。

ポリー・カーティス

2004 年 2 月 18 日水曜日

guardian.co.jp

(文責： 秦由美子)

### 3 1. VSO は「大人の」ボランティアを求める

途上国開発支援のために英国人ボランティアを派遣する慈善団体、海外ボランティア・サービス団体（VSO）は、年金受給者を対象にしたボランティア参加キャンペーンを展開する。

VSO は対象者の年齢制限を 75 歳にまで引き上げた。60 歳代の人には世界で最も過酷な現状にある地域での、2 年間の活動に参加するよう奨めている。

志願者の減少と、現地での活動には腕力や若さよりも経験・スキルが求められるようになっていくことから、VSO はまだまだ精力的に活動できる年配者層に期待を寄せている。

1958 年の創設以来、35,000 人以上の人が VSO のプロジェクトに参加してきた。今年は 2,000 人以上が 2 年任期で 40 カ国に渡航することになっている。しかし、テロや SARS の心配と不安定な経済状況から、最近では参加人数が減少する傾向にある。

来年 VSO は、英語教員、教育関係のトレーナーとしてボランティアを外国へ派遣するのは、たったの 750 人。2000 年度は 900 人強だった。「もっとたくさんの志願者がいれば、外国へ派遣できるボランティアの数を増やすことを約束できるでしょう」と、VSO の報道官は言う。「VSO が 45 年前に発足したとき、大学卒業後あるいは大学入学前に 1 年の休暇をとる青少年層を対象にしていた。けれども今は時代が変わったのです。」

アン・ソントンさんは 63 歳のグラスゴー出身の元銀行支店長で、VSO の 2 年間のボランティア活動を終えて、ザンビアから帰国したばかりだ。ソントンさんは、「エイズの影響で、その地域の平均寿命は 40 歳以下だった。だから私のような年輩の人間は、現地ではとても珍しがられた。」と話した。

「私はグループの中で明らかに一番年上だったけど、年齢を重要視しないのが VSO の良い所だと思う。」と付け加えた。

マキシム・フリス（社会問題特派員）

2003 年 8 月 16 日（土）

（文責： 秦 由美子）

## 第 三 部

ギャップ・イヤー研究会

# ギャップ・イヤー研究会

## GAP YEAR SEMINAR

### 「ギャップ・イヤーとボランティア・社会体験との連携」

文部科学省 平成20年度先導的<sub>1</sub>大学改革推進委託事業

「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する研究」

開催日時 ● 平成21年3月9日(月) 13:00▶17:30

開催場所 ● 広島大学高等教育研究開発センター  
〒739-8512 広島県東広島市鏡山1-2-2

主催 ● 広島大学高等教育研究開発センター  
ギャップ・イヤー研究会

講演者 ● 1 菅井直也 教授(広島文教女子大学)  
2 熊谷紀良 主任(東京ボランティア・センター)  
3 小山悦治 教授(倉敷芸術科学大学)

司会 ● 秦由美子(広島大学)

#### ボランティア活動を実施している大学からの報告

- [1] 明治学院大学ボランティア・センター
- [2] 広島経済大学 興動館
- [3] 関西大学ボランティア・センター
- [4] 関西学院大学ボランティア・センター
- [5] 立命館大学ボランティア・センター
- [6] 龍谷大学ボランティア・NPOセンター
- [7] 名古屋商科大学
- [8] 広島大学

#### 趣旨説明

本研究会は、「創造性豊かで幅広い教養を有する人材を育成するためには、学生の社会体験や異文化体験を促進することが重要」(文科省)であるという認識に基づき実施するものである。イギリスでのギャップ・イヤー調査も総括段階に入り、今後の研究に繋げる次段階として現実に日本版ギャップ・イヤーを日本に導入することが可能かどうかを模索することとなった。その一つの試みとして、ボランティア活動をギャップ・イヤーに組み込めるかどうかの可能性を検討したいと考えている。そこで既にボランティア活動を実施している先達の国内大学の学生及び職員の方々を招いての研究会を開催する運びとなった。このギャップ・イヤー(タイム)として許容された時間は、自らの人生の振り返りの時間であると共に、将来を見据える時間ともなる。彼あるいは彼女のその後の人生を過たずに進むための考える時間としての体験を与えるものでもあり、人としての広がりやイギリス人の目指すところの「成熟(maturity)」、つまり人間的成長が期待される時間でもある。この研究会では、制度的に認めることが良いかどうかという議論も含め、日本版ギャップ・タイム(イヤー)とボランティア・社会体験との連携との可能性を検討したいと考えている。

秦 由美子(広島大学)

#### お問い合わせ

**RiHE** 広島大学高等教育研究開発センター <http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/>  
〒739-8512 広島県東広島市鏡山1-2-2 TEL.082-424-6234  
E-mail:hada@hiroshima-u.ac.jp



### 3 2. 小山悦治教授（倉敷芸術科学大学）

私は倉敷芸術科学大学の小山と申します。今日はキャップ・イヤーとそれからボランティア活動、或いは社会体験との連携についてということではいろいろと学ばせていただければ、大変幸いに思います。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、先ずお手元にこういう、特別に1枚裏表で新聞記事とかがあると思いますが、「キャップ・イヤー補足資料1」というのがございます。資料には「日本では2002年から倉敷芸術科学大学がギャップ制度という名称で導入しました。大学入学後の半年間を利用して留学ボランティア活動、長期仕事体験など、自分の意思により学外での学習活動に取り組み、その成果に応じて単位認定をするものです」ということで、このような形で2002年にスタートさせたわけがございます。

そして、社会経験を単位認定するというので、入学後の半年間は留学や仕事はOKということで、ギャップ制度を導入するというのであります。ちょっとこの記事の内容を、紹介いたしますと、大学合格者が学生生活を始める前までに隙間（ギャップ）をつくり、社会経験を積むことで学ぶ意欲や目的意識を高めてもらおうと、倉敷芸術科学大学が国内初のギャップ制度を国際教養学部で導入するというのであります。大学合格者が入学を1年間延期し、ここでボランティア活動や職業体験、海外留学などをする英国のキャップ・イヤーがモデルとなっております。

2002年ですけれども、中教審の答申で、「大学における新しい教養教育の在り方」として、答申の中で例示されました。キャップ・イヤーなどをしてはどうかと。その答申もあって、本学ではギャップ制度というのを設けたわけでありまして。

その具体的な内容につきましては、入学後の半年間のギャップ期間に、大きく4種類のプログラムを用意いたしました。先ず留学研修プログラム、それから仕事体験、それからボランティア、最後に4つプログラムがございまして、4番目が自己発見プログラムということで、そのいずれかに取り組みまして、電子メールなどで教員の指導を受け、レポートそのものによって活動を反映いたします。そして、通常と同じ4年間で卒業ができるということでありまして。

募集については「大学入学後の半年間を利用して、留学やボランティア活動、それから長期仕事体験など、自分の意思による学外での学習活動へ取り組み、その成果を再認定する制度」ということで募集をかけました。大学に来ないのに授業料を取るのはいかがかということで、その授業料分を支援金として補助することにいたしました。支援金額が30万円から100万円までということで、それぞれの留学先等に応じて支援をするというもので、最初は相当期待をしました。30名の定員ですが30名を超えてはないかということだったのですが、定員30名でありましたけれども、AO入試でいろいろ面談の中で希望先等を、面接の中でギャップ制度の趣旨に合っているかどうか、受け入れ先がきちんとしてるかどうかが、そういう大学教育の内容に相応しいかどうか、そういう面談をすることによりまして、13人がAO入試で応募しましたが、実際に1年目はそういう趣旨に合った者ということで、6名がこのギャップ制度というものを活用することになったわけなんです。

今日の内容につきましては、先ず、最近の教養教育重視の動向。次に、本学の実施したキャップ・イヤー、または半年間ですので、ハーフイヤー・ギャップというように呼んでおりますけれども、それについての事例報告。そして現状と課題、或いは今後の方向性についてお話しできればというように思います。

ご承知のとおり、大学教育の目的というのは、専門教育と教養教育、特に教養教育の方の幅広く深い教養とか豊かな人間性と、こういったところを養うために、こういった学外体験活動は有用ではないかというような基本理念からスタートしたわけでございます。同じく改正教育基本法でも、教養教育を非常に重視しているわけでありまして、ですから基本的なスタンスとしましては、教養教育というようなことで、それを重視した取組としてギャップ制度を導入したということでもあります。

昨今の大学教育の目的ということで、学資力というのが話題になっておりますが、学資力につきましても、個々のコミュニケーションスキルであるとか、チームワークとか倫理感、こういう倫理感というのはなかなか専門教育で養成するというのは難しゅうございます。それから、社会人基礎力につきましても、こういったチームワークとか、そういったことが強調されております。

こういうチームワークとかコミュニケーション能力というのは、なかなか教室の中では身に付きにくいものであります。そこで教養教育の流れでございますけれども、91年の大綱化によりまして、教養部が続々廃止されるようになりました。そして、専門教育の方に重視する傾向が強くなりましたので、これではいけないということで、教養教育をもう少し重視しないといけないというような答申がこれでもかこれでもかというぐらい、繰り返し教養教育重視の答申が出たわけです。この2005年には、将来像答申と言われるものの中で、学部では教養教育と専門基礎教育を、専門教育は大学院でやるというような方向も打ち出されたのは記憶に新しいところでございます。

例えば、21世紀型市民の育成というのを謳っておりますけれども、21世紀型というのは20世紀型とどう違うのかと。それから、21世紀市民とはどのようなものかと。あまり詳しいことは明記されていないわけですが、おそらく21世紀は知識基盤社会が進行して、国際化・グローバル化に対応するための課題解決能力と、こういうものが重視されるのではないかというようなこともありましたので、こういうキャップ・イヤー制度というのはそういう課題解決能力、こういったものにも非常に有効ではないかということで始めたわけでございます。

その時に教養ということですが、皆さん教養と言うとどのように思われますでしょうか。これはいろんな解釈があります。よく使われますのが、先ずよく知っているなど、知識が非常に広い「幅広主義」と言われるもの。それから、専門に対する基礎としての教養。つまり専門より一段低いところの入門というような捉え方です。

本来の意味での教養と言うのは、我々はやはり語源から言ってもCultivateする。つまり、精神と言いましょうか、魂を揺さぶるような、刻み込むような、刻印付けするような、そういう人間形成に絡む営みが教養ではないかと。そしてより良く生きるために、そういう人間形成と、これを教養の一番重要なところだというように位置付けたわけでございます。そして、この人間形成を図る営みとして、このギャップ制度を導入したということでございます。

さて、大学時代の経験というものでありますけれども、今様々な職業に就いている方が大学時代を振り返って、大学時代で学んだものの何が今の仕事に役に立っているのかということなんですが、意外に多いのが、例えば、教員の場合は独力で行った勉強、つまり採用試験の勉強であるとかサークル活動、アルバイト。塾の講師や家庭教師等。そういった比率が、授業ももちろん大事なのですが、数字的には上回っているというようなことで、これはやはり課外活動、いわゆるエクストラカリキュラムというものが、人間形成においては非常に重要ではないかというように



思われるわけでありませぬ。

そして、キャップ・イヤーも先ほど秦先生の方からご説明がありましたので、もうこの辺りは省略させていただきますが、先ほどグランドツアーの伝統というのがありまして、やはり王侯貴族が、国のトップとしていろんな国を回ることによって大所高所からものを見ると、そういう伝統があるわけでありませぬ。この辺りが、この本家本元のキャップ・イヤーの強いところだなど。日本ではこういう伝統というものはないので、こういうところがキャップ・イヤーということになるわけですが。先ほどもありましたので、ここは狭義のキャップ・イヤーが、いわゆる日本で言う高校卒業後、18歳で1年間と。しかし広義で言いますと非常に広い範囲もあります。例えば、大学院に在学中にギャップをすとか。先ほどソニーの例がありますけども、もう社会人になってからギャップをつくとか、広義のキャップ・イヤーというものもございませぬ。

代表的なものはこういった活動がございませぬ。先ず英語の英語教育、外国語としての英語教育。これはタイの例でありませぬ。それからフィジーでは、これは何も語学教育だけではなくて、他の教科の指導補助に当たっています。それから、介護活動であるとか環境保護活動、それから、これは日本にもやってきました。日赤の長崎病院にイギリスから学生が来まして、そういう医療援助活動もしております。さらには野外活動、Camp and Outdoor Education。カナダ或いはメキシコの養護教育とか、こういった幅広い活動を行っているわけがございませぬ。そういった活動を行う者をギャッパーと呼んでいますが、そういうギャッパーの数というのが徐々に徐々に、ちょっとデータが古いですがけれども、増えているというのが傾向がございませぬ。

さて、これから私どもの実践の方をご紹介させていただきます。倉敷芸術科学大学は平成7年にできまして、在籍学生は2,000名弱と、小規模な地方の新設大学ということでありませぬ。一応、大学院はドクターコースまでは用意しております。場所的には、新幹線の新倉敷駅の方からちょっとこう山の上を見ていただきますと、オレンジ色の屋根でできた建物があります。これが私どものキャンパスでありませぬ。オレンジ色というのは、「晴れの国・岡山」ということで、南ヨーロッパのイメージを醸し出してございませぬし、横から見ると、倉敷ですから倉の形を、白壁ということで、こういう建物から成っているわけがございませぬ。

ギャップ制度を導入したきっかけは、先ほど申しましたが、2002年の「新しい時代における教養教育の在り方について」、この答申の中で、英国におけるキャップ・イヤーなど、こういう文言が登場いたしました。おそらく答申類でキャップ・イヤーが登場したのはこれが初めてではないかと思ひませぬ。先ほど教養教育重視ということで、国際教養学部というのがありますので、これは良いだろうと。なぜならば、我々は国際教養学部という名前が付きながら、海外の提携校が25大学ほどあるわけですが、ほとんど海外からやって来るばかりで、私どもの学生が外に出るといふのは少なかつたわけでありませぬ。国際という名前が付いているのに学生が出ていかないといふのは、ちょっと名前に負けるのではないかということで、もっともっと外国に出てもらおうということもありませぬ、このキャップ・イヤーの制度を導入しようとしたわけでありませぬ。

本学の場合は、イギリスの場合は高校から大学が決定して1年間ということがございませぬが、これを基本的に真似まして、この半年間という、1年ではなくて半年間になります。最初は1年の前期、或いは後期、キャップ・イヤーですから、高校と大学のちょうど間が良いだろうということで検討しましたが、後期に決定いたしました。なぜ後期にしたのかということでありませぬけれども、本当は前期の方が趣旨に合っているのですが、日本の場合は、大学に入って先ず友達づ

くりとか、居場所づくりとか、大学の授業というのはこんなものかと、先ずそういった自分の居場所をつくるということが非常に重要だということがありますので、そういうことで後期に回しますと、1年の後期だと、前期に友達関係とか、それからいろいろな面で心の準備もできるだろうということで、1年の後期に活動を行うことにいたしました。

この狙いは、学外での社会体験や異文化体験という目的で、単位認定はアクティブ・ラーニングという、能動的に主体的に学ぼうということで、それを8単位ずつ認定。それから教養ゼミという必須科目がありますので、教養ゼミで事前指導を行うと、ということで合計18単位を認定するというでスタートいたしました。そして休学することなく、4年間での卒業が可能ということアピールしていったわけであります。

プログラムは合計4つ用意いたしました。海外での研修を半年間、ボランティア、これも海外ボランティアなども含んでおります。それから仕事体験は、いわゆる長期インターンシップということで、半年間働くということであります。一つユニークなのは自分探しということで自己発見。これは自分の限界に挑戦するというで、例えば、難関の資格を半年間徹底に勉強して取るとか、それからスポーツでしたら、高地トレーニングに出かけるとか。或いは、岡山県でするので、近くに四国の88カ所がありますので、88カ所ゆっくり歩いて回りますと、大体半年間かかると。そういうことも自己発見ということで良いのではないかと。そういうふうな4種類のプログラムを用意いたしました。

これはその当時総合学習という、新しいゆとりの時間とか入って参りましたので、2006年問題というのがありました。大学がどういう対応するか、その受け皿としても機能するのではないかとということでありました。

単位認定は、やはり大学の厳格な成績評価ということもありましたので、かなり条件を付けました。こういう条件が整った場合のみギャップ活動を行うということですので、13名の希望者の中から結局6名に絞ったと。この条件を満たした者ということで、6名になったということであります。

それから単位認定もかなり慎重に行いました。実際に2003年の7月から、8月、実際には。8月から半年間、次の年の3月まで活動に出ました。例えば、カナダのモホーク大学の場合は彼女です。彼女はホームステイを半年間行いました。それから、北京大学での半年間の研修ということで、企業学科の学生、業を興すという学科がございまして、授業の合間にこういった日本料理店を経営したいということですので、そこで実際にアルバイトをするとか、これは広島出身でしたので、広島のお好み焼きを現地で販売するとか、10元というように書いてありますけれども、こういうふうな経験を半年間積むことができたわけであります。

それから企業では自動車関係の企業に半年間、3カ所回りました。先程、企業の例がありましたが、例えば彼には申し訳ないんですけども、企業体験をした学生は、入学のゼミなど遅刻がちでした。たまに時間どおりに来たかと思うと、授業中に居眠りをしてしまいました。「なぜか？」と聞きますと、「夜更かしをした」。ところが半年間企業に行きまして、実際に正社員と同じ仕事をしましたところ、半年間でもう見違えるように、半分顔が社会人になっておりまして、それ以降、遅刻など一切することがありませんでした。我々が、大学関係者が幾ら注意しても効かないのですけれども、社会で、企業で、企業の方がビシッと言いますと、よく効果があるなというようなことも感じたわけがございます。そういったいろいろな効果、成果が生まれてきたというこ

とであります。

今後の検討課題としましては、活動時期とか期間、半年では、例えば語学の場合は中途半端ではないかと。半年間よりも1年行くのだから1年だろうとか、1年は早過ぎると。もっと力を付けて3年ぐらい行ってはどうかとか、そういうこともあります。大学のカリキュラム全体の中で系統立てて位置づけるべきではないかというようなことであります。

それから、理解をなかなか得にくいというようなこともあります。これはこの後説明させていただきます。厳格な単位認定とか教育効果の評価とか、それから研究成果の蓄積もそれほどございませんでした。そういうのが今日の研究会の、非常にこういう研究成果の面で大きく期待しているところでありますし、将来的には日本キャップ・イヤー学会とかそんなものもできたら良いのではないかと考えております。

それから、この制度が実は1年目6人、2年目が1人、3年目が0人ということになりまして、今実は休止中になっております。ということで、いろんな原因が考えられるわけなのですが、やはりキャップ・イヤーに対する認知度と言いましょか、生徒、高校生はもちろん保護者、それから高校の先生、そういったところになかなか伝わりにくいというようなことで、今度、立命館大学さんが京都でキャップ・イヤーなどをされる。そういうブランド大学と言いましょか、著名な大学がどんどんどんどんキャップ・イヤーを導入していただければ、もっともっと広がって行くのではないかという気がしております。

それから、全学的な取組をしていくと。うまく行かなかったのはおそらく有志の教員が一部でやったということで、事務的な組織などの支援がなかったというようなことがありますので、全学的な体制。それから、先ほど秦先生の方からもありましたが、いろんな意味での支援、政策的支援、財政的支援、これが強く求められるということでもあります。

ただ、私はボランティア活動で単位認定をするというのは、ちょっと慎重にあるべきでないかというふうに思っております。ボランティアというのは元々見返りを求めないということですので、多分、この後お話があるのではないかと思います。サービス・ラーニングとか、そういった形が望ましいのではないかと考えております。

以上で私の事例報告を終えさせていただきたいと思っております。どうも有難うございました。

### 33. 菅井直也教授 (広島文教女子大学)

私は大学の教師をやっていますけれど、学部頃から、例えば先ほど出てきたワーク・キャンプとか、国内版ですが、あんなので育てられてきて、地域を巡るボランティア活動と言えばボランティア活動ですか、そんなものをずっとやってきまして、大学の勉強と全然関係なく。大学院の時に、たまたま先ほどの小山先生と実は一緒に大学院を過ごしたんですが、そんな関係があったりして。もちろん大学院を出たということで就職はするんですが、今いる大学はそれと関係ない別の分野で、それこそそのワーク・キャンプやら何やらやってきたというところで、地域福祉の担当者として赴任してきて仕事をしています。従いまして、次にお話しになる熊谷先生のようなことをやってきた。従って、今日ここにいる中では、熊谷先生と私だけがちょっと違和感のある存在と感じながら座っているというところだろうと、さっき熊谷さんとお話をしたところなんです。従いまして、皆さんが今までのお話の中で当たり前のように使っている「ボランティア」という言葉が、「一体それって何？」というところをこだわっているわけです。

まず、配布資料の構成です。最初の2枚、図がついているのがボランティア講座をやる時に、私が使うプリントです。それから、その次に雑誌のコピーが4ページほど付いていると思いますが、大学が地域と関わる場合の留意点を整理したものではなくて、こんな問題あんな問題がありますよというのを、とある大学の方が大阪ボランティア協会の機関誌に書いてらっしゃいますので、それを説明抜きで差し上げておきますので、読んでいただくと、幾つかの問題は指摘されているだろうと思います。

その次に、7ページからノンプルは付いていると思いますが、10ページまで。これは私と他がつくったテキスト。『学生のためのボランティア論』という大阪ボランティア協会のあるわけですが、これの中の数ページを抜き出してあります。大学生がどういう、地域での活動、問題を発見するというのがボランティアの本旨でもありますので、その例をわかりやすく書いていただいた章がありますので、その部分を一つの節だけですが抜き出してあります。そうなるくと、一体その学校と、大学も学校だと捉えた時に、「学校とボランティアというのはどういう関係なの？」というのを理解しないと難しいだろうということで、それを書いた章から、またその節を抜き出してあるのが、11枚目から残りということになります。児童生徒、小学校を例に書かれているところなんです。それを大学とか大学生に置き換えて読んでもすっぱり理解ができますので、そういうふうに関後でお時間のある時に読んでいただけたらと思います。

それで、「ボランティアって何だっけ」ということです。時間があれば皆さんのところへマイクを持ってインタビューに伺うわけですが、その暇がありませんね。英語だとか綴るといのはご存じのとおりですが、語源がラテン語の「voluntas」だといのはご存じですよ。スペイン語にはそのものずばり「voluntas」という単語があったはずですが、私はスペイン語はよく知りません。その語源を辿るとラテン語の語根と言うんですか、そこを辿ると、「volo」というのに辿り着くというのはラテン語の先生に聞いたことはありますが、そういう講釈をするのが今日の目的ではありません。このボランティアは辞書を引くと、私の家に祖父が大正時代に使った英和辞典が残されているんですが、それを引いたら、名詞としての意味の第一に、徴募兵の反対の志願兵という言葉が真っ先に訳語に出てきます。今の辞書にも出てくるはずですが、随分後の方の語義に載っていると思います。そういう意味なんです。この voluntas の方ですが、これは意思とか望みとか、神への感謝の捧げ物、お賽銭やお供え物ですね。或いは、自分の

意思で神社仏閣へ行って賽銭箱があった時に、お賽銭を入れるか入れないかは自分の意思なんですよね。それをなんぼ入れるのかというのも自分の意思です。入れる振りだけというのも有りです。そんなところが語源にあるわけです。

そういうことになりますと、例えば、これは英会話でよく使いますよね。高校の先生が問題を黒板にさらさらと書いて、「おーい、誰かできる者おらんか」と言う時に、英語の先生だったら「Any volunteer, please」と言うんだろーと思います。多分この前に、「Is there」が省略されているんじゃないかと思いますがけれども。それから新聞を見ますと、例えば、「Matsuda company is recruiting 50,000 volunteers」、ボランティアを募りましたよ、何のためにですか、「Break through the profitable operation」、経営不振の打開のために、5万人の自主退職者を募りましたという時に、volunteer が recruit volunteer なんです。その「希望退職に応ずる人」というのは、別に辞めなくてもいいわけですけど、「じゃあ、俺、辞めるよ。退職金をたくさんくれるんなら辞めるよ」とか、「会社に貢献できるのはこのぐらいしかないだろうから、辞めるよ」というのが volunteer なんです。volunteer という動詞まであるわけですけど。

そういうことから考えれば、お手元のプリントに、「ボランティアが匂う言葉」という表が出てきますが、ちょっと古い、もう 15 年ぐらい前に私の先輩がつくった表ですので、若い方には「これって、何？」というような言葉が載っていると思います。例えば『赤ひげ』なんて、山本周五郎の小説の主人公なんですが、自ら進んで治療したお医者さんなんですけれど、そんなのとかいろいろ載ってますけれども、そこらに何か匂うんですよね。だけど、それらがすべてイコール・ボランティアだということにはならないはずですが、その辺にある何かなんです。

それから右の方に、「ハレのボランティアとケのボランティア」と。ハレとケという民俗学上の言葉がありますが、多分今までの話の中に出てきた、或いはこの後もそうだと思いますが、出てくるのはこのハレのボランティアのお話だろーと思うんです。そればかりが注目されることに、ちょっと私は不本意な思いがあるんですが。本業があって、それとは別に、例えば定年退職してからとか、或いはお休みの日にやるのがボランティアだと思っている人がいます。そうじゃないのもあるよね、という話なんですけど。それが人生の本流だとすれば、傍流です。本業が本流だとすれば、傍流でやるものだという、何か日陰者なんです。何かあった時に、例えば、ギャップ・イヤーのプロジェクトとして大学が募集した時とか、何とか大震災があつてという時とか、或いは何とか祭りがあつた時とかいうような、そんな意識の人達。その現地へ行って、それは目に見えますので、例えばテレビに映ることがあります。テレビカメラを持って取材すれば当然映ります。それは絵になるということですね。もちろん自覚して、「こりゃ大変だ」と言うので出かけていくとか、或いは何とかボランティア、かんとかボランティア、国際交流ボランティアとか、或いは老人介護ボランティアというような具合に区分けが可能ですね。そうすると、される側、受入れ側も意識しちゃいまして、「それはそれはお世話になります。よろしく願います」とかいうようなことになっていきます。それらを全部引っ繰り返してしまった活動があるでしょうということです。本業の中で、何がなくてもいつものプログラムと言うか、時間割通りの授業とか、判でついたような日々の生活の中でとか、「それ、あるよね」ということです。自分の足元で、例えば、バスのドライバーであれば運転席でとか、学生さんであれば通学途中の自転車の上でとか、或いは教室で居眠りしながらとかいうのがあはずです。そういうのも「ケのボランティア」というふうに名付けてみたわけですけど、そっちが忘れられちゃってるよね

という。じゃあ、それをどう発見して、例えば「単位認定するとすれば、どうやるの」という話は起りますけれども。この2つがあって片方を見落としているということを知っていただけたらと思います。

次を捲っていただいて、上に缶ジュースの缶の絵が少し書いてございますけれども。成分としてのボランティア。ある活動とか、その行為の中にボランティア成分が、例えば、缶ジュースの果汁成分のように何パーセント含まれているかというのは様々、無果汁 0%か果汁 100%かに限られるわけではないはずです。例えば、今日私がここで喋らせていただいているのも断ることだって可能だったわけですから、自分の意思でボランティアに出てきて喋っています。だからと言って、じゃあ100%のボランティアかと言うと、そうでもないわけで、「皆さんに伝えたいものがある」というのはあるだろうし、或いは、皆さんの前で良い格好して喋りたいというのものもあるだろうし、或いは、「お弁当が出るな。じゃあ、それは儲け」という意識もないわけではありませぬし、というふうに様々あるわけですね。そんなことをすると、私が今日ここへ立っているのは何パーセントがボランティアなのかな、まあ50%ぐらいにしておきましょうかということになるわけです。或いは、「講師謝金を貰って帰ったから、あれはボランティアじゃないんだ」と責められても、じゃあ、その金額分しか喋ってないのかと言うと、そんなことはありません。サービス過剰なことをやるはずであります。そうすると、この「成分として」と考えられるわけですので、「単位欲しさに学生が」というのだから、それは構わない。「単位の部分、20%部分はボランティアじゃねえよな。だけど残り80%はボランティアだよな、あの学生は」というのはいて良いわけですよ。そういうふうに考えていくと随分話が楽になります。

そこまで語源から始めてまとめますと、「自ら進んで」というのは、これはもういいですね。じゃあ、「何するの?」ということ。社会的な問題の「社会」って何?という話は学生としなきゃいけないんですけども、社会学の教科書を見ると、多分3人以上の人間が集まった空間を社会と言うと書いてあるんじゃないかと思うんですが。学部の頃も社会学概論を受けてないし、確かめる暇がないままに来てるんですが。私は2人でいいと思っていますが、あなたと私の間も社会だと思っていますが、そこに発生する問題の解決のための行動を志す人をボランティアと言う。

私はかなり早口で喋っています。聞き取れないと思います。「聞こえないんです」と、どなたかが大声を張り上げて言ってくれれば、この皆さんが感じているはずの「講師が早口で喋る」という、今日のこの40~50人の社会、この社会に起った問題の解決の行動をもうしたことになりますよね。今のところいらっやいませぬけれども。或いは、「寒いんですけど」とか「暑いんですけど」とかいう発言、或いは、教室のシステムがわかっている方がサッと立ち上がってエアコンを調節してくるとかいうのね。別に我慢して居眠りしてたって良いわけですよ。そうではなくて、行動するのは自ら進んでボランティアということになります。「自ら進んで」は省略しますが、「社会的な問題」、自分を含む皆の問題。とりあえずは自分が困っている。キョロキョロ見たらもう1人同じことを困っている人がいたとすれば、それは社会的な問題ですよ。自分がバイクで道を走っていたら、凸凹道で転びそうになった。「これは他にも転ぶ奴いるよな」、或いは、「前にそんな人を見たことあるよな」とか、「先輩がそんなこと言ってたっけ」というだけで、その道を直すということを指摘するとか提案するというのは立派な社会的な問題に関するということになりますよね。それをどう解決するのか。実行と試行錯誤によって解決して

いくという、そういうやり方をボランティアはします。例えば、ベトナムへ出かけて行って孤児と関る中で、そういう実行をする中で新たな問題を発見し、「こういう場合はどうなんだろう」、「これはどうなっているんだろうか」というようなことを発見してきてくださったお話がさっきありました。それは、先ほどの酒井さんのお話にあったように、「1週間目こうだった。2週間目こうだった」というのがありましたけれど、同じようなことを繰り返していく中で、いろんな工夫もしながら試行錯誤の中で発見したり、素晴らしい解決策にぶち当たったり、或いは「こっちは良いけど、あっちは悪い」なんてことに突き当たったりしながら、解決が見出されていくというプロセスを辿る活動を皆さんしてこられたわけですね。それらが揃ってボランティアだということが言いたいわけですが。

そうすると、行動も1人ということではなしに、それは1人でやる場合も当然あるんですが、常に誰かを意識していたり、問題を抱えている人と一緒にあったりというふうな、共にする活動になる場合が多いだろうなということになります。そうすると、「ボランティアって何だ」という巷のテキストにあるような要項が理解できてくるかなと思いますけれども。そんなふうな意味で、「自ら進んで社会的な問題の解決のための行動を志す人」だというふうに定義をするのが一般的になっているはずですが、そうでないことを難しく書くテキストもまだ残ってはいます。それから、とある出版社が、児童生徒向けに作った学習辞典の記述がとんでもないことが書いてあって、こういう立場から削除を求めたケースがあったのは皆さんご存じでしょうか、ということです。こんな話のある年に入学してきた学生さん400人全員にして、「話を聞いて何が変わったか」というアンケートを取ったことがあります。その結果がどうだったかというのは、この後お話しするチャンスがありますが。

そうしますと、「ボランティアって何だ」というのは、もう一遍ここで、下手な絵ですけど、何かってね、火山の絵なんですよ。これは山で、火山の噴火ですが、あれは地底のマグマが煮えたぎって、それが「困った、困った、これ腹が立った」って、煮えたぎり状態が岩の隙間を見つけてシュー、ドカンって、頼まれもしないのに出てくるんですよ。それで、火山ガスとか火山礫とかによって動植物に被害が出たりするわけですけど。あれに非常にイメージが似てませんか？ この問題。例えば、災害のニュース画像を見せられて、「これは大変だ。何とかしなきゃ」と思うなんてのもあるだろうし、さっきのバイクの話でも、「腹が立った」というのはそういうこの状態。そのままになってしまうこともあるだろうと思います。それから、この「ドッカーン」じゃなくて、じわりじわりと流れ出てくるとか、じわりじわりと煙だけ出てくるとかいうものもあるだろうと思います。そういう種類の活動も一杯あります。ドカーンと行動してしまうのもあるだろうと思います。「これは大変だ。何とかしなきゃ」とか、「何かこれ変よね」という、そういう思い。これを先ほど来から言っている、社会的な問題の発見とか何とかと言っているわけですけど、これは怒りであり、問題意識であり、疑問であり、そういうことでしょう。それから出発するものだと私達は思っています。

ただし、公式のように「1. 問題意識」、「2. それの分析」なんてやっているんじゃなくて、何かわかんないままに行動が先に始められたとか、友達がいるから一緒にやってみたとか、女の子に会えるから一緒にやってみようなんていうんだって、それは構わないと思いますが、やっているうちにそれが見えてくるよねという話です。そこからどうなるかと言うと、「やってしまう」ということになるわけで、それが「行動だよね」というわけです。「行動するとこういうことに

なりますよ」ということですよ。

「いわゆるボランティア活動」と点線で囲まれてありますが、これの、例えば普遍化の度合。「誰でもやるよ」というのを強めていくと、市民の日常行為になるわけです。古いテキストを見ると、「挨拶をするだけでも、笑顔をするだけでも、ボランティア活動です」なんて書いてあるのがあります。「馬鹿言え。そんなのは市民としての常識じゃねえか」とか「マナーじゃないか」と、年寄りに聞くとそう言いますね。どっちも正しいんですよ。「皆がやるよ」というのを強めていけば、誰でもやることなんです。だけど、誰もやる人がいないところで、1人だけとか、2人、3人で始めるということであれば、「おはよう、おはよう」と言い出すということであれば、それはボランティア活動として褒められるかもしれないし、意識されるかもしれない。でも、皆がやるようになったらそうはなりませんよね。或いは、ごみの分別なんてのだってそうかもしれません、とかとかいうようなお話です。有償化の度合、左下ですが、これを強めていけば、「企業」と書いてありますが、企業活動、商売になりますよねという話です。「じゃあ先生、すみませんが時間給に換算して、なんぼ以上貰ったらボランティアじゃなくなるんでしょうか」なんて言われても困ります。それはケース・バイ・ケース、或いはその人との関係によって違ってきます。というような話でしょう。

それを数式にしちゃった人がいて、この $M = E / VCS$ という、何か力学か何かの式みたいですが、この活動に必要なエネルギー（E）というのを、このボランティアシップ（V）とかコミュニケーション（C）とかセルフヘルプ（S）とか、そんなもので割っていくと、Mが大きくなったり小さくなったりする。大きくなってしまった時に、いたたまれないのでお返しをしなければとか、例えば、プレゼントを貰った時にお返しをするかどうかというお話です。バレンタインデーにチョコレートを貰った男性の方、ホワイトデーにどうしますか。「放っておくよ」という場合は、どうでもいい関係だから放っておくという場合もあるだろうし、逆にそうじゃなくても関係が親密過ぎるから、そんな物なんかでお返ししない関係だよという、そういう関係だからお返ししないという場合もあるだろうと思います。そんなような時にはこのMが非常に小さくなっている。こっちが、分母の方が大きくなっている場合でしょう。これが小さい場合にはお返ししないとバランスが取れない。そういうことになるんだろうと思います。そんなところで決まってくるわけで、お金が行き来したからどうのとか、見返りを求める・求めないというのは別のお話になってきます。

それからもう一つが、これの一番最後ですが、これは私が学部生の頃に、公民館なんかでこういう講座をする時に書いたやつが基になっているのですが、一番上に「社会の問題」とあります。それから一番下に「行政施策など制度・システムとしての実現」とありますが、まあ解決です。二つ方法があるんです。一つは机の上で、例えば、市役所の机の上で職員が電卓叩いて制度をつくっていくような場合ですね。それからこっちが、黒い方がボランティアがやる場合。さっきの行動を通してどうのこうのと言ったあれのことです。どっちがピツタリカンカンなものができるかという話になります。ボランティアはこっち側を担当することですよという、そういうことが申し上げたかったわけです。その辺が資料の中に登場していると言うか、事例編が書かれているとお考えください。

そうしますと、それら「ボランティアというのはそんなことだよ」というのを念頭に置いて、実践編は熊谷さんの話に出て来るとは思いますが、コーディネートをしないと学生を放ったらかし



ていいということにはなりませんよ、ということです。それが、そのための体制が採れないばかりに、私の大学にボランティア・センターが未だにつくれないということです。

これだけで、最後にこの「留意すべき学生のボランティア観」という。「ボランティアとは強制されるものだと思っていました」というのがさっきのアンケートの答えに続々出てきて、私は本当に引っ繰り返りました。語義矛盾なんですよ。「自発的な」ということを前提に言っているんですが、そうではなかったと、入学直後に私の話を聞いて学生が感想を持ったんです。ということは、小中高のどこかで、強制されてやるものだというイメージが埋め込まれているということです。誰かに強制されてきたように思います。学校とか担任から「やれ」と言われてしぶしぶやるのがボランティアでした。「やれ」と言われてする。ボランティアに参加する人、自分はしないけどね、してる人を見て、でもどう見ても自分がしたくてしている人だとはどうしても思えなかった。「嫌々やってるのにな、あの人は可哀相に」と思ってお友達を見ていました、というわけです。素直な感想だと思いますよ。小中高の先生がここにいないからいいでしょうけれど、ちょっと考え直してもらわないと不味いなと思います。

自ら提案するんだ、解決するんだという、そういう意識が乏しい。誰かが募集をしていて、それに応募して、言われたとおりに何か働くというイメージを持っている学生が非常に多かった。それから社会生活をしているという認識に非常に乏しい。日本語の「社会人」という言い方に問題があるんですけど、生まれた時から社会化されてくるという話が、教育学を勉強すればすぐに教わる話ですけど、「自分は学生だから社会とは関係ない」と言ったり、或いは、保護者にもいるんですよ。うちは女子大学だから特にそうなんです、「社会と関係を持つな」と親父さんに言い包められてくる学生がいるんです。「社会から何されるかわからない。お嫁に行けなくなるかもしれない。だから社会とは関係を持つな。町内会なんてとんでもない。社会活動なんて卒業してから考えろ」と言われて、寮の中へ籠ってますという学生がいるわけで、困っちゃいますね。そんなこんな。そうなってくると、いろんな広報活動とかコーディネートにあたって、これらを留意して出発しないと、やる奴はやる、やらない奴はというようなことになっていくだろうなということです。

そういうわけで、単なる社会体験、今までしなかった経験をするチャンスでしたということ。もちろん成果はそれで一杯上がってくるわけですからプラスなんです、それだけで終らせないためにはやっぱり適切なコーディネートと、そのコーディネートをする期間という意味でインターメディアリ (intermediary) という言い方をするんですが、後で熊谷さんが実践編を語ってくださるはずですけど、それが必要だろうと、それが私が今訴えかけたいことでございます。

それでは、私の時間は終わらせていただきます。次に熊谷さんが出てくるまで、しばらくお待ちください。どうも有難うございました。

### 34. 熊谷紀良主任（東京ボランティア市民活動センター）

皆さん、こんにちは。東京ボランティア市民活動センターの熊谷と言います。私は実践と言いますか、この10年間ぐらい、10年間ずっと私ボランティア・センターで、学生ボランティア推進というところを担当しています。

今日のお話は、そのギャップ・イヤーとボランティア体験との連携というふうに書いてあります。ボランティア体験には、実際に現場・活動先があるわけです。そういうところは今、どういう状況になっているのかということ踏まえながら、お話をしたいなと思っています。

先立って2月に、ボランティアフォーラムと言って、いろんな分科会を30ぐらいつくって話し合おうというテーマ、今話題のテーマ、例えば貧困の問題だとか、ホームレスとか精神障害の問題だとか、いろんな社会に対する問題にどんな人達が関わっていて、どう関わっていけば良いのかというようなことを考えるイベントを行ったんです。その中で、学生さん、特に得意な方が多いですけど、ワークショップ、ダンスのアートのワークショップをやってみようということで、ダンスワークショップをやりました。そうすると、アート系の学生さん何か結構参加していただいたんですけど、講師としてお招きした方がたまたまイギリス人の方で、ダンスワークショップをずっとやっていらっしゃる方なんですけど、その方自身がやっぱりギャップ・イヤーで、実はこの道を決めたんですってお話だったんです。最初は、大学に入る前は美術史をやりたいというふうに思っていたらそうなんです。だけれども、そのギャップ・イヤーで、実際にいろんな現場を見て回ったら自分がやりたくなくて、遂にはアーティストとしてダンスをする方になったということで、ギャップ・イヤーが自分の人生を変えたんだということを期せずしておっしゃっていたんですね。つまり、やっぱりそういうような機会というのが、これは大学に入る前にあって、そして、大学の中でそれを深めていくための一つのきっかけとなるわけですけども、そういう意味では、大学で学ぶこととその大学で学ぶ前、それから学んでいる時もそうですけれども、やっぱり社会とか地域の関りというのがすごく必要になってくると。

その時にどんな形で大学と学生と、そしてやっぱりそれを活動先としての、先ほど海外もありましたけれども、海外もあるし、国内だっていろんなフィールドがあるわけですね。そういうフィールドと参加したい学生さんを、一つはコーディネートするのが私達のような中間支援機関、インターメディアリーと呼ばれているような中間でコーディネートをする機関なんです。これは地域のボランティア・センターとも言えますけれども、様々なフィールドにコーディネートをする。そして今は送り出し側、いわゆる大学の学生さん、それから今、社会貢献で、企業の社員も参加したいというのがあるわけですけど、そういう人を送り出していく側にもコーディネートをするような大学のボランティア・センターや、企業にも社会貢献の担当の方がいらっしゃるんですけども、そういうところでコーディネートを送り出す側とする方と、そして受入れ側ということで、活動先のフィールド、施設とかNPOだとか、現場で実際に活動する上でコーディネートをする受入れ側の人達もいる。そういうような間に立って活動している立場で、今日はお話をさせていただきたいと思います。

それから、秦先生からお話があった時にお話ししたんですけども、国立大学でまだこういったボランティアの体験学習や体験の機会というのを考えているところというのは本当に無いんですね。私はこの機会に、是非そういうふうと考えていただけたらというふうに思っているのは、10年前にやっぱりやった時にいろんな大学に呼びかけしました。すごく公立大学でも是非来ては

しいなと思ったんですけど、ほとんどいらっしゃらなかったんです。やっぱり進めやすいというのが、もしかして私学の方があるのかもしれませんが、やはり活動者の中には公立の大学でやっているし、その大学のやっぱりミッションとして、公立だからこういうことをやっぱり考えたいというのはきっとあると思うんです。ですから、これを機会に大学の本来のミッションみたいなところと、私達がボランティアで活動するという中で持っているミッションが、重なり合って進めて行けるようなことがあると良いなというふうに思っています。特に、ボランティアNPOは制度指向、制度でもって、やるというものではない。強制でこう決まっているからやるというものではなくて、やっぱりニーズ指向、目的指向なんです。それがやっぱり他のいろんな立場の方々にとっても大事だと思ったもので、一緒にやるということになりますので、そこで合うためにはどう考えたら良いのかというお話になるかと思います。

ボランティア活動の、どういった考え方をすれば良いのかというのは、先ほど菅井先生からお話があったと思うんですけども、例えば、東京で私達がボランティア活動推進をしている中でも、やはり時代の始まりというのは、学生さんのボランティア活動から、実は始まっているものは非常に多いんです。戦後間もない頃の子供会活動、これは戦災浮浪児とか、戦災孤児とかと言われている子供達を何とか一緒に助け合おうということで、子供会活動をしたり、或いは、70年代の障害者活動や80年代に国際協力のNGO等が出てきた時も、これはやっぱり学生さんが学生運動もいろいろある中で、そういう海外にいろいろ目を向けて、一緒にやっっていこうという中からできてきた運動ですし、90年代に地球環境ということで、例えばアースデイとか、地球環境を守るということを考えて時に、キャンペーンをしてきたのも学生さん中心で、やっぱりいろいろと関ってこられたということがあります。それから95年の阪神淡路大震災の時、これを契機に災害ボランティアといったものも、神戸で起きていることを何とかしたいという学生さんがいろいろ全国から集まったというようなこともあります。そういう意味では、コミュニティに関して改善していくというような取組、こういったものの先頭に立ってきているというのは学生さんですね。

セツルメントという言葉、お聞きになったことあるでしょうか。言葉としては大分古いと言うか、昔からある言葉で、実際にやっっていしゃる活動もあるんですけども、この今言った興望館というところがセツルメント。あとは隣保館とかいう名前の呼び方をする時もありますけれども、地域の中に入り込んで、そこで起きている問題だとか、特に貧困とかいろいろあるんですけども、そういったものに対して活動でもって取り組んでいこうというような、そういう運動のことをセツルメントと言うんです。例えば、若者のいろんな学びをする青年学級、特に障害を持った方に対しての、土日とか空いた時間のいろんな協力活動ということで、青年学級とかも呼んだりしますけれども。それから、障害者の生活圏の拡大の支援なんかも、やはり長期に亘って地域に入り込んで活動してきた。そういうものの多くは、大学の中で結成されたボランティア・サークルですとか、大学同士が協働し合っってインターカレッジでやったサークルでの取組というのが多かったんです。

私達は1981年に青年ボランティア推進事業で、夏休みの体験ボランティアというキャンペーンを始めました。今ではかなり全国的に行われているんですけども、そういうキャンペーンを新たに始めたというのは、学生、青年層の情報提供、参加促進というところを狙っていたんです。大学の中で今までは先輩から誘われてとか、一緒にやろうということでやってきたんですけど

も、そういう大学の中でボランティアをしていくようなサークルが減ってきたり、或いは学生の生活の多様化ということで、ボランティアだけじゃなくて、アルバイトを一生懸命やらなきゃいけないとか、いろんなライフスタイルができてくる中で、ボランティアに参加するというのがなかなか少なくなってきた、機会が減ってきているというようなことがあったんですね。それに対しては、ボランティア活動自体はいろんな広がりがあって、従来、福祉というようなイメージがあったんですけども、それ以外にもいろいろ活動が広がってきた。では、そういう情報を学生がどうやって受けれるのかという中で、大学の中に当時はまだボランティア・センター等がなかったもので、そういう学生に向けて、夏休みを利用してこんな活動がありますよということを、少し明示しながら体験してもらおうということでやってきたキャンペーンなんです。

社会的にも学生だけじゃなくて、生徒なんかも含みます、生徒、児童も含みますけれども、小・中・高、それから大学でボランティア体験とか奉仕に関して進めていったらどうかというような話が出てきました。そういう話が、一つは先ほども出てきましたけれども、国民会議とか、国の会議の場に出てくる前に、例えば、学校の宿題としてボランティアやりましょうとか、やってきなさいというようなこと、それから、授業の一環として全員で老人ホームに出かけたりとか、何かそういうようなことが出てきたり、或いは入試の専攻への影響というようなことが出てきたと。それに合せて参加者自体は増加してきたんですね。ただ、その中身を見ると、やっぱりモチベーションとか、マナーが非常に低下してきた。それはやらされ感ですね。行かなきゃいけないからとか、何とかということで来るわけですから、当然、活動先の現場にとっては、何で本当にやる気があるのかどうかとか、或いは、来るのを守らなかつたりとか、来る時間を守らないとか来ないとかいうこともありますし、来ても何かもう何やったら良いんだろう、うーんということで、友達とお喋りしているというような、モチベーションやマナーの低下に繋がるのではないかとということで、この間やっぱり自分の意思じゃない形で来た人達というのは、どう捉えれば良いのかということが非常に問題になってきていたんですね。

しかし私達は、ボランティア体験というのは、あくまでもボランティアそのものではないと。自分が自分の意思で続けていってこそ、それはボランティアになっていくわけですけども、機会として何かこういうものがあるよ、こういうものをやってみたらというような機会を提供することで、先ずやってみようとか、こういうものを知ってみよう。学びも含めてですけども、やることに対しては、ボランティア体験なんですというような位置付け。そして、機会としてこんなことは面白いよとか、活動者の人々を呼んできて一緒に勉強したりとか、こんな活動先があるよというような機会も一緒に提供したりというような形でもしやってくるのであれば、そういうものは進めていっても良いんじゃないかというようなお話をしてきたんですね。以前の国民生活白書の調査でもありましたけれども、6割以上の方が、ボランティアをしたいんだけどその機会がないというような理由を出しながら、実際の活動者は1割だということが非常に問題になりました。

そういう意味で、やっぱり活動、どんなものがあるのかというような場の提供、機会の提供というのはやっぱり大いにあるべきだということで、少しボランティアとボランティア体験というような位置付けを分けて、考えて推進してきたというところです。

今、ボランティア体験というところから、さらに市民学習というような呼び方、或いはサービス・ラーニングという言葉もいろいろ出てきますけれども、この市民学習という言葉を使いなが

ら、今、大学とか高校の場での体験を進めてきています。市民学習というのは、イギリスの方でシティズンシップ・エデュケーションという言葉があって、市民性を学ぶ学習なんだということで、体験に参加し自分が一人の市民として、どんなことを考えたら良いんだろうか、やったら良いんだろうかというようなことをいろいろ学ぶ場なんだということで、市民学習というような言葉で推進をしております。

ただ、私達、ボランティアをやっている者から出てきたのは、実は強制への反発というのもあったんですね。奉仕という言葉が使われたところに、非常に奉仕の言葉の捉え方というのがあって、その言葉には非常に違和感がある。例えば、やらなきゃいけないからということで、学校現場で全員で清掃活動する。清掃が悪いわけじゃないんですけども、清掃を全員でやって、こうやれというようなことを強制されてやったとすれば、それは全くボランティアでもないし、何を学んだということですね。

先ず大事なのは、自分達が先ず何をやりたいか、何に気づくかということからやるということ、そのプロセスを大事にしたかったので、奉仕という言葉の中で、一律にそういうものを強制するのはどうなのかと。都内の高校の、東京の都立校なんかでは奉仕の時間というのをつくって、中には全員で何かマラソンに参加しますとか、マラソンの補助に参加しますなんていうのもあるわけですけども、本当にそういうやり方が良いんだろうかということで、強制そのものへはやっぱり反発がかなりあったわけなんです。

しかし、同時に並行して、ただ反対するだけでは何も生まれてこないのも、もし機会として、先ほど来言ってきた体験や学習の機会というのがもしあるとすれば、こんなやり方があるんじゃないかということで、研究や提言をしてきているわけです。それはやっぱり学習の方法だとか、活動先としてのフィールドがそれなりに確立されているということがないと翻弄されてくる。身近な例としては、今まで小・中・高と総合的な学習の時間ができてきています。中には、やっぱりやらされ感が非常にあったりとか、自分のやりたくないテーマのものしかなかったとか、そういう中で、それをボランティアと自分の中で受け止めてしまって、もう大学来たからボランティアなんかやりたくないとか、そういうふうにおっしゃる学生さんも非常に出てきたと、拒否反応が出てきたというふうな問題性も出てきています。ですから、もし一つの機会として体験があるとすれば、それは自分で学んだり選べたりするということ、それから、やっている時にやっている中での悩み、先ほどもいろいろ出ていましたけれども、そういうものを受け止めたりとか、アドバイスをするような機能が必要だと。そして、終わった後に振り返り、どうだったのか。良いことをやっぱり良かった、こういうことが良かったということも共有しながら、活動先とも一緒に考えていかなきゃいけないような部分、そういうプロセスをやっぱりつくらなければいけないんじゃないかということも言ってきています。

大学におけるボランティア活動推進、特にボランティア体験推進の傾向なんですけれども、10年来のところで、様々な大学で、やはりボランティア体験を推進するということが言われてきているんですけども、少し傾向として幾つかパターンがあると思うんですが、これはギャップ・イヤー自体はまだまだ少ないと思うんですけど、大学の中でもそういう学びをどうするかという中では、幾つか傾向があるように思います。

一つは情報提供ということで、こんな活動があるよという活動の募集とか、中身そのものを提供していくということです。それから講座をつくって、活動者の人に話を聞いたりとか、ボラン

ティア論というものがあつたりとか、そういうような講座をつくっていくという段階、それから体験をちゃんと入れて実施しているというところ。実はこれ、GPのプロジェクトで今やっているところが増えている、私達のところにも相談が来るんですけども、やはり体験を入れるということは、同時に、その評価や単位認定と結び付けてきているところが多くなっているようです。そして、それをやるにあたって、やはり体験まで来ると、実際にその地域のボランティア・センターとか、受入れ先の団体や施設との関係をやっぱり持ってきているところが多くなっています。

何か活動していくというのは、自分でやってきてくださいというのも良いんですけども、同時に、大学がどんな意味とか気持ちでこの体験を受け入れている、位置付けているのかということを知りたいというのが非常に多いです。そういう意味ではギャップ・イヤーを進める時になった時には、どんな意図で大学がやっているのかというのが、やっぱり活動先に伝わっていくことが必要かと思います。

先ほども紹介しました興望館では、実は英国からギャップ・イヤーの受入れをしているんですけども、やはり英国であっても、国が離れているというのも非常にあると思うんですけども、年を経て担当者が変わると、どんな形で受け入れてほしいのかというのがなかなか通じなくなっているというようなこともあるというお話がありました。ですから、やはり送り出す側として、どんな意図でやっていきたいのか、そして、活動先でどうであったのかというのが共有できるような仕組みをどうつくるのかというのが必要になってくると思います。

同時に、活動現場の方も、やっぱり小・中・高校生も今訪問がすごく多くなっていますし、実習とかインターンと様々な形があります。介護体験という、教員課程の介護体験とかもありますし、様々な現場では混雑が起っています。なかなか十分に受け入れる余裕がないということもあります。単なる人手扱いと言うか、これをやってほしいから学生さんに来てほしいんだ、小学校、中学校じゃちょっと役に立たないけど、大学生だったら何かいろいろやってくれそうだからというような期待でもって受け入れているところもあるようです。やっぱりそういうところは改善していかなければいけないというような役割はすごく感じるんですけども、同時に、そういうようなところではない活動先を選ぶというのも、これは一つ、やはり学生さんにも必要のところになってくると思うんですね。そのために、コーディネーターは不可欠になるのかなというふうに思います。

近年の傾向として、そういうような経験をした後に、例えば、それを職業としたいとか、自分達自身が、将来的には企業だけじゃなく、そういう非営利の組織で働いていきたいとか、つくりたいという希望が増加しているんですね。団体そのものを指示したりとか、組織運営を支援したいというのいろいろ出てきています。それが例えば大学で、専門性という中には、例えばマネジメントとかいろんなことを研究してみるという学びに繋がるという可能性が広がってきているのではないかなというふうに思います。ですから、活動先として自分達で選んだところと同じようなところを将来的に選ぶのも良いと思いますし、社会に行ってからいろんな経験が役に立つことはあると思うんですけども、これからの時代は、自ら自分達の活動を社会に出すために、いろんな学び、働きができるのではないかなというふうに思っています。

最後に、ボランティア体験は、本当に豊かな学びの機会にするということでは、機会を提供し、振り返りを促すために、コーディネーターというのが、大学の中でもそういった存在が不可欠で

はないかと思えます。単なる出欠の評価というだけではなくて、学生自身がどんな学び方をして、どんなことが得られたのかという形の評価も必要ですけれども、大学で学ぶということにどう結び付いたのか、大学の知と、社会とも結び付いたということが、やっぱり評価される必要はすごくあるんだろうと思っています。学生個人だけではなくて、私は大学とその地域・社会の結び付きも評価されるべきですし、そこから何か研究が始まったり、実践ができたというのも、これからは出ても良いと思えますし、そういうところを私達もそこを前面に紹介していきたいなと思っています。

そういう意味で、是非ギャップ・イヤーという形になるか、いろんな検討があると思えますけれども、一緒にこれからもそういうつくり方というのをさせていただければというふうに思います。

以上で、ボランティア・センターからの報告を終わります。どうも有難うございました。

### 35. 酒井亮征 (名古屋商科大学)

皆さん、こんにちは。名古屋商科大学で学生支援部門という部署で国際交流を担当している酒井亮征と言います。本日はよろしくお願ひします。

本日はギャップイヤーと国際ボランティアプロジェクト等の連携についてということですので、先ずは本学で実施を行っていますギャップイヤープログラムというものについて、ほんの少しお話をさせていただきます。

本学では、「一つの国、一つのキャンパス、一つの言語で大学生活を終える時代ではありません」というテーマに基づいて、様々な海外研修プログラムを推進しています。その中で1年生が最初に参加をする機会が与えられるのがギャップイヤープログラムというものです。その次に人気があるものはフロンティア・スピリット・プログラムというもので、これは語学研修プログラムと海外でのインターンシップを合せたプログラムです。先ほど、本学の尾崎から話がありました夏休みに実施をする国際ボランティアプロジェクト、これは名古屋商科大学が独自に実施しているものではありません。ベルギーに拠点を置くNPOが実施しているものへの参加を本学は強く推進しているというものです。

次にあるものが通常の交換・派遣留学。最後に春期・夏期の語学研修というものがあります。この中で1番、3番は語学研修ではありません。語学力の向上といったものを目的とするプログラムではありません。2、4、5というものは多くの学生が語学力の向上のために参加をしますが、1と3、本日の議題に上るプログラムはどちらも語学力の向上というところを目的としません。

では、本学が実施しているギャップイヤープログラムというものですが、これは私もどこかインターネットのサイトで見たんですけれども、非常に的確な表現をしてくださっているページがありました。「名古屋商科大学のギャップイヤープログラムというものは、ギャップイヤーのようなプログラムである」、そのとおりです。これはいわゆる英国で行われているギャップイヤーとは違ひます。ギャップイヤーというものを何とか今の日本の仕組みの中に取り入れることができなかつたかと思つた時に、クリアしないといけなかつた課題が幾つもありました。9月入学の件、あとは企業が4月ではなく、他の時期で学生をどんどん採用していくそういった姿勢、それらがクリアできる前にギャップイヤーの良いところを導入するにはどうしたら良いのかと思つた結果、一つのパッケージ化したプログラムとしてギャップイヤーのようなものを実施する運びとなりました。

対象となるのは新入生が40名までです。新入生でこのプログラムに参加を決めた者は、1年次前期をこのプログラムに参加することのみに使ひます。通常の科目の履修は行ひません。ギャップイヤープログラムに参加が決まると、4月に事前研修を国内で受けます。その後4月の下旬か、或いは5月の頭の辺りにヨーロッパへ渡航しまして、6月一杯、7月のほんの最初の辺りをヨーロッパで研修に使つて、7月に帰国をして事後研修というものをまた名古屋商科大学で受けて、プログラムは終了となります。ここで新入生40名まで対象というふうにあるんですが、実は平成21年度の実施から新2年生も対象という新たな試みを始めます。

4月に行う事前研修というものの中では、ギャップイヤープログラムというものに参加をするにあつたての基本的なところの確認を行います。先ず一番重要なのが、学生それぞれが定めるギャップイヤープログラムへ参加する趣旨です。例えば、実家がパン屋さんなのでヨーロッパでパンの研究をしたい。それは立派な研修テーマだと思ひます。そういったものが挙げられます。先



ほどプレゼンをした南は教育に興味があるものですから、日本とヨーロッパの文化の違いはよくわかっている。文化が違えば教育も違うのか、そういったものを実際に見てきたいということで、自分が小学校に通った時の経験を思い出しながら実際にヨーロッパで小学校を訪問して、ヨーロッパでの小学校の教育はどのように行われているのかというのを見て帰ってきました。

そのテーマがきちんと確定しましたら、次は 11 週間に及ぶヨーロッパでの期間を実際にどのように使うのか、具体的なプランを立てます。私はここでこういったことを行いたいのでフランスへ行きます。その後ドイツへ行きます。そういったところ、旅行計画をしっかりと立てます。ここの上の 2 点が終わった段階で、実際に海外へ行った時に必要になるスキルの確認に入ります。健康危機管理に関すること、定期報告をするためのコンピューターを使用するちょっとしたスキル、或いは行った先々で、ヨーロッパは国を越えれば随分事情も変わってきますので、電車の乗り方、お金の下し方、また犯罪事情、そういったところをカバーして、また先ほど尾崎のプレゼンの中にもありましたが、世界共通語として英語というのは大変重要ですので、最低限の用事が足せるように集中的な英語の研修を行います。英語の研修を行った後は本学にある SAC という自学自習の設備を使って、さらにそれを定着させていく。この中で個人的な悩み、或いはこういうふうでテーマを設定したんだけど、それを行う自信がないといったようなものが準備期間の間にどんどん出て参りますので、その辺を解決すべく個別相談の時間も事前研修の中には盛り込まれています。

実際に海外に出ましたら、学生は自分自身が決めたテーマに則ってヨーロッパ各国を訪問します。先ほどのパンの話に戻りますが、実家がパン屋さんで、日本の主食は米、ヨーロッパはパンが主食だと聞くが、本当に日本人が米を食べるようにヨーロッパ人はパンを食べるのか、それを確認したいということで行った学生は、とにかく行った先々で最寄りのパン屋さんへ行って、「一番売れているパンをください」、そのパンを買って食べ続けるという生活を行いました。最初の 2 週間ほどは感想があるだけです。「ヨーロッパのパンは日本のパンより美味しい」、それが素直な感想です。3 週間目になると、「餡パンやクリームパンのように中に何か入ったものが食べたい」、そういった報告が上がってきます。これはヨーロッパのパンはあくまでジャムを塗ったりバターを塗ったりして食べる形式のものが多く、中にはあらかじめものが入っているものが少ないということだったんですね。この辺りまでは言ってみれば幼稚な発見なんですけど、その後 4 週間目 5 週間目に入ると、いよいよこのギャップイヤープログラムに参加をした面白みが出てきます。と言うのは、ある程度のパターンをパンの中に見出すからです。例えば、山間部に行くとパンが黒くて硬いが多いのは何でだろう。海の近くを旅しているとパンは白くて柔らかいのはどうしてだろう。自分の毎日の生活の中から一定のパターンを見出します。その中に疑問を抱きます。疑問を抱いてその理由を突き止めたくなるわけです。なのでそこからは、そんな気がするけど、本当に山は黒くて海は白いかというのを自分から確認をしに行きます。「あ、私は来週から山へ行くけれども、パンは本当に黒いかな、多分黒いんだろうな」。実際に行ってみると黒っぽいパンが多い。「ああ、やっぱり黒いパンが多いんだな」これは高校を卒業したての者が行っているレベルではありますが、大学の研究者などが研究をするプロセスと何ら変わりはないと思っています。

パンは一例ですけれども、他に学生は企業見学を行ったり、またボランティアへ参加をしたり、それ以外の調査、パンに代表されるような調査を行います。学生は海外へ行ってこういった行動

をしている間、最低週1回の連絡が義務付けられています。この連絡を怠ると、後で出て参りますが、最終的にこのプログラムへ対する評価を与えるわけですが、その中から減点があります。なので、この定期報告というのは、我々大学がプログラムに参加をしている学生が本当に毎日きちんと活動を行っているのかなあという確認をするための苦肉の策です。学生のそういった行動を支援するために、大学ではユーレイルセレクトパスというヨーロッパ鉄道のパスとあとは移動の際に荷物を入れるためのバックパックを支給するようにしています。

海外研修が終って日本へ帰国した後、すぐに事後研修というものに入ります。この事後研修というのは、簡単に言ってしまうと、一つは学生が海外で持って帰ってきたものを単位認定可能な形にしてもらうというものです。それはどういうことかと言えば、海外での経験を一つのきちんとした報告書にまとめさせるということです。もう一つの目的は、先ほど小山先生の発表の中にもございましたが、大学での居場所づくりというものを1年次前期にギャップイヤープログラムだけに参加をしてしまった学生は行っていません。ですので、後期からの学園生活のための足並みを揃えるために、他の学生とちょっとでも交流をさせる機会を持たせたり、或いは教室はどこにあるんですよということを教えていたり、そういったことを行います。このプログラムに対して本学は奨学金を支給しています。

単位認定ですが、三つのパートに分けてありましたので、それぞれ三つのところにウエイトを課してあります。事前研修は30点、事後研修では20点、海外研修レポートを50点というふうにしてあります。先ほど海外に行っている間の定期連絡を怠ると減点があると言いましたが、1回報告をしないとこの50点から2点引くようにしています。なので10週行って10週丸々連絡をしないとそれは20点の減点ですから、ここが30点になります。30点減点されると自動的に10単位丸々もらえるということがなくなるように、ここに素点評価の一覧がありますけれども、100点満点で評価する中で素点評価が81点から100点であれば10単位を認定する、そういったクリアな認定方法をしています。

事前研修と事後研修においては研修のそれぞれの中での参加状況、或いは毎日出す課題の提出状況、そういったものを見て評価を与えています。事このギャップイヤープログラムに関しては、提出したものの出来というものはこの研修レポート以外では評価をしません。事前研修・事後研修の部分はその取り組む姿勢こそが評価されるべきだというふうに考えていますので、仮にあまり大学生として胸を張れるような内容でない課題の提出があったとしても、それが毎日きちんと定期的に提出されているようであれば、それは提出をする意思があるということで、きちんと事前研修・事後研修においては評価をします。ただし海外研修レポートに関してはその内容をきちんと見ていきます。

本学がこのプログラムに10単位までを与えると言っているということは、本学では通常の科目は1科目1期履修すると2単位が与えられますので、このギャップイヤープログラムというのは5科目を履修したのと同じ扱いになります。であれば当然大学としてはこのレポートの中に大学での5科目を履修したなあ、それと同等のものをきちんと持って帰ってきたなあというのが確認できなければいけません。ただ、1年生の前期に実施するというので、こちらもまあ相手は高校生だなという見方もしておりますので、事前研修の中で実際に先生に入っていて、大学に入ってからレポートを提出する時はこういうふうにレポートを書くんですというレポート指導も事前研修の中で行っています。

こんな感じで名古屋商科大学ではギャップイヤープログラムというものを実施しています。

最後にプログラムの応募人数と実際の参加者の人数を載せておきました。2005年から2009年まで上ってきています。参加者はここ3年、開始からは随分と応募者が上ったんですがその後応募者は多少落ちています。これは残念ながら1年生の入学人数が下がっているということにも関係しています。ただ、入学対プログラムの応募者というパーセンテージで見ると、パーセンテージ自体は増加している傾向にあります。その中で実際の参加者数を見ますと、1年目、初めて実施した際は私共でも応募者に対する選考というものを行いませんでした。ですので36名応募した者が全員参加をしています。2年目からは大学側がプログラムに求めるものというものがもう少しはっきりして参りましたので、そういった趣旨に沿った学生を派遣しようということになって、2006年度の実施から選考を行っています。ここ44名あったのに31名の参加、59名応募があったのに22名の参加となっているのはそのためです。今年度はまだ募集中なんですけど今のところ39名の応募があります。今年度、平成21年度からは新2年生も参加できるようにしたというのがありましたが、この39名のうち5名が新2年生です。

ここに国際ボランティアプロジェクト、これは夏休みの間に行うものですが、この参加者人数も載せておきました。本学はこれを、参加をすごく応援しているものですから、幸い随分多くの学生が毎年参加をしてくれています。特にこの2005年辺りから参加者が増えたんですが、私も現場で広報活動を行っている立場として言わせていただければ、それほど大きな広報を行っていません。これは最近、本当に2006年、ここ2006、6と続きますがこちらは2007です。その辺りから学生間での口コミでの参加決定というものが大変増えています。実際にこのプロジェクトへ応募が始まるのは4月の中旬以降なんですけれども、大体年明け1月、2月ぐらいから必ず私のところへ「すみません酒井さん、国際ボランティアの申し込みっていつからですか」という質問が学生から直接上ってきます。「まだ冊子も出ていないのにどうして知っているの」と聞くと、「いやこの間ゼミで一緒だった先輩が、いや絶対行けよと言うんで」というような話で、そういった学生が年々増えています。

このギャップイヤーとボランティアの関係をちょっとだけ最後に喋りたいんですが、ギャップイヤープログラムにおいて、本学ではワークキャンプという形のボランティアへの参加を勧めています。これには二つの理由があります。ワークキャンプへ参加した学生が帰ってきたのを見てもと人間的成長をしているなというのが確認できるからです。これは本学がギャップイヤープログラムというものを実施している意図と完全に一致します。これは本当に空港へ行って、その学生が帰ってくるところを見ると明らかなんですけど、出発する前はただの学生なんです。帰ってきた時、出国ゲートから出てきた時の笑顔を見ると単に嬉しくて笑っているだけじゃないんです。「あ、こいつ強いな」と思います。平たい言葉で言ってしまうと、出発する前の学生は、喧嘩を始めたなら絶対僕が勝ちます。2、3発殴れば倒れてしまうような学生が多いんです。ただ帰ってきて、出国ゲートを出てきた学生を見ると先ず殴ろうと思いません。強そうだからです。それはもう顔が自信に満ちています。何かこちらが問いただしたら必ず答えが返ってくる顔をしています。実際に意地悪な質問を2、3してみます。前であれば、「あ、いや、そういうこと言わないでくださいよ」ぐらいで済ませてしまったような学生も、「いや、あ、そうですね。それははい。こうこうでした」と断言するようになっています。これは毎年50名ぐらいの学生がそうなっているのを見ると、もうこちら、あ、ボランティアプロジェクトに参加をすれば人間的に

成長するんだなと納得せざるを得ません。ギャップイヤープログラムに関しても同様のことが言えます。

もう一つ、ギャップイヤープログラムにおいてボランティア参加を勧める理由があります。それは 11 週間という長い期間を海外で過ごさせるにあたって、ボランティアプロジェクトという安全な場所に学生が 3 週間なり 4 週間なりいてくれるということは我々にとって大変好ましいことだからです。毎日毎日、電車に乗って移動しながら自分でユースホステルを予約して泊まる、そういった毎日を繰り返して、たまにはユースホステルの予約がとれない時に、実際、男子生徒などですと道端で野宿をするケースがあります。これは大きな声では言えないことなんですけれども。そういったことが起きるよりは、実際にワークキャンプという場所でプロジェクトをきちんと運営している人もいて連絡先もある、またそれに参加している仲間もいる、そういった状況があるのは大変良いことです。それら 2 点、人間的成長が確認できる。ワークキャンプは安全な場所である。その理由からギャップイヤーにおけるボランティア参加を私は推薦します。

以上、急ぎ足になりましたが、ご拝聴ありがとうございました。

ギャップイヤー研究会  
**GAP YEAR SEMINAR**  
「ギャップイヤーとボランティア・社会体験との連携」  
アンケート調査結果

飯塚和明

はじめに

ギャップイヤー研究会の「ギャップイヤーとボランティア・社会体験との連携」と称するセミナー開催の折、参加者に対してアンケート調査の協力を依頼・実施した。

本稿では、アンケート調査結果を質問項目ごとに集計し、その傾向を分析・提示する。また、ギャップ・タイム制度の導入に対する様々な意見を取り挙げ、今後のギャップイヤー/ギャップ・タイム導入検討の際の基礎資料とするものである。

### 1.調査結果

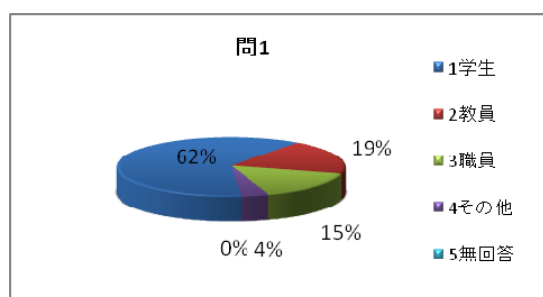
本研究会のセミナーには、学生、教職員などの総参加者数は 40 名であり、アンケートはその参加者の 65%にあたる回収率となった。

	上段:度数 下段:%	合計	職業			
			学生	教員	職員	その他
回収総数	合計	26	16	5	4	1
		100	62	19	15	4
回収率		65				

### 2.アンケート調査結果の分析

本節では、アンケート調査における各質問項目を集計し、その傾向を分析する。

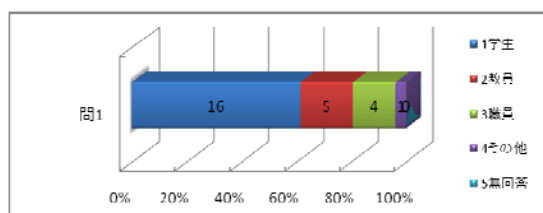
#### 2-1. 問 1. 「現在の御身分は以下のどれに当てはまりますか」



問 1 の回答について、表 2-1 から 2-3 はその割合を示したものである。

問 1 の質問に回答したうち、学生が最も多く、今回参加者の 16 名 (62%)であり、続いて、教員 5 名(19%)、職員 4 名(15%)その他 1 名 (4%)であった。

(表 2-1)



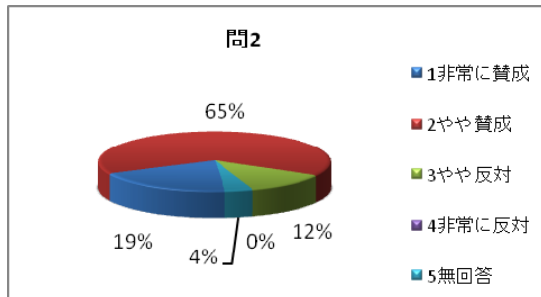
(表 2-2)

性別は、男性(7 名)女性(10 名)不明(9 名)であった。その内訳としての人数は、学生は、男性(3 名)女性(6 名)不明(7 名)、教員は、男性(2 名)女性(2 名)不明(1 名)、職員は、男性(2 名)女性(1 名)不明(1 名)、その他は、女性(1 名)の合計 26 名であった。

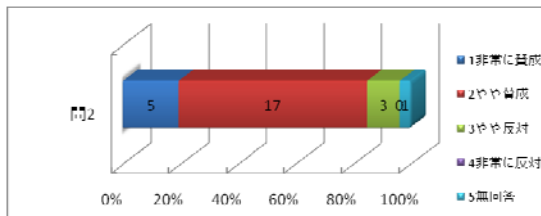
	問1	Percent %
1学生	16	62
2教員	5	19
3職員	4	15
4その他	1	4
5無回答	0	0

(表 2-3)

## 2-2. 問 2. 「日本のギャップ・タイム制度の導入に対してどのようなご意見をお持ちですか」



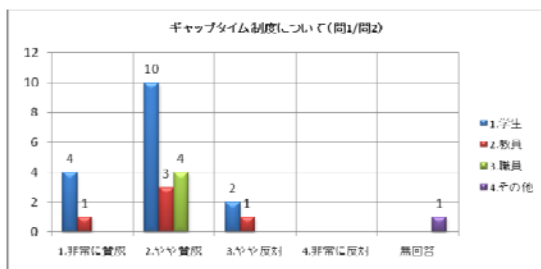
(表 2-2-1)



(表 2-2-2)

	問2	Percent %
1非常に賛成	5	19
2やや賛成	17	65
3やや反対	3	12
4非常に反対	0	0
5無回答	1	4

(表 2-2-3)



(表 2-2-4)

	総数	1非常に賛成	2やや賛成	3やや反対	4非常に反対	無回答
1学生	16	4	10	2	0	0
2教員	5	1	3	1	0	0
3職員	4	0	4	0	0	0
4その他	1	0	0	0	1	0
総計	26	5	17	3	1	1

(表 2-2-5)

## 2-3. 問 3. 「もし、ギャップ・タイム制度を利用できるとしたら、利用したいと思いますか」

問 2 の回答について、表 2-2-1 から 2-2-3 はその割合を示したものである。

「1.非常に賛成」は学生(4名)、教員(1名)の合計 5名であり全体の 19%にあたる。

「2.やや賛成」は学生(10名)、教員(3名)、職員(4名)の合計 17名であり、全体の 65%にあたり、最も多くの参加者が選択している。「3.やや反対」は学生(2名)、教員(1名)の合計 3名であり、全体の 12%にあたる。「4.非常に反対」の選択はなかったが、無回答が 1名(4%)であった。

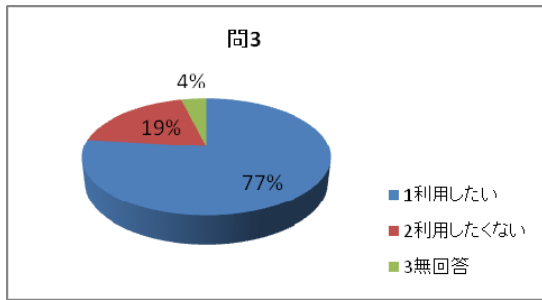
表 2-2-4・2-2-5 は、問 1 と問 2 の、2つの質問に対する結果を示したものである。

全体として見た場合、「1.非常に賛成」

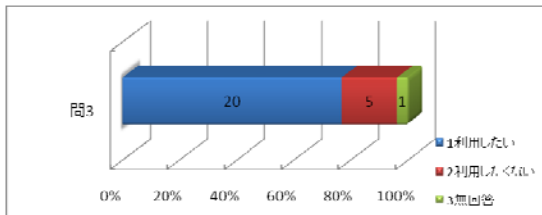
「2.やや賛成」を合計すると 22名(84%)が賛成とする意見であった。

しかし、「3.やや反対」「4.非常に反対」また「5.無回答」を含めると 4名(16%)の一つとして(教員)、「大学→就職の間に行く方が効果的(職員)などの意見が挙げられる。

また、反対の理由として、「長期休暇を利用したインターンシップやボランティア活動・留学などではダメなのか(学生)、「入試制度、企業等の採用活動と対応していない(教員)などの意見が挙げられる。



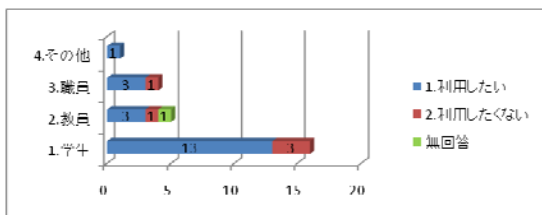
(表 2-3-1)



(表 2-3-2)

	問3	Percent %
1.利用したい	20	77
2.利用したくない	5	19
3.無回答	1	4

(表 2-3-3)



(表 2-3-4)

問 3 の質問について、表 2-3-1 から 2-3-3 はその割合を示したものである。

全体で 20 名(77%)が、「1.利用したい」を選択している。「2.利用したくない」とする人は 5 名(19%)。また、無回答が 1 名(4%)であった。

表 2-3-4 は、職業別によるその傾向を分析したものである。「1.利用したい」、「2.利用したくない」の選択の内訳は、「1.利用したい」は学生(13 名)、教員(3 名)、職員(3 名)、その他(1 名)が選択。「2.利用したくない」は学生(3 名)、教員(1 名)、職員(1 名)が選択。また、無回答が 1 名であった。

「1.利用したい」を選択した理由として、「短期でならやってみたい」(学生)、「入学後の目的を持たせる「スイッチ」になるのではないか」(職員)などの意見が挙げられた。「2.利用したくない」を選択した理由として、「大学卒業後すぐに入社できない」(教員)、「ブランクがキャリアの中断と見なされる」(職員)などがあつた。

### 3.問 2 における意見

ギャップ・タイム制度の導入についてという質問に対する理由として、学生・教員・職員・その他の中で、様々な意見があつた。勿論、肯定的または否定的な意見もあつた。

本節では、問 2 における代表的な意見を取り挙げる。

#### 3-1.非常に賛成

##### 3-1-1.学生の意見

「昨年にカンボジアへ行ったのですが、その時の体験が私の価値観を大きく変化させました。そのような体験をする“時間”があたえられることは、とても良いことだと思います」

##### 3-1-2.教員の意見

「日常的に学生に接していると目的を持たずに大学に通っている姿を見かけます。また、就職活動を始める段階になって「自分は何ができるのか？(何がしたいのか?)」という問いにぶつかって、悩んでいる姿もよく見かけます。ギャップ・タイムの導入は、こうした課題に対する解決策の 1 つになり得るのではないかと期待しています」

##### 3-1-3.職員の意見

=回答なし=

#### 3-1-4.その他の意見

=回答なし=

### 3-2.やや賛成

#### 3-2-1.学生の意見

「学生のうちにしかできないことであるし、人間的成長ができると考えるから。また、学生にももっとできることがあるのではないかと考えているので、ギャップイヤーとボランティアの連携ができたらいいなと思います」

#### 3-2-2.教員の意見

「ギャップイヤー/タイムのコンセプト自体は素晴らしいと思いますが、本日の各大学の学生達の報告を伺うと、わざわざ制度化しなくても自身でタイムマネージメントをしながら学業と並行してボランティア活動等の活動ができるのではないかと思います」

#### 3-2-3.職員の意見

「日本では高校→大学、大学→就職の間に機関がなく、ブランクがあることがデメリットとなっている。まずはこの風潮をなくし、自由度の高い社会をつくるのが先決と感じる。また、学生の成熟度を考えると、大学→就職の間に行う方が効果的と考える」

#### 3-2-4 その他の意見

=回答なし=

### 3-3.やや反対

#### 3-3-1.学生の意見

「長期休暇を利用したインターンシップやボランティア活動・留学などではダメなのか？ギャップ・タイムのプログラムに参加する学生は既にやる気と行動力があると思う。半年間で取れる単位が少ない。大学に慣れて何かやりたいと思ったときには参加資格を失くしているという人が多く出ると思う」

#### 3-3-2.教員の意見

「大学の入学制度、企業等の採用活動がギャップイヤーに対応できるようなものになっていない」

#### 3-3-3.職員の意見

=回答なし=

#### 3-3-4.その他の意見

「英国のG・Y（ギャップイヤー）はよくわかりましたが、「日本版G・Y」がよく分からないので、賛成・反対という返答をするのが難しいです」（問2 選択なし）

### 3-4.非常に反対

すべての参加者から、「非常に反対」という意見は皆無であった。

## 4.問3における意見

ギャップ・タイム制度を利用したいと思うかという質問に対する理由について、学生・教員・



職員・その他の中で、様々な意見が見受けられた。肯定的・否定的な意見もあった。

本節では、問3における代表的な意見を取り挙げる。

#### 4-1.利用したい

##### 4-1-1.学生の意見

「大変興味はありますが、大学を休学したり、1年間勉強が遅れてしまうのは避けたいです。短期でならやってみたいです」

##### 4-1-2.教員の意見

「人生において貴重な機会なので利用したいとは思いますが、事前の研修（知識やスキルだけでなく、その意義づけなど）をしっかりと行った上で参加することが大切である」

##### 4-1-3.職員の意見

「入学後の目的を持たせる「スイッチ」になるのではないかと考える。今後は、政府を中心にこの制度に対する補助金等の助成を検討していただきたい」

##### 4-1-4.その他の意見

「仮に英国の大学生だった場合、英国のG・Yをとという意味で」

#### 4-2.利用したくない

##### 4-1-1.学生の意見

「お金がかかる。1年の時に外国に行く勇気はない。大学には勉強するために入ってきたので、半年間を「経験」に費やすより、勉強しつつ、自分のできる範囲でできる社会貢献・体験をしたい」

##### 4-1-2.教員の意見

「入学時期が秋口になると、卒業が秋口になるか、企業の秋口採用が少なく、大学卒業後すぐに入社できない」

##### 4-1-3.職員の意見

「現在の日本の社会では、就業のブランクがキャリアの中断と見なされるため、就業しながらできる道を選ぶ（あくまでも既に社会に出ている者の場合）」

##### 4-1-4.その他の意見

＝回答なし＝

おわりに

アンケート調査結果の傾向を分析・提示することにより、ギャップ・タイム（イヤー）制度導入に関する賛成や肯定的な意見は多く、制度導入への期待度が高いことが伺える。

しかし、否定的な意見に着目すれば、現在の日本の社会と産業構造にどのような形態でギャップ・タイム(イヤー)が導入されるべきかという課題が残る。

制度導入の場合、ギャップ・タイム(イヤー)制度とボランティア・諸活動とどのような連携構築が求められるのか。また、政府や諸機関がどのように制度化し支援するかなどの問題も含め、「振り返りの期間」を日本社会に創出する可能性を今後も検討する必要性があるのではないだろう

うか。

(配布したアンケート内容)

### アンケート

本日は当研究会のセミナー「ギャップ・イヤーとボランティア・社会体験との連携」にご参加頂きまして誠にありがとうございました。当研究会の今後の活動を改善していくために、以下の点についてご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。なお、頂いたご意見は上記の目的以外では使用いたしませんので、率直なご意見をお聞かせください。

あなたご自身について

問1. 現在の御身分は以下のどれに当てはまりますか。当てはまるものを○で囲って下さい。

1. 学生            2. 教員            3. 職員            4. その他 (            )

ギャップ・タイム制度について

問2. 日本の大学へのギャップ・タイム制度の導入に対してどのようなご意見をお持ちですか。当てはまるものを○で囲って下さい。また、その答を選択した理由をお聞かせ下さい。

1. 非常に賛成    2. やや賛成    3. やや反対    4. 非常に反対

理由

問3. もしギャップ・タイム制度を利用できるとしたら、利用したいと思いますか。また、その理由をお聞かせください。

1. 利用したい    2. 利用したくない

理由

当研究会について

問4. 当研究会に関してご意見・ご感想等がございましたら、ご自由にお書きください。

ギャップイヤー研究会 (GAP YEAR SEMINAR)  
「ギャップイヤーとボランティア・社会体験との連携」  
議事録  
飯塚和明

文部科学省平成 20 年度先導的大学改革推進事業

「英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する社会経験を可能とする取組に関する研究」セミナープログラム

日時：平成 21 年 3 月 9 日 午後 1:00~5:30

場所：広島大学高等教育研究開発センター 112 授業研究開発室

主催：広島大学高等教育研究開発センター ギャップイヤー研究会

## 1.第 1 部 ギャップイヤーとは

1-1.ギャップイヤーに関する講演 秦由美子（広島大学高等教育研究開発センター准教授）

ギャップイヤーについて、日本においては、教育再生会議第 2 次報告において、9 月入学が導入されたことについて述べた後、英国におけるギャップイヤーについてアンドリュージョーンズについての定義「16 から 25 までの若者が 3 ヶ月から 24 ヶ月にかけて正規の教育・訓練・職場から・・・」について、ギャップイヤーについての概念の説明を行った。

日本の企業においてソニーのフレックス・キャリア採用の形式についても取り挙げた。

一方、ギャップイヤーのデメリットについて、個人においては、多額の費用をかけたにも関わらず、得たものがほんとうにみにについているのか。大学においては、数学では正規の学習課程の益にならない中断と考えられている。企業においては大卒者レベルの雇用可能性についてと三つの側面から言及。また、京都 NPO センターと立命館大学の協同した取り組みとして「ラジオカフェ」NPO 銀行などについての事例を紹介。

最後に、日本において導入されている大学（倉敷芸術科学大学・名古屋商科大学等）を紹介し、整備されたプログラムそして大学側のサポートが必要であるとし、軌道に乗るまでは政府支援の必要性についても触れた。企業側の評価は後付けでもよいのではないかとして日本導入への可能性を提示した。

1-2.講演 2 小山悦治教授（倉敷芸術科学大学）

国内初、国際教養学部で導入した倉敷芸術科学大学のギャップイヤー制度（GAP）を紹介。大学入学後の半年間（1 年時・後期）を通じて、自分の意思により、留学・仕事体験・ボランティア・自己発見プログラムの 4 つのプログラムを提供している。「自己発見の旅」を学外の社会体験・異文化体験（アクティブラーニング）を通じて 18 単位が付与される。GAP を経験した学生は通常と同じく 4 年間で卒業可能であると、大学の GAP の概要を述べた。その後、大学における教養教育の重要性と人間形成が重要であるとし、また、英国のグランドツアー等の関連から GAP を導入した背景について触れた。その成果として、「異文化理解」「自信と責任感」「大学で学ぶ意義の再確認・目的意識の明確化を挙げている。

現在一時休止中であるが、今後の検討課題として、活動時期・期間について、大学全体のカリ

キュラムとどのように関連させるのか、GAP の理解を得ること（認知度向上・全学的な支援体制・財政支援）、単位認定、教育効果の評価等を挙げた。

1-3.ギャップイヤー実施大学からの報告 南智史（名古屋商科大学外国語学部 2 年）

尾崎めぐみ（名古屋商科大学）

酒井亮征（名古屋商科大学）

南は「国ごとに異なる意識・思想・文化 それによる行動の違いを発見 ～ワークキャンプを通して～」とするテーマで発表を行った。ベルギーでのワークキャンプ体験を通して、欧州の人々もつ意識と日本人とのそれを比較し、自らの内面の変化が起きたことを指摘。また、学業への影響として、「行動力の促進」ということを挙げた。

尾崎は「VOLUNTEER PROJECTS in Vietnam」として発表を行った。その活動内容はベトナムの孤児に英語を教えた体験談を紹介。異文化体験を通じ、その暮らしや言語の違いに触れ、そこから得られる長所として「思いやり」「自立」「向上心」、短所として、家族との連絡が取れない等「フォローが不十分」「別れに傷つく」ことを挙げた。学業への影響として、「語学（英語）」は必須であり、「歴史（訪問国）」は理解する必要があることを述べ、現地での異文化交流を通じて、意識が変化し、自立・向上心につながったと述べた。

酒井は「留学・海外研修プログラム」とするテーマで講演を行った。名古屋商科大学で行われているギャップイヤープログラムを紹介した。事前研修・海外研修・事後研修・奨学金・単位認定等の概要を説明し、ギャップイヤーは学生の「人間的成長」を促す事ができると述べた。

## 2.第2部 ギャップイヤーとボランティア活動との有機的連携

2-1.ボランティア活動に関する講演 菅井直也教授（広島文教女子大学）

菅井は「ボランティアとは何か」として講演を行った。ボランティアとは「自ら進んで社会的な問題の解決のための行動を志す人」とする定義を提唱した。また、学生のボランティア感について、「強制されるボランティア」という矛盾を指摘した。

ギャップイヤーとの連携については、「単なる社会体験に終わらせないために、適切なコーディネートとインターメディアリが必要」と述べた。

2-2.講演 2 熊谷紀良主任（東京ボランティアセンター）

熊谷は、ギャップイヤーを考える場合、社会・地域との係わりが必要になってくる。国内においても様々なフィールドがあり、そのコーディネートの役割を担っていることを述べた。特に、ボランティア活動は「制度」ではなく「ニーズ」指向である。制度があるからではなく、必要性に応じて行動することを指摘した。

熊谷は、ボランティアとボランティア体験を区別し、ボランティア体験とは機会を提供する場であり、ボランティアとは別の意味をもちながら推進してきた。市民教育・学習(Citizenship Education)として、提供してきたことを述べた。

ボランティア活動を「豊かな学び」の機会とするために、コーディネーターの存在は不可欠であり、大学の「知」と結び社会的に評価される必要性があることを指摘した。

## 2-3. ボランティア活動実施大学からの報告

### 2-3-1. 明治学院大学 (心理学部3年 山田純平・心理学部2年 須賀ゆきの)

山田は「学生の可能性を創る」として発表を行った。ボランティアセンター学生スタッフとして活動していることを紹介。学生スタッフは、一般学生をエンパワーメントする役割を担う。学生自身が「白金志田町倶楽部」等、地域(ローカル)の問題から、世界(グローバル)の問題まで幅広いプロジェクトを推進している。その学業への影響として、現場で経験したフィードバックができる。デメリットとして、活動を拓けてもそのアウトプットができないことを挙げる。また、自身の意識が「楽観的」になり、今後は人と人をつなぎ、自分で何かしらの分野のフィールドを提供したいと前向きな意見を述べた。

須賀は「私のボランティア体験～ボランティア学生スタッフとしての活動から～」として発表を行った。大学1年の春「自分のためにもひとのためにもなることがしたい」とのきっかけから、活動を行なうようになった理由を述べ、「白金志田町倶楽部」等の活動へのかかわりについて述べた。最後に、ボランティアとは「自分の成長」「新しい自分の発見・チャレンジ」「意識の変化」を挙げた。今後の展望として、楽しみながら多くのことを学び成長したいとする希望を述べた。

### 2-3-2. 広島経済大学 興動館

興動館の「興動館教育プログラム」について紹介。国際交流・社会活動を学生主体で行い社会貢献・国際貢献を可能にする人材を養成するものである。プロジェクトは事前評価・中間評価・事後評価として教育評価を行っている。「子供たちを守ろうプロジェクト」を行なっている。学生の意見として西川は、「学校以外の地域で出会ったとき挨拶を交わすことが可能になり、地域での防犯対策を行なう」ことにより、犯罪の減少に貢献したいとしている。また、プロジェクトに参加した渡辺は「人間的に成長できた」と意見を述べた。垣内は「コミュニケーションスキルの重要性を認識し、「チームで働く力」が向上した」と述べた。

### 2-3-3. 関西大学ボランティアセンター (藤原はるか・梅田麻菜)

藤原は関西大学のボランティアセンターの業務内容を紹介。また、講座(手話講習会・ノートテイク・点字講習会・ファシリテーショントレーニング講座)等の紹介。キャンペーン活動として、エイズ・たばこマナー・国際協力・eco キャンペーン等を行なっている。

地域連携事業として、関西大学と明日香村と連携し、花桃植樹を行った。また、淀川掃除・図書館の本の落書き消し等の活動も行い地域社会への貢献を積極的に行っている。

今後の課題として、1) ボランティアコーディネートに向けた多様な活動への参加 2) 広報誌「Volury」の自主的作成 3) 他団体との連携として三つの点を指摘した。

### 2-3-4. 関西学院大学 ヒューマンサービスセンター

学童保育ひまわり部門代表 白石久美子

ボランティアコーディネート部門代表 有山美紀

関西学院大学ヒューマンサービスセンター(HSC)の設立についての経緯についてに触れ、その組織体系の紹介を行った。そのミッションとしてマスター・フォア・サービスの精神に基づいた「ボランティア活動の活性化」「地域貢献」を主としている。

学童保育ひまわり部門では、子供たちとの交流を中心とした活動を行い、地域の子供を対象としたイベント等を通じて、交流を深めている。

ボランティアを通じた意識の変化として「「してあげるもの」ではなく「自分も成長できるもの」と感じるようになった」等の意見を挙げている。

活動の長所として、特別なスキルが不要・参加自由等。短所として、やめて行く人も多いことを挙げる。学業への影響として、空きコマや放課後を利用して活動しているので「特に影響はない」としている。

### 2-3-5.立命館大学ボランティアセンター（立命館大学応用人間科学研究科 上原誠子）

上原は大学進学を選択した理由とボランティア活動を行う背景を述べた後、ボランティア活動経験としてNPO法人テラルネッサンスの活動を取り挙げた。

ボランティア活動の動機として、1) ボランティア活動の方向性を模索していた 2) 経験と関心をつないだ職業を探していた 2) 理想と現実のギャップを埋めたかった、と三点の理由を述べた。そして、現在も継続しているテラルネッサンスのインターン業務内容・活動期間・活動日数・活動内容を紹介。そのボランティア活動を経験して、1)外的環境の変化 2)内的環境の変化として二点の変化があったことを述べた。

最後に、ボランティア活動は「長い人生の一コマ」であるとして、学生時代に経験できることは重要である。また、様々な人との出会いにより、立ち止まって自分自身を考える機会であると述べた。

### 2-3-6.龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター

センターの運営体制について紹介。センターにおけるボランティアコーディネーターの役割として、ボランティアに関する相談・情報提供・ボランティアの要請。学生スタッフへの支援・広報などを行なう役割を担う。

学生スタッフの藤澤は、活動を通じて自分自身の変化として、1)視野が広がった 2)人との接し方が変わった 3)モチベーションがあがた、と三点を挙げた。学生スタッフの長所と短所として、長所は「興味あることに積極的に参加」短所として「ニーズに鈍感な場合がある」ことを指摘した。最後に、学業との兼ね合いについて、1)優先順位を考える 2)興味あることを深く学べる 3)頑張っているスタッフを見て良い刺激になるとしている。

また、他の学生は、地域の行事に参加する、龍谷大学周辺のゴミ拾いなどの活動に参加。今まで知らない世界を知ることができた。自分が現場に出ることによっていろいろな人に出会い、当事者の視点が重要であることを述べた。

活動の長所として、同じ目的意識を持った仲間が集まり、ボランティアに対する考えを学ぶことができた。将来の視野が広がった。短所として、スケジュールと交通が不便なところは行くことが大変であることを挙げた。教職課程など履修している学生は履修科目が多いためボランティアに参加できない要因があると指摘。

### 2-3-7.広島大学 安芸の子 KAPPA 組

43名のメンバーとともに子供たちのために体験の場を提供する活動を行っている。その活動目標として「子供の生きる力」の育成である。その取り組みは主に1)自然から子供たちに学んでもらう。2)自分たちの住んでいる地域の文化を学ぶ3)平和のための人間交流、の三点である。

例として、「わくわく」は幼稚園から小学3年生まで等のグループを子供たちの発達段階に応じたプログラムや企画を立案し、活動を行なう。また、「こぐま」3班の活動体験を通じて、「身近に子供たちの成長を見守ることができた」と述べた。12期K班の子供たちとの交流を通じて、「思いやりの心」をもった子供たちがたくさんのかんじ取ってしてくれたことで、一緒に成長できたと述べた。

その他の活動として、ボランティアセミナー企画・運営、野外活動の生活支援、北広島教育委員会主催2泊3日のトムソーヤキャンプの開催など様々な活動を行っている。

### 3.総括

大佐古は、「本研究会では、各大学からの講演、発表を通じて、ローカル・グローバルと大きく二つに概括することができるのではないか。両者の違いは日本人が日本にいてボランティアをするか、一方、日本を超えた海外での活動と、どのような違いがあるのか。また、両方経験したことがあるか。むしろ、そういうことをしたことがない、また興味がないとした背中を向けた人たちをどう振り向かせる仕掛けを作るのかということ、可能にするのは、ボランティア活動や様々な経験を積んだ人たちがすべきものがあるのではないか」と意見を述べた。

●●はギャップイヤーにボランティアを組み込むと可能性を、日本版ギャップイヤーに求め、その導入への示唆として、高校から大学入学までの一定期間「外に出る」ためのボランティア・インターンシップなどから始めることとした。

●●はリフレクション「振り返り」が重要であるとして、意見を述べた。

## 日本版ギャップ・イヤー (GY) あるいはギャップ・タイム (GT) 導入の可能性について

秦 由美子

### 1. ギャップ・イヤーとは

もともとは、ヨーロッパの職人が遍歴による教養を身につけていたのに対し、家庭教師から教育を受けた貴族層が、支配者としての（国際）教養を補うため、外国遍歴（グランド・ツアー：grand tour）を行うことになったことが起源といわれている。

### 2. ギャップ・イヤー取得者数

1) イギリス：政府は年間約 60,000 人以上の若者が Gap Year を取っていると見積もっている。総数が約 35 万人なので、約 17%の人が取っていることになる(DfES 2004)。

2) 日本：①名古屋商科大学 — 毎年新入生約 1000 名のうち 20 名から 30 名で、男女比は半々。

②秋田国際教養大学 — 2008 年 9 月入試から開始したばかり。

③立命館大学（予定） — 優れた市民を育成することを目標とする。

### 3. ギャップ・イヤー導入のメリット及び評価について（イギリス）

#### 1) 個人について

多岐にわたる面で能力が高まったという回答が多くみられている。(Inkson and Myers 2003; DfES 2004)

- 対人関係、自信、自尊心、異文化折衝力・世界的展望、自立性、自主性、技術力(IT ほか)、寛容、集中力、実行力、自己発展、自己規律、問題解決能力、金銭管理能力の伸長 ⇒ アイデンティティーの確立
- これはとりもなおさず、「社会人基礎力の能力要素」に相当

#### 2) 大学について

- Gap Year 生の大学での成績が良くなっている。
- 入試の際にも、各学生が自らの人生計画に沿った Gap Year 計画を立て、体験した Gap Year が自己実現のために活かされていることを示すことができれば、高く評価される。
- 「UCL の学部生の 10%が、大学入学前にギャップ・イヤーを取っている。UCL の全学部が、学生が構造化された計画を立て、何を成し遂げたいかを見据えている場合には、GY をとることを奨励している。GY には学生の視野を広げ、成熟度を高めるなど、学生にとって様々なメリットがある」(UCL 学部生用学校案内、2002 年度)

#### 3) 企業について

- 「大卒者の新入社員採用では、単なる学問的知識以上のものをもたらしてくれる人材を求めている。概して、輝いてみえる学生には、他との差を明らかにする職業経験・人生経験があるものです。GY の経験から、彼らは何かを得て、我々が求めている重要な能力を見せてくれるのです」(Vodafone UK)

### 4. ギャップ・イヤーの資金について（イギリス）

- 個人で調達する。
- GY の時期に、まず、アルバイトをして資金を貯める。



- ボランティア活動に対しては、政府からの補助が一定期間与えられる。

## 5. ギャップ・イヤー導入に際しての問題点

- 1) 大学入学前に GY を選択するためには、各生徒に将来に対する目的や意識が求められるが、中等教育の間に様々な情報を得て、目的意識をもってその選択を特に入学前に選択できるような生徒は多くないことが懸念される。
- 2) 大学卒業後の企業の GY に対する理解と通年採用企業が少ない点が問題となる。4年間で卒業しない学生を企業や社会がどのように評価するかが、学生にとっては大きな関心事になる。
- 3) ギャップ・イヤーの資金をどのように捻出するかが問題となる。
- 4) GY 支援団体（英国： Gapadvice、CSV 等）の育成の重要性
- 5) ギャップ・イヤー・プログラム担当職員の確保
- 6) 可能性のあるプログラムを策定できるか

## 6. 問題点の解決方法

- 1) 秋季入学を選択肢として入れ、将来に対する意識が曖昧な中高生の場合、入学前に GT を取ることでキャリア教育を充実する期間とする（各生徒に将来を考える建設的な思考を促す余裕を与えることが期待できる）。入学決定後約 3-6 ヶ月を GT として費やす場合と、1年間の GY を選択する場合の 2 種類を試行。学生が自主的に選択。
- 2) ・大学側でできることとして、GY 参加は、あくまで当事者の自主的な選択に任されるべきではあるが、インセンティブの意味合い、あるいは活動に対して何らかの社会的評価を付与する意味でも、一定の水準担保を条件にこうした活動を単位化することは、認められる余地があると思われる。
  - ・GT を通して獲得した能力を成績として評価する制度を作ることで、学生が、4年間で卒業しなくても、外的な評価に繋がる。
  - ・このことは、GY、GT への社会や企業の認知や評価に繋がる（後付け）。
  - ・ギャップ・タイム制のプログラムを利用した学生が、そこで得られた学びを持続させながら、その後の正課（そして課外も）プログラムを受ける中でどれだけ成長を飛躍させることができるのかが重要となる。
- 3) ・入学金を支援する大学が出てきているように、大学側が入学金相当の援助を、GY、GT を取る学生に支援する。
  - ・GY、GT への社会的評価が上がれば、企業からの支援も得ることも可能となるはずである（広告）。
- 4) 既存の団体を活用する — ボランティア団体、NPO 団体、国際関係諸団体、留学生センター、国際交流センターの活用。ここで重要なことは、コーディネーターとの連携システムがしっかりしていることであり、また、送り手側と受け入れ側の体制をきちんと構築することである。
- 5) 留学生センター、国際交流センターの利用。また、自身の GY 職員の育成。
- 6) ・企業との連携での職業経験プログラム（インターンシップとは異なる）
  - ・ボランティア・プログラム（ボランティア・コーディネーター及びボランティア団体と連携）
  - ・自己発見・プログラム（自ら企画するが、大学側が送りだすまでの準備と、戻ってからのケアを実施）

## 7. ギャップ・イヤー取得時期について

1	中学校卒業後の16歳（進学先は決定済）
2	高等学校卒業後の18歳（進路未定）
3	<b>高等学校卒業後の18歳（進学先は決定済）で大学入学前段階</b>
4	大学・学士課程在学中の休暇を利用して
5	<b>大学・学士課程在学中に課程と結びついた形で</b>
6	大学（学部）卒業直後
7	大学院課程中の休暇を利用して
8	大学院課程中に課程と結びついた形で
9	企業等における雇用期間前（ソニー、キリンビール）
10	企業等における雇用期間中
11	上記の分類以外の複合した期間

1. ソニーでは、2006年度採用者から「フレックス・キャリアスタート制度」を導入。この制度は、一般的な4月1日入社を選ぶか、それ以降2年間の間のいずれかの時点を入社日とするかをエントリーの時点で決めることができる制度。ソニーは、この制度の趣旨を「自己のアイデンティティを確立して入社してもらいたい」と説明し、「アイデンティティの確立」を「自分が自分以外のものに依存しないで、自分の足で自ら確立した基盤の上に立ち、完全に自主独立してセルフマネジメントをする」と定義し、これは青春時代においてこそ築いておくべきものであり、採用活動で多くの若者と会ううちにこれがきわめて重要なものとなる、としている。「不完全燃焼のまま中途半端に入社するより、きっちりと自分で納得できるチャレンジをし終えてから入社してもらった方が、後々の本人の活躍のポテンシャルをはるかに高めることになる」と述べている。
2. キリンビールおよびキリンホールディングスが、社員が最長3年間休職できる制度を導入。社員が最長3年間休職できる制度を導入したとのことである。そして、この休職を適用できる3つの目的のなかに、「留学などの自己啓発」「ボランティア活動」が含まれている。

## ギャップ・イヤー (Gap Year)、ギャップ・タイム (Gap Time) のまとめ

秦 由美子

### 1. ギャップ・イヤーの定義について

- 主に先進国の若者に見られる。(Inkson and Myers 2003)
- 3ヶ月から24ヶ月にかけて正規の教育・訓練・職場から離れて時間を費やすこと。(Jones 2004)
  - ・ 狭義のギャップ・イヤーは、中等教育終了後大学入学までに取得する一年間と定義し、内容は海外ボランティア活動、職業経験、資金稼ぎ(アルバイト)と様々である(ジェンキンズ)。
  - ・ 広義のギャップ・イヤーは、次項2. に示す。
  - ・ 各個人にとって有益な最短の期間は3か月 (Jones 2004)
  - ・ 取得した本人がその時間をどのように使い、どのように捉えたかでギャップ・イヤーと看做す。
  - ・ もともとは、ヨーロッパの職人層が遍歴による教養を身につけていたのに対し、家庭教師から教育を受けた貴族層が、支配者としての(国際)教養を補うため、外国遍歴(グランド・ツアー: grand tour)を行うことになったことが起源と言われている。

### 2. ギャップ・イヤー取得時期について

	中学校卒業後の16歳(進学先は決定済)
	高等学校卒業後の18歳(進路未定)
	高等学校卒業後の18歳(進学先は決定済)
	大学・学士課程在学中の休暇を利用して
	大学・学士課程在学中に課程と結びついた形で
	大学(学部)卒業直後
	大学院課程中の休暇を利用して
	大学院課程中に課程と結びついた形で
	企業等における雇用期間中
	職業訓練・研修活動終了直後
	上記の分類以外の複合した期間

出典: Jones, A. *Review of Gap Year Provision*. London: DfES, 2004: 26. 及び小山悦治教授(倉敷芸術科学大学)の資料を基に作成。

### 3. ギャップ・イヤー取得者数

#### 1) イギリス

- 高校から大学進学までのGap Year取得について、大学進学については大学・カレッジ入学サービス(Universities and Colleges Admissions Service: UCAS)を通して申請するため、UCASが把握しているのは一度進学を希望した学生がGap Year

を取得するケースのみである。UCAS に申請する前に Gap Year を取得した学生数については把握できていない。(Prospects 2005)

- UCAS によると 2002 年は 29,139 人(7.9%)の UCAS 登録生が Gap Year を取得。
- 政府はこの数字や大学の調査結果や関連団体の数字を受けて年間約 60,000 人の若者が Gap Year を取っていると見積もっている。総数が約 35 万人なので、約 17% の人が取っていることになる(DfES 2004)
- UCAS によると 2006/07 年度の Gap Year 取得者数は 28,524 人にのぼる。(UCAS 2007)
- World Wide Volunteering によれば、毎年約 35 万人のボランティア活動を斡旋している。

## 2) 日本

### ①名古屋商科大学

- 毎年新入生約 1000 名のうち 20 名から 30 名
- 男女比はちょうど半々
- 学科別の比率は、外国語学部が多く、全体の 7 割を占める。

### ②秋田国際教養大学

- 3 月の一般選抜(9 月入学)における合格者に対して、翌 4 月からの即入学を求めず、半年遅れて 9 月に入学することを認め、その間当該合格者を入学予定者として、取扱い、その者が出願時に自己申告した行動計画等に基づいて何等かの研修活動を行わせることを「ギャップ・イヤー制度」と称している。
- 国際教養大学では 2008 年 9 月入試からギャップ・イヤー制度を導入した。プロモートする部署は広報及びキャリア開発室となっている。しかし、初年度のため広報・宣伝が行き渡らず受験者は学部入学者(5 名)(男 2 名:女 3 名)であった。大学院入試の希望者はなかった。

## 4. ギャップ・イヤー導入の目的について

### 1) Gap Year 取得者の目的

#### ① 前向き志向 (Positive Reason)

- 就職成功のため(自分の経歴を高めたい)
- 社会に貢献するため
- 人を助けたい
- 課題に挑戦したい
- 新事習得のため
- 世界を見るため
- 人生に対する視野を広げるため
- 様々な人や文化、場所に触れたい
- ライフスキルを身につけるため
- 資金調達のため

- 夢実現のため  
ニュージーランドでは渡英経験は憧れになっている。
  - 話題性があるため
- ② 後向き志向 (Negative Reason)
- 現実逃避のため
  - 時間の余裕があったため
  - 勧められたから
- (Inkson and Myers 2003; Jones 2004)

## 2) ギャップ・イヤーを導入した企業の目的

### ③ 社内教育の一環として導入した企業の場合

Procter & Gamble (P&G)では、新卒採用した学生に Gap Year と称し本配属前の1年間に開発途上国で国際協力を課している。主な目的は以下のとおり。(Pollitt 2006)

- 学生の視野を拡大させ、人材を厚くする。
- 困難な状況に対応する柔軟性や打破する忍耐力を養う
- 商品開発や営業活動における対外折衝など、職場で直面する問題をクリアしていく力を養う
- 国籍を超えた(製品)消費者を目にすることによって、企業忠誠心を養う → 離職に歯止め

### ④ Gap Year 生を(一時)社員として採用した企業の場合

学生はポテンシャルが高い。新しい視点で経営改善などのアイデアを提供してもらう (Wraige 2004)

## 5. ギャップ・イヤー導入のメリットについて

### 1) 個人について

多岐にわたる面で能力が高まったという回答が多くみられている。(Inkson and Myers 2003; DfES 2004)

- 対人関係 Interpersonal/ relationships/ communication skills
- 自信、自尊心 Self-confidence, self-esteem
- 異文化折衝力・世界的展望 Cross-cultural skills/ global perspective
- 自立性、自主性 Independence/ autonomy
- 技術(ITほか) Technical skills
- 新価値・心構え・個性 New values, attitudes, personality characteristics
- 寛容 Open-mindedness/ tolerance/ breath of perspective
- 集中、将来の方向性 Focus/ direction
- 自己発展、自己規律 Self-development, Self-discipline
- 問題解決 Problem-solving
- 収支管理 Managing money

## 2) 大学について

- ・ Gap Year 生の大学での成績が良くなっている。特に高校で低い成績にいた男子学生が目立ってよい成績を取得している、とオーストラリアの Gap Year 生について Birch and Miller (2007) は発表している。
- ・ 名古屋商科大学及び光陵女子短期大学： プログラムを修了した学生が口を揃えて「もう一度プログラムに参加したい」と言うことから、学生の満足度は高いことが分かる。

## 3) 企業について

- ・ 近年、多くの企業の人事・採用担当者は、Gap Year 生について理解を示している。Gap Year ではたいていの学生が Soft Skills を身につけていて、採用では利点となっている。(Prospects 2005)
- ・ 各学生がいかに自らの人生計画に沿った Gap Year 計画を立て、体験した Gap Year が自己実現のために活かされているかを示すことができれば、高く評価される。
- ・ UCAS のホームページから引用すると、「多くの雇用主や大学は、ギャップ・イヤーを利用して貴重な経験を得た志願者を好意的に評価するであろう」ということである。
- ・ 「大卒者の新入社員採用では、単なる学問的知識以上のものをもたらしてくれる人材を求めている。概して、輝いてみえる学生には、他との差を明らかにする職業経験・人生経験があるものです。GY の経験から、彼らは何かを得て、我々が求めている重要な能力を見せてくれるのです」(Vodafone UK)
- ・ 「GY を賢明に利用して、新しいスキルを身につけ、自分の能力を広げ、実社会に対する見識を得た大卒者は、就職活動時には雇用者側に大きなインパクトを与えます」(Barclays)
- ・ 自立性と決断力、対人能力の発達、問題解決能力、自制心、リーダーシップ、コミュニケーション能力、金銭管理能力等が伸びる

## 6. ギャップ・イヤー導入のデメリットについて

### 1) 個人について

- ・ 多額の費用をかけ 1 年かけて得たものが本当に身についているか不明。(時間と金の無駄遣い)
- ・ 病気、けがなどの問題(BBC 2007)。
- ・ 同じ Gap Year でも旅行やカリキュラムによっては大学や企業の評価が低い。
- ・ カリキュラムで上司と寝食を共にしたため、心身疲労が絶えないケースがある。
- ・ 企業で働いたことについて認証などのシステムが確立されていない。(Prospects 2005)
- ・ 十分な資金を持たずに GY を取ると、学業、訓練、仕事に戻った際にかかなりの借金を抱えることもあり得る。

## 2) 大学について

- 数学担当教員は、数学は論理的な学問であり、数学はそれほど人気の高い学部ではないため、15ヶ月のギャップ・イヤーで、生徒が数学の勉強後の生活について考え始め、他の学問に興味に移るのを恐れている。
- 理学部、工学部も同様の意見のようである。
- 数学では、正規の学習過程の益にならない中断と考えて、志願者にGYを取らないよう勧めている (Studylink 2003)。
- 物理学や工学に関連したギャップ・イヤーを過ごすことができれば、勉学にもより本腰が入ると考えている。

## 3) 企業について

- GYは大卒者レベルの雇用可能性は向上させるが、高等教育を受けていない若者の雇用可能性向上は疑わしいと考えられている。
- 旅行やレジャーを中心とした活動を続けているGap Year生は、現地との接点が少なく、また経験も限られているため、企業側からは利点と判断されていない。(DfES 2004)

## 7. 大学はギャップ・イヤーをどのように評価するか

### 1) イギリスの大学

- 成熟度が大きく増し、様々なスキルを身につけるため、効果的に学位やその他の正規の資格に取り組むことができるという見方が一般的。
- 入試の際にも、各学生がいかに自らの人生計画に沿ったGap Year計画を立て、体験したGap Yearが自己実現のために活かされているかを示すことができれば、高く評価される。
- 「UCLの学部生の10%が、大学入学前にギャップ・イヤーを取っている。UCLの全学部が、学生が構造化された計画を立て、何を成し遂げたいかを見据えている場合には、GYをとることを奨励している。GYには学生の視野を広げ、成熟度を高めるなど、学生にとって様々なメリットがある」(UCL学部生用学校案内、2002年度)
- 「GYは今や大学や雇用者から広く容認されており、間違いなく大いに役立つものだ。雇用者と大学は(参加者の)進取の気性と成熟度を一段と重視するようになっており、正規の教育の内外で参加が支援されている」(シェフィールド・ハラム大学進路指導ウェブサイトより抜粋、2003年)
- 学業において自制心が高まる
- GYでの人生経験により視点と知識が広がる
- 教育目的を達成しようというモチベーションが高まる (Jones 2004)

### 2) 日本の大学

導入している大学は数少ない。

### ①名古屋商科大学

- 学生の国際化を図るために導入(名古屋商科大学, 2007)
- 入学後の学部学科志望変更は、可能。例えば、ある学生は外国語学部所属だったが、現在は総合経営学部に変更した。Gap Year プログラム修了後、語学を通じてビジネスの道を歩みたいということが学部変更の理由である(名古屋商科大学, 2007)。
- 日本では高等学校卒業後、自らの進路に確信がないまま就職や進学をしている生徒が多い。その為、このように大学入学後 Gap Year の期間中の体験を通して自己の進路を見つけることが十分に可能である。
- 一見、回り道をしたように見えるが、結果としては生徒や学生にとって有益な道程となっている。

### ②光陵女子短期大学

- 社会性を育てるために、” すぐに大学のカリキュラムを始めるのは難しい現状があるから” 導入。

### ③秋田国際教養大学

- 「ギャップ・イヤー制度」の目的は入学前に社会的な見聞を広げる、自己発見、社会人としての基礎能力発達の機会を持つ等、大学の中では得ることのできない貴重な社会体験を事前に行わせることで、入学後の本人の学習意欲や職業選択能力を高めるものである。

## 8. ギャップ・イヤーの資金について

### 1) 個人調達について

- ① 家族(両親もしくは兄弟姉妹、配偶者)
- ② 貯金
- ③ 銀行ローン

HSBC 銀行には Gap Year Service というプログラムがある。ローンの返済利率は一般の利率と大差なく学生用プログラムより高いが、世界中で引き落とし可能などのオプションがつく。(HSBC 2008)

- ④ スポンサーからの支援
- ⑤ 労働(アルバイト、短期仕事)

業績がよいと良いポジションに斡旋してくれるが、多種を経験するために昇進せずに転職するケースもあった。(Inkson and Myers 2003)

- ⑥ 自給自足生活

### 2) 大学の資金援助

- ⑦ イギリスの大学

授業料を GY 取得年月納入する必要がない点において、学生の資金援助を行っている。

- ⑧ 日本の大学



- 名古屋商科大学 (2007)  
ヨーロッパまでの往復渡航費、鉄道パス (ユーレイルセレクトパス) 代金、  
海外旅行傷害保険 (基本プラン) 代金  
貸与奨学金: 希望者に無利子で 30 万円貸与
- 光陵女子短期大学 (2007)  
航空運賃 (往復)、ユーレイルパス代 (急行・特急フリーパス、5ヶ国程度事前選択)、基本的な海外旅行保険代、現地ツアーウィーク期間中のバス費用

[奨学金として支給分]

往復航空運賃	218,000
海外旅行傷害保険料	24,000
海外研修直前オリエンテーション期間宿泊費等	28,000
ユーレイルセレクトパス代金	72,000
帰国前夜宿泊費	19,000

### 3) Gap Year を(社内教育の一環として)導入した企業の資金援助

- ⑨ 往復航空券、保険、医療費、現地基準に換算した給与が P&G の Gap Year プログラムでは支給される。(Pollitt 2006)
- ⑩ 企業や私営のギャップ・イヤー団体が、GY を企画し、GY を通して仕事をする学生のために全額あるいは、一部補助しており、GY の最後の期間には旅行も可能となる。このような GY は履歴書にも有利であるとのこと。学生は、雇用者にいい印象を与えることができれば、大学を通じてそれら企業や GY 団体にスポンサーになってもらうことが可能となる。
- ⑪ Accenture や Shell 等の企業は、応募してきた新入社員候補に対して、GY 活動の資金として奨学金を提供している。

#### <事例>

最も優れた企画は、次の 3 つである。

#### 1) IBM 大学前雇用企画 (IBM Pre-University Employment Scheme)

最初の 3 週間は集中訓練コースを実施し、9 ヶ月から 12 ヶ月の期間で給与を与えられる仕事をする。そこで、新たな技能も習得できる。この企画に申し込む場合には、算数の能力と A レベル試験で A を 2 個と B を 1 個以上取得しておくことが必要である (これは、かなり優秀な学生を意味する)。9 月から始めようと考えている場合には、中等教育の最後の年の 3 月に応募する必要がある。

#### 2) 軍務ギャップ・イヤー委託業務 (The Army Gap Year Commission)

仕官訓練、海外旅行、海外観光がこの GY の最後には経験できるが、軍に入ることが義務付けられているわけではない。この GY に応募資格は、上から A から C の間で GCSE を 5 つ合格すること

と、A レベル試験に合格することである。また、GCSE では数学と英語及び科学か英語以外の言語を含まなければならない。大学入学を延期して、このGYに参加することも可能である。中等教育の最終年度に応募することが必要である。

### 3) 企業でのインターンシップ (The Year in Industry)

このGYでは、有給で9月から翌年7月までがインターンシップ期間である。20日から25日間訓練を受け、入学する大学の援助を受けることになっている。大半が、工学系、科学あるいはIT産業関係の企業であり、応募するにはその分野の資格が必要となる。

このインターンシップで、ギャップ・イヤーとして一年間企業 (Alpheus Environmental Ltd.) で働いたリーズ大学・電気通信工学 (Electronics and Communications Engineering) の学生のミラ・ソンディ (Mirra Sondhi) が、国際的及び国内の賞の2つを獲得した。一つは、ロイヤル・アカデミーの賞である Year in Industry Undergraduate Business Award で、もう一つは、Sir Henry Royce Award for Excellence in Profession and Industry で、工学技術研究所の賞である。

彼女は、「大学で学ぶ理論と現実の企業での仕事の違いを学ぶ機会となるこのような機会をもっと学生に推奨したいこと、そして、このインターンシップが卒業後の就職にも繋がっていくと述べた (I would like to take this opportunity to encourage more students to take placements as they bridge the gap between theories learnt at the university and the real industry environment. It would give you the necessary edge needed in the graduate job market.)」が、この言葉の中に、インターンシップの重要性の全てが表現されているとあって良い。

Year in Industry の東部イングランド担当理事であるアラン・ギボン (Alan Gibbons) は、「企業の参加なくしてこれら優秀な学生の素質は開花しない (Without company participation these students do not get the opportunity to demonstrate just how good they are. ) と述べている。

### 4) 政府からの資金援助

①2008年2月29日の報告によれば、今後3年間に亘り、政府は2500名の若者を対象とするボランティア活動に対して、1000万ポンド (約25億円) を支援することが決定された。この企画は南バーミンガム・カレッジの協力で、国際開発省 (Department for International Development: DFID) が中心となり実施するもので、18歳から25歳までの生活や職業あるいは学業等で恵まれない若者が発展途上国でのボランティア体験を支援する計画である。

②高等教育アクティブ・コミュニティ補助金 (HEACF)

高等教育アクティブ・コミュニティ補助金 (HEACF) は、イングランド高等教育財政審議会 (Higher Education Funding Council for England: HEFCE) 及び政府の先導的地域活性化活動 (Active Community initiative) から補助金を得ている (HEFCE (2004) *Student volunteering: case studies of good practice from HEACF - Projects funded by the Higher Education Active Community Fund; case studies compiled by the Careers*

Research and Advisory Centre, 2)。

- ③HEACF は、HE のボランティア活動の実践家やマネージャーにその活動のための財源を提供する目的を有する。HEACF は、地元での地域活動に高等教育機関が主要な役割を果たすことを期待して支援し、補助金を配分する機関で、2002年3月に活動を開始し、2006年の8月にはその活動が終了することになっている。高等教育機関が地元根付いたボランティア活動を実施していくための基礎作りのための期限付き支援と考えられる。

## 9. ギャップ・イヤー・カリキュラムについて

### 1) イギリスの大学

#### ①個人で内容を提案するカリキュラム

自分を律することが必要。(Self-initiated, Self-directed, Need “time out”)  
(Inkson and Myers 2003)

#### ②大学が提案するカリキュラム

##### ① イギリスの大学：ケンブリッジ大学・工学部

##### A) 大学の構成および学科構成

Accademic Staff established 1,790名, unestablished 1,567名

学生数：学部：11,115名 大学院：4,470名

学部, 学科の区分：21学部, 50学科以上

総予算：842.5M pond/year

##### B) 工学教育(学部)の目標と目的

- ・工学教育(学部)の目標(aims)：
- ・世界をリードする大学とする。
- ・広い分野にまたがるアカデミック・エクセレントを形成する。

##### C) 工学教育(学部)の目的(Objectives)：

- ・英国および海外から優秀な学生に対して魅力あるものとする。
- ・学部, 大学院教育において高品質な教育を提供し, 産業, 職業, パブリックサービス, 学術の分野で必要とされる人材の育成。
- ・コミュニティーのニーズおよび生涯教育の要望に対応する。
- ・高等教育に影響を与える政策において国内, 国際的に積極的に参加する。

##### D) 入学試験

- ・大学が入学試験を行なうのではなく, College が行なう。
- ・試験は GCSE 試験(16才)で合格した物の中から A Level Test(18才)の評価 college が受け入れ定員を考慮し, インタビューにより学生選抜を行なう。

##### E) 学部カリキュラム

- ・学部1年生は全工学部共通科目の授業が80-90%実験・演習に相当するコースワー ク

が 10-20%である。

- ・ 共通科目は、力学、線形システムと振動、熱力学、構造力学、材料、電気回路と素子、デジタル回路と情報処理、電磁気学、数学である。

- ・ 工学部全学生は 2 年次に以下の必修科目を履修する。

- ・ 力学、構造学、材料、流体力学、熱伝達、電気工学、情報工学、数学

- ・ 選択科目として以下の科目から 2 科目を履修する。

- ・ 土木・構造工学、航空工学、化学工学、電気工学、情報工学、機械工学

- ・ 3 年生において専門科目の選択を行なう。

- ・ 主にプロジェクト (Design Project, Computer Project 等) に参加し、1 プロジェクトは 40 時間/週で 5 プロジェクトを履修する。

- ・ プロジェクトは学生 6 名で編成し、競争による創造性の重視、リーダーの育成を目標。

- ・ 4 年生は 65 モジュール (1 モジュールは 16 講義で編成) から 8 モジュールを選択し、さらに専門性を強める。モジュールとしては以下の講義がある。

- ・ Surveying, Advanced Material Processing, Nuclear Power Engineering, Electrical machines, Control system design, Industrial economics

- ・ 4 年生の通年にわたりなされるプロジェクトを Major project と呼び、学生の時間の半分を占有する。

- ・ その他、一般教養科目が自由選択で用意されている。

#### F) 教育システム

- ・ 工学教育は 4 年間で、前半 2 年を基礎一般教育、後半 2 年を専門教育としている。

- ・ 卒業研究に相当する Major Project がある。

- ・ 1 年次の退学率は 1% 以下

#### G) 教育資源

- ・ カベンディッシュ研究所の物理学の学生実験室の実験装置等は基本的装置で古いものが多い。

- ・ 講義室等は木の机と椅子で古風な感じを与える。

- ・ 学生計算機室等は日本の環境と大差はない。

#### H) 評価方法等

- ・ 講義の試験方法

- ・ 講義と試験担当者を分離して行なう。

- ・ カリキュラムの評価方法

- ・ 電気、機械、土木等の学協会の要求を考慮。

- ・ 授業の学生評価

- ・ 教育プログラムの assessment

- ・ 対策を準備中

- ・ 政府による教育と研究の評価システム (Higher Education Funding Council of England)

が始まっており、最近の評価結果によれば、ケンブリッジ大学は研究・教育とも最上位の評価を受けている。

### <事例>

#### ケンブリッジ大学におけるギャップ・イヤー

- ケンブリッジ大学の工学部では最低 8 週間（長い学生は 3 年間の者もある）工学に関する経験するギャップ・イヤーの選択が義務づけられている。

Undergraduate Information							
Year	Total Nos	Sponsored	%	Year Out	%	Seeking	%
						1 <sup>st</sup> job	
2002	241	54	22.0	102	45		
2003	305	42	13.6	113	37	181	59
2004	297	32	10.7	99	33	187	63
2005	287	42	14.6	83	29	199	69
2006	290	34	11.7	79	27	195	66
2007	301	43	14	72	24	213	71
<b>2008</b>	<b>324</b>	<b>43</b>	<b>13</b>	<b>62</b>	<b>19</b>	<b>212</b>	<b>65</b>

Igor WOWK – Industrial Placement Coordinator, Department of Engineering – University of Cambridge, Trumpington Street, Cambridge, U.K., CB2 1PZ

- 大学入学前の期間にギャップ・イヤーとして 8 週間の研修を取ることも可能で、これは、Year in Industry を活用している。2008 年度は 324 名中全体の約 20%である 62 名が取っている。
- 企業側が学生に手当を支給するスポンサー付の学生は 43 名（全体の 13%）
- 工学部には大学院生が 1,100 人、今年は新入生が 324 人です。4 年制の工学修士課程で、最終年、つまり 4 年目が修士課程になります。最初の 3 年間にここで勉強していない人は受け入れません。また、ケンブリッジでは全学生に与えるのは BA(Bachelor of Arts)、文学士の称号で、科学や工学を専攻する学生でも文学士です。
- 最初の 2 年間は、電子工学や電気、機械工学、構造学、ソフトウェア工学のいずれを専攻していても、全学生は同じことを勉強する。

「最初の 2 年間に大学でいろいろやってみます。5、6 分野の異なる工学を勉強してみて、どの分野が自分に最適なのかを見極めてほしいのです」

- 3 学年目になると、専門分野を選択
- GY は 1 回生の夏休み（8 週間から 12 週間）を大学側は強く推奨している。現場は

企業でもよいし、また、大学の施設でもよい。

「1年生をぜひ、とお願いしていますが、企業側は1年生をあまり歓迎しないのが現状です。なぜなら、3年生の方が工学とは何かをより理解しているからです。それでも大学側は1年生を、と主張します。というのも、学生には職業としてのエンジニアの仕事を早い時期から実体験してほしいからです」

### ③政府が提案するカリキュラム

- 教育技能省(DfES : Department for Education and Skills)は、英語教師やスポーツインストラクターになるための職業訓練に該当するようなカリキュラムより、Soft Skills を向上させるプログラムを推奨。
- Soft Skills とは、対人関係(Interpersonal)、リーダーシップ(Leadership)、コミュニケーション(Communication)、時間管理(Time Management)、組織力(Organisation Skills)。これは、労働(Paid Work)やボランティア活動をさしており、上司や同僚など協力関係を必要とするグループ活動をさす。(Prospects, 2005)
- イギリスの Millennium Volunteers 計画の評価では、84%の若者が自信を増したと感じていた。

### ④支援団体が提案するカリキュラム

UCAS では Gap Year プログラムとして個人の目的にあったプログラムを選択するように提案。特に、旅行、ボランティア、学習、労働の4タイプに分けて提案。

### ⑤民間企業が提案するカリキュラム

Year Out Group、Gap-year.com、Gap Year Dictionary などがカリキュラムを提案。Gap Year の市場が広がるほど、Gap Year 経験のメリットがなくなり、Gap Year プログラムの内容も単一化してくるようになると思われる、と Blackburn 氏(2005)は懸念。

## 2) 日本の大学

### ①名古屋商科大学 (2007)

半年間の Gap Year プログラムを展開。Gap Year 参加に「書類・面接選考過程」がある。1ヶ月ほど事前研修(計画書作成・生活指導・英語指導など)後、ヨーロッパでのツアーウィーク(1週間程度のガイド付き旅行)。その後は現地での自主的活動(ボランティア活動・調査・企業見学など)がある。帰国後は報告書を提出し、単位認定のはこびとなる。

### ②光陵女子短期大学 (2007)

半年間の GapYear プログラムを展開。1ヶ月ほど事前研修(計画書の作成、英語、海外生活の仕方など)後、1週間現地でのツアーウィークに参加(海外の雰囲気

に慣れるため)、その後2ヶ月間、ヨーロッパにおいて旅行、見学、調査、企業見学など自分の計画に従って生活。帰国後は報告書を提出し、単位認定の運びとなる。

### ③秋田国際教養大学

入学予定者が研修活動修了後にその内容に基づく単位互換を求める場合は、9月入学後に「ギャップ・イヤー研修活動報告書」を担当教官、指導教官に対して提出し、単位認定の申し出を行い、プレゼンテーションを行わなければならない。

- 1) 付与単位 インターンシップ (3単位) (学部生)  
関連授業科目 (3単位) (大学院生)
- 2) 評価方法 パス/フェイル方式 (学部生)  
A/F グレード (大学院生)
- 3) 評価者 キャリア開発室指導教官 (学部生)  
指導教官及び学長もしくは副学長 (大学院生)

## 9. ギャップ・イヤーとボランティア

- ボランティアや地域社会の仕事に関わっている学生は、試験の成績が良いという研究結果が出ている。Eccles と Barber (1999) は、アメリカの若者 1,000 人を対象とした研究で、ボランティア活動や同様の社会的活動への関与は教育成果・愛校精神・成績の向上につながり、危険行為に関わる割合が低下することを明らかにした。
- ボランティア参加者が得るメリットは、学問的知識を状況に当てはめて応用する力や様々な考えを結び付ける力といったより広範な能力と関連付けている (Brunwin 2002)。
- GY 活動は、その参加者に新たな社会環境で実体験をさせることにより、学業に取り組む能力にプラスの影響を与えると考えられる (Jones 2004)。
- 高等教育アクティブ・コミュニティー補助金 (HEACF) は、イングランド高等教育財政審議会 (Higher Education Funding Council for England: HEFCE) 及び政府の先導的地域活性化活動 (Active Community initiative) から補助金を得ている。

何故ボランティア活動への支援を実施するのかという理由は、ボランティア活動を通じて、「地域と地元高等教育機関との連携を促進し、ボランティア活動を通じて教員と学生が視野を拡大し、新たな見方を得ることが出来る」という点と、「学生が就業に必要な技術を獲得し、各人の人生において生活の質を高めることが可能になる」という理由からである

## 10. ギャップ・イヤーを提供する支援団体

- 参加者と活動を提供する機関の間に立って仲介役を果たす営利団体 (例: Gap Year.com)
- 参加者を提供機関に割り当て、GY 機会の宣伝と取引の手助けを行う非営利的な統括団体 (例: Year Out Group)
- 活動機会を提供する営利団体
- 活動機会を提供する慈善団体 (例: CSV)

- 受け入れ先の地域社会で活動機会を提供する団体

## 大学の役割

クラークのギャップ・イヤーに関する報告書に拠れば、学生が大学入学前にギャップ・イヤーを取る場合、通常、大学側からの承認は不要であることが理解される。しかし、ギャップ・イヤーに入る前に、前もって大学の籍を決めておきたいと考える場合には、大学側に申し入れる必要がある。大学志願者が当該大学の入学資格を満たす場合には、殆どの大学がギャップ・イヤーの申請を認める。

また、志願者がギャップ・イヤー中に将来の専攻と関連する活動を行う場合には、普通、大学側はそれが適切かどうかについてのアドバイスを惜しまず、一般的に、大学側はギャップ・イヤーを経験した入学志願者を歓迎する。大学は、高校から直接大学に進んだ学生と比較し、ギャップ・イヤー経験者は成熟度が高く、自立し、確固たる目的を持っていることが多い、と認めている（クラーク氏の報告書を参照のこと）。

日本においてギャップ・イヤーを取り入れる際に最も重要だとクラークが考えていることは、「雇用者側と大学側がギャップ・イヤーの潜在的なメリット — 大学での勉学上の効果とキャリアの将来性の双方におけるメリットを認めること」としている。また、「政府が雇用者側と大学側に、それを認めるよう働きかけることも重要」だと考えている。

ギャップ・イヤー関連企業を代表する非営利団体「イヤー・アウト・グループ (Year Out Group)」によれば（飯塚氏の報告書を参照のこと）、ギャップ・イヤーの経験は、学生を「大いにリフレッシュし、集中力を高めた生徒を迎えるため学校側の恩恵は大きい」、としている。

<コース変更を希望する学生>

- ギャップ・イヤーをとって帰国した生徒が、コース変更を希望する場合は、大学側もなるべく生徒の意向に沿うように図っている。
- 曖昧なコース変更を申し出る生徒には、大学は、「もう1年間、ゆっくり時間をとって考えてはどうですか。来年は楽しみにお待ちしております」という回答をする場合もある。

<目的意識を持った学生の獲得>

- 大学にとっての大きなメリットは、ギャップ・イヤーによって生徒が高い社会性を身に付けることである。
- ギャップ・イヤー体験を通して成熟し、目的が明確となり、世界観も広がっている。
- コース全体にも、更には、大学全体に良い影響を与えることができる、としている。

## ギャップ・イヤー活動提供企業の役割

支援するための基準を掲げている（ジェンキンズ氏の報告書を参照のこと）。

- 提供するプログラムとサービスの内容を明確かつ正確に説明すること
- 国内だけでなく海外でも安全性について高い支援をすること
- プログラムを評価し、内容向上を図るためにシステムを整えること
- プログラムに責任を持ち、社会、環境、地域の問題に十分配慮すること
- 顧客の資金を守るため、関係する財務上の規制を遵守し安全措置を講じること



## • UCAS と大学の姿勢

ギャップ・イヤー制度については全体的に肯定的に受け止められている。それは、ギャップ・イヤー経験者は成熟度が高く、自立しており、確固たる目的を持っていることが多いためである。また、企業側がギャップ・イヤーで貴重な経験をした経験者を雇用する方向を打ち出しており、卒業後の就職が有望だからである。

ただし、大学側では遅延入学者の人数を定めていて、遅延希望者によるギャップ・イヤー活動計画によって遅延を許可するかどうかを判断している。そうすることでギャップ・イヤー活動計画が充実し、学生にも実りが多いものとなるからである。

また、大学での専攻と関連したギャップ・イヤー活動を検討している学生には支援を惜しまないと思われる。しかし、ギャップ・イヤー活動に対する大学の経済的支援はみられない。

## • 雇用側・企業の姿勢

### <イギリス>

雇用関係者は、ギャップ・イヤー活動について評価をするが、何を活動から学んだか、なぜその活動を行ったのかを明確にし、どういった学びが職場での場面に結びつくのか表現されていないと雇用に関わりつかないと考える。

CSV の調査によれば、有益なギャップ・イヤーを送った学生は職場での意思決定やコミュニケーション能力、対人関係構築において優れていると雇用関係者の 88%は判断している。また、ボランティア活動などで様々なスキルを獲得した学生は職場での昇進も早いと人事関係者の 79%が認めている。

エンジニア関連企業では、「イヤー・イン・インダストリー」プログラムに参加した学生を職場経験がある点で高く評価している。また、ギャップ・イヤー学生を受け入れることは職場の経営改革につながることもあり、受け入れ側にもメリットがあると評価されている。そのプログラムは産業界で実際の仕事を体験する国家プログラムであり、参加した学生の 26%が上位 10%のトップクラスの成績を収めている。

### <日本>

共同研究者の大佐古氏の報告書を参照のこと。

1. ソニー：フレックス・キャリア・スタート制度
2. キリンビール：キリンホールディングスが、社員が最長 3 年間休職できる制度を導入。  
この休職を適用できる 3 つの目的のなかに、「留学などの自己啓発」「ボランティア活動」が含まれている。

## • 社会の評価

ギャップ・イヤーを経験したからといって、包括的に参加者全員に成長があったとは断言しにくい。どういった活動をしてきたか参加者の努力に左右される。そして、ギャップ・イヤーを経験した人は、その後の人生がすっかり変わると評価されている。また、個人の成長が社会的利益につながることも考えられ、ギャップ・イヤーによる人生勉強は結果として社会のためにも必要だと思われる。

## ボランティアとギャップ・イヤーの連携

16歳から25歳までの若者は、まだ将来のキャリアを見つけるまでの途上で、行き先が見えていない状態である。学習・技術審議会（Learning and Skills Council: LSC）は、地域での建設的な活動に無報酬で従事する若者に役立つ制度があるべきだと考えている。

そのためにも、その解決法の一つとして、教育省が実施しているボランティア活動のための教育維持奨学金（Educational Maintenance Grant: EMA）の対象枠を広げ、自分に合った職探しをしている、あるいは、将来の目的も明確化していない若者がとる一種のギャップ・イヤーに相当する「ボランティア休暇（volunteering breaks）」も、この奨学金の対象に含めようと考えている。奨学金有資格者には、一定期間有給で就労する若者や教育や訓練を受けている若者も含まれる。

LSCは、企業に責任を持つ審議会で、ボランティア活動の経験を通じて被雇用者の潜在能力を引き出され、技術も習得されることを雇用者側に認識させることに力を注いでいる（Department for Children, Schools and Families: DfCSF）。

### <参考文献>

- BBC Online (2008a) "Higher Education". BBC Online Just the job. [online] Available from: <http://www.bbc.co.uk/wales/justthejob/he/gap.shtml> [accessed: 2008/1/7]
- BBC Online (2008b) "Take it from me...John Beaumont". BBC Online Just the job Higher Education. [online] Available from: [http://www.bbc.co.uk/wales/justthejob/takeitfromme/stud\\_johnb.shtml](http://www.bbc.co.uk/wales/justthejob/takeitfromme/stud_johnb.shtml) [accessed: 2008/1/7]
- BBC Online (2008c) "Take it from me...Rebecca Ann Etchells". BBC Online Just the job Higher Education. [online] Available from: [http://www.bbc.co.uk/wales/justthejob/takeitfromme/stud\\_rebecca.shtml](http://www.bbc.co.uk/wales/justthejob/takeitfromme/stud_rebecca.shtml) [accessed: 2008/1/7]
- Birch, E. R. and Miller, P.W. (2007) *Economic Record*. Vol. 83, Iss. 262, p329.
- Blackburn, G. A, Clark, G. and Pilgrim, D. (2005) "The gap year for geographers - Effects and paradoxes" (abstract). *GEOGRAPHY*. 90, pp32-41, Part 1.
- Bradford (2005) "Investing in your Future Information on Undergraduate Tuition Fees for 2006 entry". University of Bradford. [online] Available from: <http://www.eng.brad.ac.uk/downloads/booklets/fees-2006.pdf> [accessed: 2008/1/8]
- Churchill College (2006) "Decisions, decisions: Should I apply for deferred entry and take a Gap Year?" Churchill College Admission Information. [online] Available from: [http://www.chu.cam.ac.uk/admissions/undergraduates/decisions/gap\\_year/](http://www.chu.cam.ac.uk/admissions/undergraduates/decisions/gap_year/) [accessed: 2008/1/8]
- Gonville & Caius College (2005) "Deferred Admission - the Gap Year". Gonville & Caius College Admissions. [online] Available from: <http://www.cai.cam.ac.uk/admissions/subjects/engineering/gapyear.php> [accessed: 2008/1/8]
- Graduate Prospects (2005) "Assessing the benefits of a gap year". Graduate Prospects. [online] Available from: [http://www.prospects.ac.uk/cms/ShowPage/Home\\_page/Labour\\_market\\_information/Grad](http://www.prospects.ac.uk/cms/ShowPage/Home_page/Labour_market_information/Grad)

- uate\_Market\_Trends/Assessing\_the\_benefits\_of\_a\_gap\_year\_\_Spring\_05\_/p!efbdXXL  
[accessed: 2008/1/7]
- Heath, S. (2007) “Widening the gap: pre-university gap years and the ‘economy of experience’” (abstract). *BRITISH JOURNAL OF SOCIOLOGY OF EDUCATION*. 28, (1), pp89-103.
- HSBC (2008) “Gap Year Service” . HSBC Current accounts Student Banking [online] Available from:  
<http://www.hsbc.co.uk/1/2/personal/current-accounts/student-service/gap-year>  
[accessed: 2008/1/8]
- Inkson, K. and Myers, B.A. (2003) ‘ “The big OE” : self-directed travel and career development’ . *Career Development International*. 8/4, pp170-181
- Jones, A. (2004) “Review of Gap Year Provision” . *Department for Education and Skills*. London
- 光陵女子短期大学(2008) “The KORYO Gap Year” . 光陵女子短期大学 学科教育制度 [参照 URL]  
<http://koryo.nucba.ac.jp/kyoiku/kyoiku/index.html> (2008/1/8 アクセス)
- Manchester (2007) “Taking time out after graduation” . The University of Manchester Careers Service. [online] Available from:  
<http://www.studentnet.manchester.ac.uk/careers/downloads/publications/startingpointseriesofhandouts/takingtimeoutaftergraduation/fileuploadmax10mb,117461,en.pdf>  
[accessed: 2008/1/8]
- 名古屋商科大学(2008) “NUCB Gap Year Program” . 名古屋商科大学 学部教育制度 国際交流 海外留学 [参照 URL] <http://www.nucba.ac.jp/faculty/international/gapyear.html>  
(2008/1/8 アクセス)
- Pollitt, D. (2006) “Go, Give and Grow draws brightest and best to P&G” . *Human Resource Management International Digest*, Vol.14, No.2, pp29-31
- Pullin, J. (2002) “Bright kids on the block” . *Professional Engineering*. Vol.15, Iss.17, pp26-27. [online] Available from:  
<http://proquest.umi.com/pqdlink?did=207612751&Fmt=3&clientId=12449&RQT=309&VName=PQD> [accessed: 2007/11/21]
- UCAS (2008a) “Accepted applicants deferring for one year” . *UCAS Statistics online Data tables*. [online] Available from:  
[http://www.ucas.ac.uk/he\\_staff/stat\\_services1/stats\\_online/data\\_tables/abusdefer/](http://www.ucas.ac.uk/he_staff/stat_services1/stats_online/data_tables/abusdefer/) [accessed: 2008/1/7]
- UCAS (2008b) “UCAS Gap year: Questionnaire” . *UCAS gap year*. [online] Available from:  
<http://www.ucas.com/gap/gapyear-questions.htm> [accessed: 2008/1/8]
- Wraige, H. (2004) “Gap-year greats” . *PROFESSIONAL ENGINEERING*. Vol.17, Iss.16, p43. [online] Available from:  
<http://proquest.umi.com/pqdweb?did=711276011&Fmt=3&clientId=12449&RQT=309&VName=PQD> [accessed: 2007/11/21]

## 編集後記

本研究は平成 19 年度及び平成 20 年度にわたる長期の研究となりましたが、その中で共同研究者には重責ある、また、貴重な調査を実施していただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。一部の研究者には、短期間に数多くの大学や支援団体への訪問を実施していただきました。その成果が、本報告書に十全に現わされていることを願っております。

また、訪問調査を実施致しました際に、快く訪問をお受けいただきました諸先生方、また、ボランティア・センターの関係者の方々、また、学生の皆さん、RIHE の立石くん、井上くん、田中くん、また、職員の方々にも、改めて、この場を借りまして深くお礼申し上げます。

このように皆様のご協力のもと、本報告書が完成いたしました。その、成果が結実するまでには、まだ長い道程が必要なようです。

最後に、今回の国内の訪問調査におきまして、特に印象の深かった立命館大学の中村正教授と京都 NPO センターの深尾理事のお言葉をここに記させて頂き、本報告書の〆とさせていただきます。

・大学間協働、そして、市民社会との協働がなければ、本当の意味での学生の成長は望まれない。また、市民の「民度」が高くなければ、大学そのものの質も高くはならない、といった中村先生のお言葉と、

・以下、深尾理事のお言葉、

「専門性とか大学という資源を持って町に出て、そことの知の往復をどうするか。経験と知の往復をいかに組織できるかということが非常に重要で、そのようにやっていると本当に学生は育つんですね。学生達はやっぱり町に帰ってられながらいろんなことをやりますから。それと、アカデミックな世界が、どういう連携の中で（ギャップ・イヤーといった）そういうプログラムを開発できるかというのは、教員の資質が本当に求められるのです」

「僕が教えている学生なんかでも、必死にバイトしてるんです。「先生、バイトするから授業来なくていいですか」って。「いいよ」と。僕は「いいよ」と言うんだけど、「何で？」と聞いたら、「実はちょっとここで集中的にバイトして、夏休みに地雷を取りに行きたいんです」と。「ああ、そう。だけど危ないんじゃないの？」「いや、地雷を撤去するのはプロにしかできないんだけど、その地雷で足を失くした子ども達なんかに通う学校の修理をしたりとか、そういう学校で子ども達と遊んだりとか、そんな後方支援だったら自分達でできるので行きたいんです」と。「おお、そうか。じゃあ、頑張ってバイトしろ」とか言って。「もういい、授業なんて。そのレポートを書け」って」

30 万人の留学生を受け入れる形もありますが、上記の様な形での国際交流や大学の国際化も十分に考えられるのではないかと、思われます。

このお二人の言葉に励まされ、これからの坂道も登って行こうか、と考える今日この頃です。本報告書に対するご意見等御座いましたら、是非、お知らせ下さい。お待ち致しております。

（文責： 秦由美子）

英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する  
長期に渡る社会経験を可能とする取組みに関する調査研究

文部科学省平成 19 年度及び平成 20 年度先導的の大学改革推進委託事業  
最終報告書

平成 21 年 3 月 31 日

発行： 広島大学高等教育研究開発センター  
〒739 - 8512 東広島市鏡山 1-2-2